秋田県文化財調査報告書第193集

国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

－上ノ山Ⅱ遺跡第２次調査－

秋田県埋蔵文化財センター

１９９０・３

秋田県教育委員会

国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

－上ノ山（かみのやま）Ⅱ遺跡第２次調査－

１９９０・３

秋田県教育委員会

縄文時代早期の土器(第Ⅰ群土器) 上(表) 下(裏)

縄文時代早期の土器(第Ⅰ群土器) 上(表) 下(裏)

中高石皿

出入口をもつ竪穴住居跡（ＳＩ15・64）

序

豊かな自然に恵まれた秋田県には、我々の先人達が営々と築き上げてきた歴史があります。地中に刻まれた埋蔵文化財もその歴史遺産の一つであります。

このたび、国道103号道路改良事業に係り、大館市山館に所在する上の山Ⅱ遺跡が発掘調査の対象となりました。同事業に伴う上ノ山Ⅱ遺跡の調査は、昭和62年に実施されていますが、今回は計画道路の拡幅に拠り第2次の調査となったものです。

その結果、縄文時代後期～晩期の竪穴住居跡、土坑などの遺構、早期～晩期の遺物が出土しました。遺構では、出入口を持つ竪穴住居跡、遺物では縄文時代早期の貝殻文土器は、県内でも類例の少ない資料であります。

本書はこれらの成果をまとめたものであり、地域史解明と文化財に対する理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後に、本調査及び報告書作成に際し、ご協力戴きました関係機関、各位に対し深く感謝の意を表します。

平成2年3月1日

秋田県教育委員会

教育長 橋本顕信

例　言

1　本報告書は一般国道103号道路改良事業に係る上ノ山Ⅱ遺跡第２次発掘調査報告書である。

2　本遺跡で出土した陶磁器の鑑定は、佐賀県立九州陶磁文化館 大橋康二氏にお願いした。
また、石器・石製品の石質同定は、秋田県立博物館 佐々木厚氏によるものである。

3　本調査及び報告書作成にあたり、下記の方々から御助言、御指導、協力を賜った。
板橋範芳、宇部則保、工藤竹久、高橋亜貴子、成田誠治、藤田俊雄
奥山文子、斎藤美江子、川原竜子、本間美紀子

4　本報告書の執筆・編集は高橋学が行い、藤原司の協力を得た。

凡　例

1　検出遺構に使用した略号は次の通りである。
ＳＩ（竪穴住居跡）、ＳＫ（土坑）、ＳＲ（土器埋設遺構）
ＳＤ（溝跡）、ＳＸ（石組炉、竪穴状遺構、畑跡）

2　遺構平面図、断面図の縮尺は、土器埋設遺構、竪穴住居跡の炉（1／20）以外は1／40である。地形図は約1／2000、遺構配置図は1／400である。その他については、個々に縮尺率を明示してある。

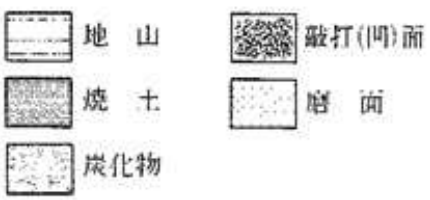
3　遺物実測図の縮尺は、土器・土製品1／2.5、石器・石製品1／2、礫石器1／3である。

4　出土遺物は、種別・器種を問わず一連の番号を付し、挿図、写真図版とも対応できるように統一してある。

5　土器断面図にドットのスクリーントーンを貼付してあるのは、胎土に繊維を含む土器であることを示しており、同じく黒塗りは須恵器を指す。

6　土層註記における色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修による『新版標準土色帖』を用いている。

7　挿図中に使用したスクリーントーンは、以下のとおりである。



目　次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章　はじめに・・・・・1

第1節　発掘調査に至るまで・・・・・1

第2節　調査の組織と構成・・・・・1

第2章　遺跡の立地と環境・・・・・2

第1節　遺跡の位置と立地・・・・・2

第2節　歴史的環境・・・・・2

第3章　発掘調査の概要・・・・・6

第1節　遺跡の概観・・・・・6

第2節　調査の方法・・・・・7

第3節　調査経過・・・・・8

第4章　調査の記録・・・・・11

第1節　検出遺構と遺物・・・・・11

第2節　遺構外出土遺物・・・・・36

第5章　まとめ・・・・・74

図版1～29

挿図目次

第1図　遺跡の位置と周辺地形図
第2図　周辺遺跡分布図
第3図　遺跡基本土層図
第4図　グリッド配置図
第5図　遺構配置図
第6図　竪穴住居跡（1）S I 15・62
第7図　竪穴住居跡出土遺物
第8図　竪穴住居跡（2）S I 29、S K59土坑
第9図　竪穴住居跡（3）S I 30・31
第10図　竪穴住居跡（4）S I 55・63
第11図　土坑（1）S K13・16・17
第12図　土坑（2）S K32～34・51
第13図　土坑（3）S K35・43～45・54・57
第14図　土坑（4）S K22・25・38～41
第15図　土坑（5）S K26・42・48・52・53・64
第16図　土坑（6）S K20・49・60、S D46
第17図　土坑内出土遺物（1）
第18図　土坑内出土遺物（2）
第19図　土器埋設遺構　S R10
第20図　石組炉　S X14
第21図　竪穴状遺構（1）S X11・18
第22図　竪穴状遺構（2）S X12
第23図　遺構外出土土器時期別分布図（1）
第24図　遺構外出土土器時期別分布図（2）
第25図　遺構外出土遺物(1)・土器(1)第Ⅰ群土器(1)
第26図　遺構外出土遺物(2)・土器(2)第Ⅰ群土器(2)
第27図　遺構外出土遺物(3)・土器(3)第Ⅱ群土器(1)
第28図　遺構外出土遺物(4)・土器(4)第Ⅱ群土器(2)
第29図　遺構外出土遺物(5)・土器(5)第Ⅱ群土器(3)
第30図　遺構外出土遺物(6)・土器(6)第Ⅱ群土器(4)
第31図　遺構外出土遺物(7)・土器(7)第Ⅲ群土器
第32図　遺構外出土遺物(8)・土器(8)第Ⅳ群土器(1)
第33図　遺構外出土遺物(9)・土器(9)第Ⅳ群土器(2)、第Ⅴ群土器(1)
第34図　遺構外出土遺物(10)・土器(10)第Ⅴ群土器(2)
第35図　遺構外出土遺物(11)・土器(11)第Ⅴ群土器(3)
第36図　遺構外出土遺物(12)・土器(12)第Ⅴ群土器(4)
第37図　遺構外出土遺物(13)・土器(13)第Ⅴ群土器(5)
第38図　遺構外出土遺物(14)・土器(14)第Ⅴ群土器(6)
第39図　遺構外出土遺物(15)・土器(15)第Ⅵ群土器、土製品
第40図　遺構外出土遺物(16)・石器(1)石鏃、石槍、石錐、トランシェ様石器
第41図　遺構外出土遺物(17)・石器（2）箆状石器（1）
第42図　遺構外出土遺物(18)・石器（3）箆状石器（2）
第43図　遺構外出土遺物(19)・石器（4）箆状石器（3）、石匙（1）
第44図　遺構外出土遺物(20)・石器（5）石匙（2）
第45図　遺構外出土遺物(21)・石器（6）石匙（3）、掻器・削器（1）
第46図　遺構外出土遺物(22)・石器（7）掻器・削器（2）
第47図　遺構外出土遺物(23)・石器（8）半円状扁平打製石器
第48図　遺構外出土遺物(24)・石器(9)擦石、石錘、凝石
第49図　遺構外出土遺物(25)・石器(10)凹石（1）
第50図　遺構外出土遺物(26)・石器(11)凹石(2)磨石、敲器
第51図　遺構外出土遺物(27)・石器(12)石皿
第52図　遺構外出土遺物(28)・石器(13)石斧、石製品(1)
第53図　遺構外出土遺物(29)・石製品(2)円盤状石製品

第1章　はじめに

第1節　発掘調査に至るまで

国道103号道路改良事業（通称、大館南バイパス）は、大館市内の交通混雑の緩和を目指し、昭和55年より国の補助事業として進められている。大館市山館から片山（根下戸）を結ぶ延長7,677mの計画路線内には、教育庁文化課及び秋田県埋蔵文化財センターによる分布調査、範囲確認調査の結果、南から上ノ山Ⅱ遺跡、上ノ山Ⅰ遺跡、餌釣遺跡、山王偕遺跡、上野遺跡、池内遺跡、萩ノ台遺跡の7遺跡が存在することが明らかとなっている。教育庁文化課は、原因者である県土木部道路課との協議の結果、「範囲確認調査の結果、記録保存の必要なものについては発掘調査を実施すべき」ことを回答した。

これを受けて、秋田県埋蔵文化財センターは、昭和62年に上ノ山Ⅰ遺跡、上ノ山Ⅱ遺跡、山王偕遺跡の発掘調査を実施し、昭和63年に調査報告書、概報を刊行している。

同昭和63年、道路改良事業の計画変更が、拡幅という形で示され、昭和62年に調査した3遺跡についても追加調査の必要が生じることとなった。これにより、用地買収の終了している上ノ山Ⅱ遺跡と山王偕遺跡の第2次調査が平成元年に実施されることになった。

第2節　調査の組織と構成

所在地	大館市山館字上ノ山17－1外
調査期間	平成元年5月29日～7月15日
調査目的	国道103号道路改良事業に係る事前調査
調査面積	3,320㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	高橋　学（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）
	藤原　司（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
総務担当者	佐山　茂（秋田県埋蔵文化財センター主査）
	高橋忠太郎（秋田県埋蔵文化財センター主事）
調査協力機関	県土木部北秋田土木事務所、大館市教育委員会、比内町教育委員会
	比内町公民館

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の位置と立地

上ノ山Ⅱ遺跡は、秋田県北東部の大館市山館に所在する。この位置を鉄道で言えば、ＪＲ奥羽本線大館駅から南南東約6.5km、最寄駅ではＪＲ花輪線扇田駅(比内町)の北東約1.3kmにあたる。遺跡の占地する山館は、大館市東部に位置する高森（海抜593ｍ）を中心とする山地の縁辺部に位置する。地質的にこの山地は、新第三系大滝層あるいは大荷層以下の地層の構造形態に規制され高森を中点とする半径およそ５kmの同心円を描くような形状を示している。遺跡地は高森から見れば南西縁辺部にあたり、ここには未発達ながらも十和田火山噴出物とその二次堆積物からなる第四系関上段丘が認められる。関上段丘面は、上ノ山Ⅱ遺跡周辺では、北西に隣接する上ノ山Ⅰ遺跡、中世城館の山館跡を含む標高およそ95ｍ未満の狭い範囲内に限られている。

遺跡、調査地での標高は71－78ｍ、比高差約15ｍの眼下にはわずかな沖積地を挟んで米代川が北流している。米代川までの距離は400ｍ余りである。

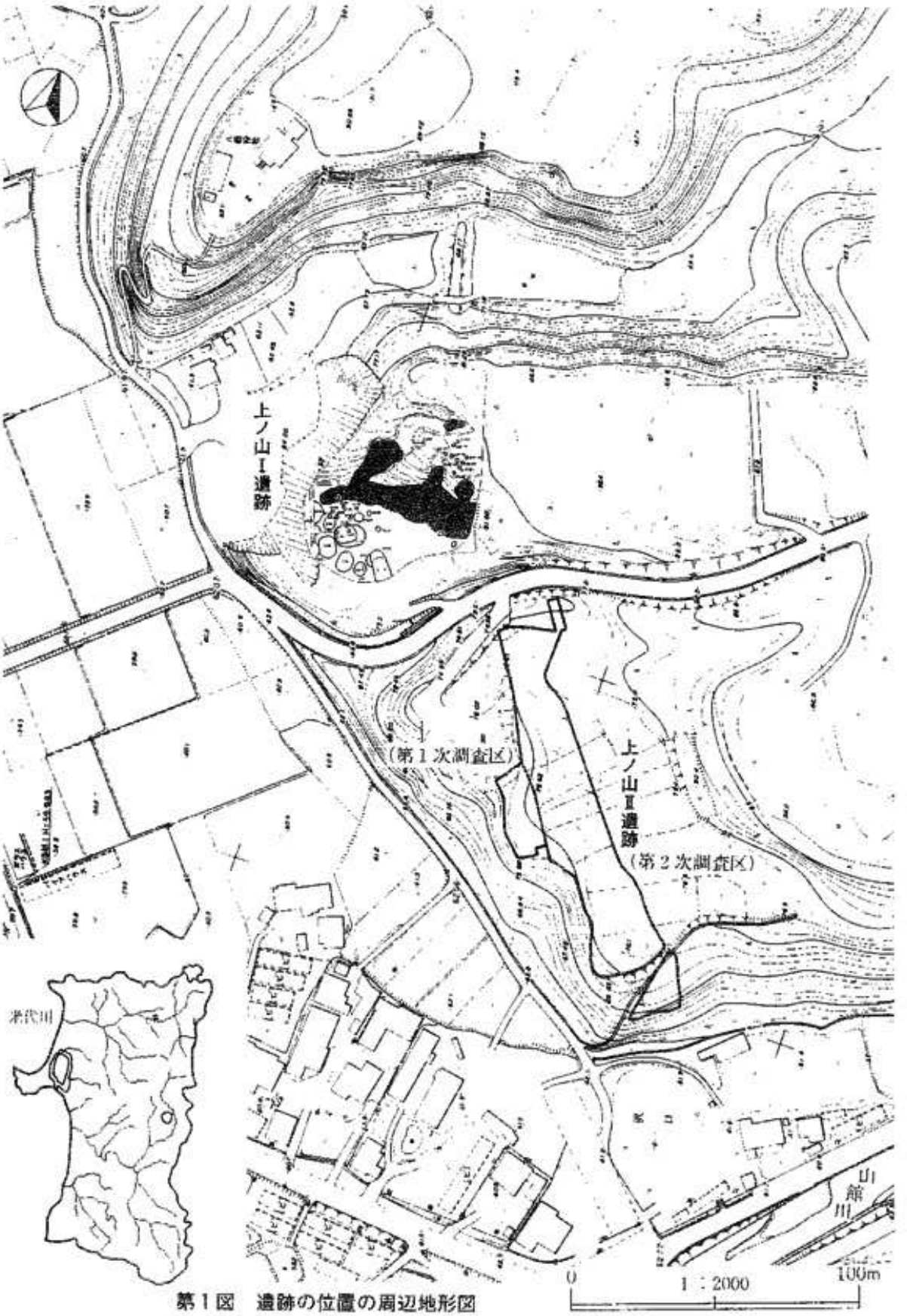
第２節　歴史的環境

上ノ山Ⅱ遺跡を包括する大館・北秋田地域には、旧石器時代から人々の生活が営まれており、その一部は、遺跡として我々の前に姿を現してくれる。周辺遺跡の概観については、上ノ山Ⅰ・Ⅱ遺跡の第１次調査報告書において詳述されている。本節では、重複を避けるため第２図に示した図幅に収まる範囲内で、同遺跡第１次調査以降に発掘調査あるいは発見された遺跡について触れてみたい。

昭和63年には、大館市教育委員会により発掘調査が行われた山王台遺跡（６）がある。同遺跡は中世城館跡釣館（＝山王館遺跡）の北側に隣接している。調査の結果、平安時代の竪穴住居跡が９軒検出され、十和田火山起源の火山灰の堆積状況から、遺跡の下限時期を10世紀前半に置くことができるという。

平成元年には下記の遺跡が調査・発見されている。

国道103号道路改良事業関係では、山王館遺跡（５）が昭和62年に引き続き、平成元年に第２次調査が実施されている。第１次調査で確認した３条の空堀の延長部分調査及び、平安時代の竪穴住居跡１軒などが検出されている。また山王館遺跡以西の分布・範囲確認調査を行い、



第1図　遺跡の位置の周辺地形図

■ 本節で取り上げた遺跡（１～９）
▼ 縄文早期貝殻文土器を出土した遺跡（10～13）
● その他の縄文～平安時代の遺跡（14～62）
○ 中世城館（３、４、９、63～83）

10、50～60は比内町所在の遺跡、
他は大館市所在の遺跡

第２図　周辺遺跡分布図

周知の遺跡である萩の台遺跡（35）との間に縄文時代の上野遺跡（7）を新たに確認している。

諏訪台C遺跡（8）は、釈迦内地区農免農道整備事業に係る発掘調査である。殊に県内では検出例の少ない弥生時代初頭（砂沢期）の竪穴住居跡が4軒確認されたことの意義には大きいものがある。また、国道7号道路改良事業に係り、周知の遺跡である片山館コ遺跡（9）も発掘調査され、館南端の空堀の一部を検出している。

第1表　上ノ山Ⅱ遺跡周辺の主な遺跡一覧

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	上ノ山Ⅱ	縄文(早～晩)	44	野沢袋A	縄文(中、後)
2	上ノ山Ⅰ	縄文(早～晩)、弥生	45	冷水山根Ⅱ	縄文(前)
3	山館	中世	46	冷水山根Ⅰ	縄文(前、中)
4	餌釣館	中世	47	野沢袋B	縄文、平安
5	山王岱	縄文、平安、4と重複	48	下堂Ⅰ	縄文(中～後)
6	山王台	平安	49	下堂Ⅱ	縄文(前)
7	上野	縄文	50	市川	平安
8	諏訪台C	縄文(後～晩)弥生、平安	51	本道端	縄文(前、中)
9	片山館コ	中世、弥生～平安	52	横沢	縄文(前)
10	横沢	縄文(早、中、後)、平安	53	袖ノ沢	平安
11	野沢袋C	縄文(早、前)	54	館内中袋	縄文(前)
12	鶏ケ長根Ⅲ	縄文(早、晩)	55	味噌内	縄文(後)
13	鶏ケ長根Ⅳ	縄文(早、後)	56	珠数掛	縄文(晩)
14	木郷下	縄文(晩)	57	細越	平安～
15	大森	縄文(前)	58	畑沢	縄文(晩)
16	十二森	縄文	59	一通	縄文(晩)
17	釈迦湖底	縄文(前～晩)	60	五輪台	縄文(晩)
18	福館・鶏舞野	縄文(前、中)、弥生～平安	61	本宮	縄文(晩)
19	芝谷地	縄文(後)	62	薬師袋	平安
20	松木	縄文(前)	63	福館	
21	鍛冶屋敷Ⅰ	平安	64	七ツ館	
22	鍛冶屋敷Ⅱ	縄文(後)	65	花岡城	
23	沼館	縄文(後)	66	女日館	
24	赤石沢	縄文(中～晩)	67	松木高館	
25	餅田屋布遠	縄文(前)	68	釈迦内館	
26	羊堀沢	縄文(前、中)	69	沼館	
27	大茂内	縄文(晩)	70	押館	
28	諏訪台B	平安	71	上飛山館	
29	諏訪台A	縄文(中)	72	大館城	
30	小茂内沢	縄文	73	小館花館	
31	塚の下	縄文(後)、平安	74	館崎館	
32	小寄沢	縄文(晩)	75	大披館	
33	茂内	縄文(前)	76	大子内館	
34	長根山公園	縄文(晩)	77	杉沢館	
35	萩の台	縄文(中)	78	前田館	
36	池内B	縄文(前～後)	79	本宮館	
37	池内A	平安	80	新田館	
38	羽立	縄文(晩)	81	八木橋城	
39	兎沢	縄文	82	笹館城	
40	亀毛袋	縄文(中、後)、平安	83	長岡城	
41	榎殿	縄文(中)	84	真館	
42	中山	平安	85	大滝古館	
43	野沢袋D	縄文(前？)			

第３章　発掘調査の概要

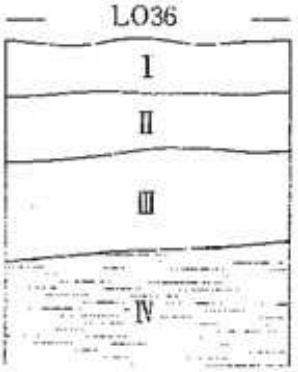
第１節　遺跡の概観

上ノ山Ⅱ遺跡は、岡上段丘と呼ばれる第四系火山噴出物からなる台地端部に立地していることは、前述のとおりである。この台地は概ね北東から南西に緩く傾斜しており、調査区地山面での最高位は77.7ｍ（ＬＮ65グリッド、第４図参照）、最低位は71ｍ（ＬＭ32グリッド）である。

遺跡眼下の沢口という集落の名からも明らかなように、遺跡の占地している台地の南端は山館沢と呼ばれる大きな侵蝕谷に画されている。一方北端は、現在大館市山館上水道に上がる道路（小さな沢）で、上ノ山Ⅰ遺跡との境でもある。その間約150ｍは、先端部が直線的な台状台地の様相を呈している。縮尺率の小さい地形図、例えば第１図の地形図などには明瞭に現れていないが、調査対象となった長さ（幅）約150ｍの台地先端部にも中小の沢が入り込んでいることが現況観察及び発掘調査により確認されている。その沢は、調査区北側と中央部に山館沢と平行するように各１本（沢１、沢２と仮称する）、調査区南端部では、山館沢と直交するように１本（沢３）、計３本を確認している。沢２、３は現認できず発掘調査の結果、沢であることが明らかになったものである。

遺跡の現況は、調査区の南北両端部、グリッドで言えば56ライン以北と35ライン以南が杉林、その間が畑地、荒地となっている。

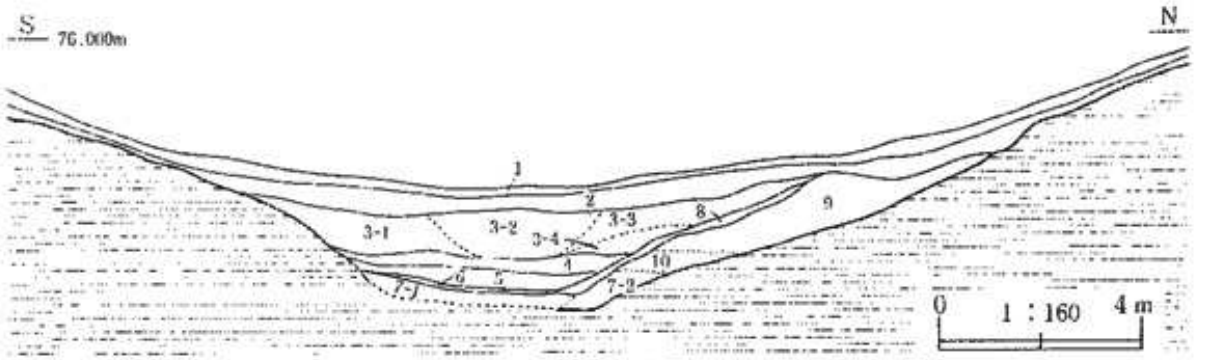
遺跡基本層位は、調査区の過半数を占める畑地部分の耕作等による削平に伴い、基本土層を観察できる箇所は著しく限られる状況であった。この中において、調査区南側35・36ライン周辺は堆積層が比較的厚く、ＬＯ36グリッドで観察した結果を第３図（１）に示す。また調査区北側の杉林部分に存在する沢１の南北方向に設定したトレンチ壁での土層観察を併せて以下に記する。なお、ＬＳ52・ＭＡ52グリッドにおける遺跡基本層位は、第１次発掘調査報告書（Ｐ197）を参照いただきたい。



Ⅰ層：表土、耕作土
Ⅱ層：黒褐色（10YR3/2）～暗褐色（10YR3/3）Ⅲ層との境は漸移している
Ⅲ層：黒褐色（10YR2/2）～黒色（10YR2/1）遺物包含層
Ⅳ層：明黄褐色（10YR6/8）～黄褐色（10YR5/8）同層以下が地山、ここでは結晶土であるが場所によってはにぶい黄橙色（10YR7/2～7/4）を呈する砂質の風化軽石層（シラス層）を観察できる

0　1：40　1ｍ

第３図（１）　遺跡基本土層図　柱状図



第3図(2)　遺跡基本土層図　沢1南北断面図

1層：表土、腐食土層（以下、土色は湿潤状態で観察している）

2層：暗褐色(10YR3/3)　地山(風化軽石)粒子をしもふり状に少量含む

3層：黒褐色(10YR2/2)　3－1層、地山粒子をしもふり状に少量含むが北側程少なくなる　3－2層、地山粒子を殆ど含まない、植物根多い　3－3層、地山粒子微量混入、植物根やや多い　3－4層、地山粒子、植物根共に他分層より多い

4層：黒色（10YR2/1）　しまり弱、混入物殆どない、この層以下が保水層か

5層：黒褐色（10YR3/1）　しまり弱、植物遺存体を少量含む

6層：にぶい黄橙色（10YR7/2）　風化軽石(φ2～3㎜)単層、砂層様である

7層：褐色（7.5YR4/4）　泥炭層、7－2層は7－1層より植物遺存量が少ない

8層：にぶい黄褐色(10YR5/3)　基本的に6層と同じ、6層より黄味強く、粒径やや小さい

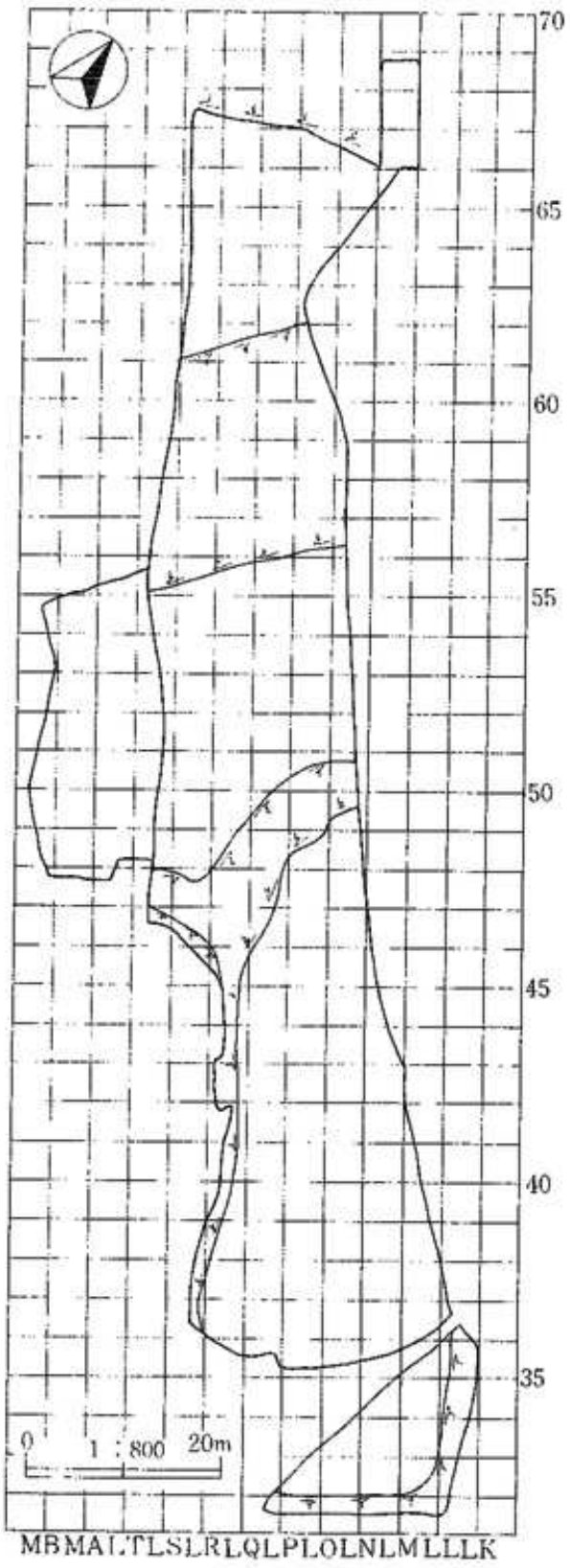
9層：黒褐色(10YR2/3)　地山粒子(φ2～8㎜)をしもふり状に比較的多く含む

10層：黄褐色（10YR5/6)、灰黄褐色(10YR5/2)　地山粘土の2次堆積

第2節　調査の方法

前述のように上ノ山Ⅱ遺跡第2次調査区は、第1次調査区の東側に隣接した箇所であり、検出遺構、遺物の位置関係などは第1次調査分と比較、対照の必要がある。従って第1次調査において採用した4×4mグリッド法を踏襲し、各方眼杭に与えられるアルファベットと算用数字の組み合わせによる呼称も前例に習った。任意の原点（MA50)から南北方向に設定された基準線は真北から西に33° 55′偏している。

検出遺構に付される番号は、第1次調査において1桁台を使用しており、混同を避けるため第2次調査では2桁、10番以降を用いることとした。この番号は、遺構の種別を問わず一連としてある。番号登録後、遺構とは認められなかったもの(例えば倒木痕)については、これを欠



第4図　グリッド配置図

番としている。

図面、写真などの調査の記録方法については、秋田県埋蔵文化財センターで実施している方法に準拠している。

第3節　調査経過

5月29日、調査開始。発掘作業員へ調査方法などの説明を行い、午後に調査区内の下草刈り、及び搬入された器材の整理で初日の作業を終了する。30日、調査区北側、上ノ山Ⅰ遺跡寄りには東西方向の沢が入っているが、この沢が"捨場"であった可能性があるため、沢筋(東－西)に添って幅2mのトレンチを設定し掘り下げに入る。同日、委託によるグリッド杭の打設始まる。31日、沢部の既設トレンチに直交するトレンチを設定し掘り進む。出土遺物は須恵器、縄文土器(後期)、フレークなど数少なく、上ノ山Ⅰ遺跡のような前期の"捨場"ではなさそうである。6月1日、沢部の十字状のトレンチは地山面(砂礫層)まで約2mあることが判明する。湧水著しく下部の土層を詳細には観察できなかったが、地山直上には薄い泥炭層が形成されていた。この泥炭層上の黒色土中より、県内では検出例の少ない中高石皿が出土している。調査区南側の畑地部分の粗掘りも開始する。LQ39には、石製の小さな祠が3基あり、周辺からこれに関連した鉄製の鳥居、陶製の"お稲荷さん""龍神さん"などの遺物を検出する。同日、比内町公民館館長出島氏来跡。

2日、沢部のトレンチ調査、土層断面図作成を終了し、来週からこの部分を土捨て場とする。5日、粗掘りは調査区中央ー南側の畑地と北側(沢1の北側)の杉植林地に分かれて行う。6日、久々の降雨あり、現場作業は午前中で終了する。8日、"お稲荷さん"が扇田神明社に移築されることが決まる(12日移築)。9日、調査区南端部の杉林部分については伐採が終了しておらず、調査に入れないでいたが、本日より原因者側による伐採が行われる。14日、数日来好天続きで仕事は順調であるが、ほこりが舞うのには閉口する。同日、伐採終了。

15日、調査区南側、LM36にて埋設土器を確認する。最初の遺構である。16日、調査区中央西側の段丘崖LQ41～44周辺では比較的多くの遺物が集中的に出土する。　出土位置と共伴遺物に現代の陶磁器などが含まれることなどから、畑耕作に先立って行われたであろう整地作業の際に包含層を含む土が西側の低い崖に押されたものと考えられる。

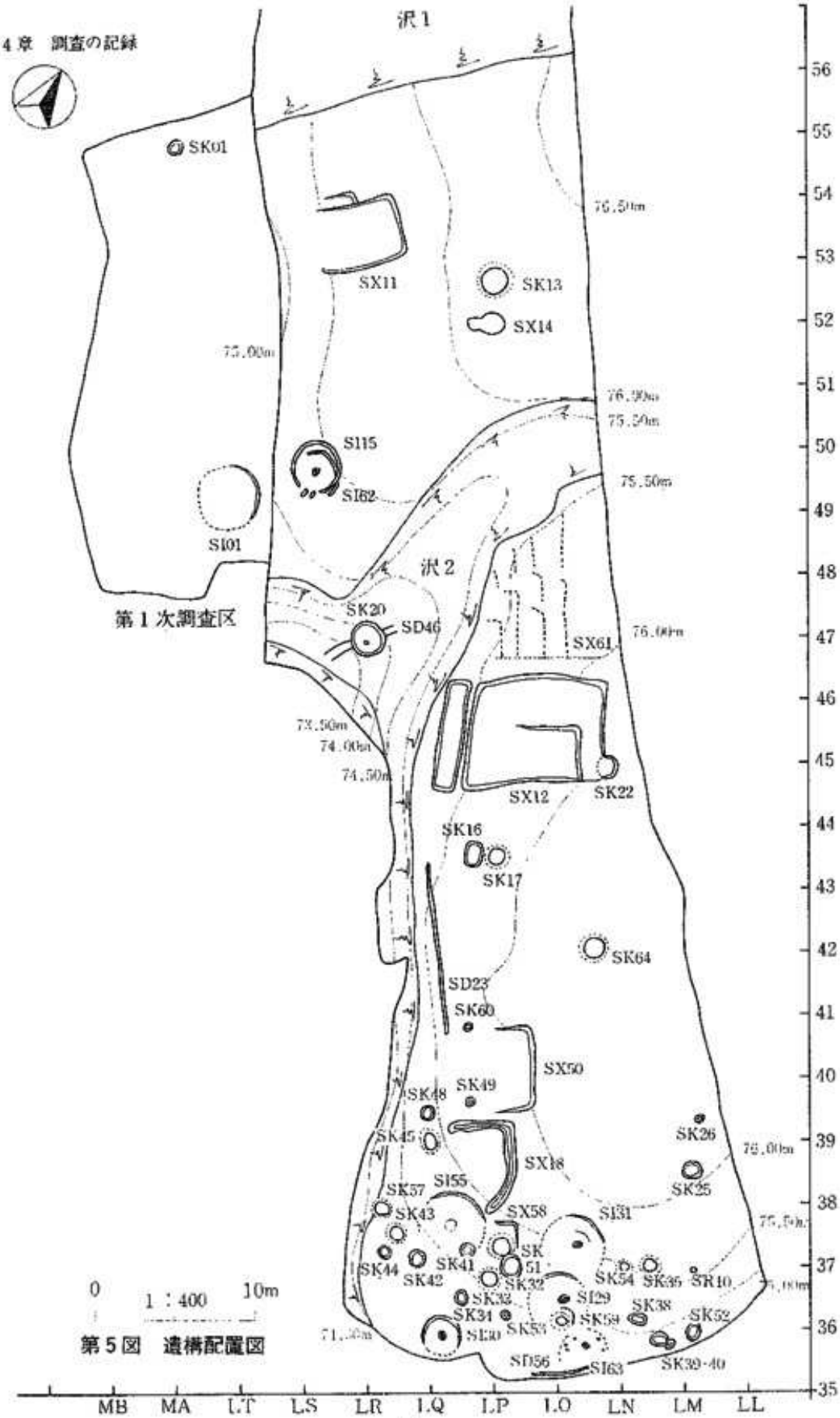
19日、LP36で石囲炉検出、竪穴住居跡に伴うもののようである。調査区南端部の杉林部分の粗掘りに入る。20日、粗掘りは36ライン以北についてはほぼ終了する。これと並行してジョレンがけによる遺構確認のための精査を行う。本日まで確認した遺構は、竪穴住居跡3軒、土器埋設遺構1基、土坑11基である。21日、昨日確認したLO36の竪穴住居跡にも石囲炉が伴うことが明らかとなる。沢部の土捨て場がいっぱいになってきたので、新たに南端部のから下の沖積面に排土を落とすべく細工を行う。22日～26日、調査区南端部の粗掘りを続行する。

27日、調査区中央部(およそ35～55ライン)での遺構確認状況の写真撮影を行う。これに先立つ精査によって、方形、長方形を呈する竪穴状の遺構を4基確認する。埋土の状態から新しい時期のものと思われるが、それ以外は全くの不明である。

29日、LO50を中心とする黒色土の円形プランは、壁溝を有する竪穴住居跡と分かり、SI15とする。中央部分には焼土、炭化物があり、炉と思われる。

7月3日、本格的に遺構精査(掘り下げ)に入る。調査区中央西側には段丘崖に平行して走る細長い溝を確認、SD23とする。LM40で、SK24土坑として掘り下げたものは、倒木痕であることが明らかとなり欠番としたが、この中から縄文時代後期～晩期の土器が出土している。6日、SI15の壁溝は思ったより深くしっかりしている。北側では溝が2重となっており、重複のある住居跡かもしれない。調査区北端部LO64でこの区域では唯一土器がやや集中している。縄文時代中期の土器であった。7日、SK49は小さな柱穴様の土坑であるが、平らな石が4枚底面近くに敷かれるように検出された。10日は雨のため現場での作業は中止する。11日、調査区南側で確認されたSD56は、地滑りなどに伴う地割れのようである。

13日、調査区全域を精査して全景写真撮影を行う。また米代川対岸から遠景写真撮影も合わせて実施する。14日、器材などは来週17日から調査を開始する山王台遺跡に運搬する。これをもって上ノ山Ⅱ遺跡の第2次調査を終了した。


沢1
沢2
SK01
SX11
SK13
SX14
SI15
SI62
SI01
第1次調査区
SK20
SD46
SX61
SX12
SK22
SK16
SK17
SK64
SD23
SK60
SX50
SK48
SK49
SK45
SX18
SK26
SK25
SK57
SI55
SK43
SX58
SI31
SK44
SK42
SK41
SK51
SK32
SK54
SK35
SR10
SK33
SI29
SK38
SK31
SI30
SK59
SK52
SD56
SI63
SK39-40
0
1：400
10m
MB
MA
LT
LS
LR
LQ
LP
LO
LN
LM
LL
56
55
54
53
52
51
50
49
48
47
46
45
44
43
42
41
40
39
38
37
36
35

第5図　遺構配置図

第4章　調査の記録

第1節　検出遺構と遺物

上ノ山Ⅱ遺跡第2次調査において検出した遺構は、竪穴住居跡7軒、土坑29基、土器埋設遺構1基、石組炉1基、竪穴状遺構5基、溝状遺構3条、畑跡1ケ所である。これらの遺構には、出土遺物がなく必ずしも時期を明らかにできないものもあるが、概ね縄文時代（前期～晩期）と近現代（後3者）の構築と考えている。

遺構の配置は、細長い調査区（グリッドでいう31～69ライン、第4図参照)のうち、中央から南側の35～55ライン内に限定される。更に遺構の集中する箇所は調査区南側の35～38ラインにあたる。

1　竪穴住居跡（第6－10図、図版5～8）

今次調査で確認した竪穴住居跡は7軒、第1次調査と合わせて上ノ山Ⅱ遺跡では合計8軒の竪穴住居跡が検出された。

竪穴住居跡の分布は、調査区中央西側（ＳＩ15・62、第1次調査のＳＩ01)、南側（ＳＩ29～31・55・63）の2つのまとまりが認められた。後者のうち、37ライン以南のＳＩ29・30については、表土から地山面(第Ⅳ層)までの堆積土が比較的厚く、地山面より1枚上の第Ⅲ層（黒褐色土層）において黒色土のプランとして遺構を確認できた。しかし他の住居跡は、耕作等による削平を受けており地山面もしくはある程度削平された地山面で検出している。

ＳＩ15、62（第6図、図版5、6）

調査区中央西側、ＬＲ49を中心とする位置で確認した。第1次調査で検出したＳＩ01は、南西わずか2ｍ余りの距離にある。精査の結果、ＳＩ64(旧)→ＳＩ15(新)2軒の重複であることが判明した。

ＳＩ15は、径295cmの整った円形を呈している。壁の立ち上がりは確認できず、幅8～15cmの壁溝で規模がわかる。壁溝の深さは8～30cmであるが、西側のそれは削平のためか10cm未満の数値を示している。壁溝は南側で約80cm途切れるが、この間には平面が楕円形の柱穴が2本（Ｐ1・2＝長径35～40cm、短径18cm、深さそれぞれ15cm、22cm）配されている。この2本の柱穴については、他遺跡との比較から出入口施設に伴う遺構と考えられる。

溝で囲まれた内側には、2ケ所に焼土、炭化物の広がりを確認できる。これはこれらの住居跡に伴う炉跡と考えられる。検出位置、重複から炉Ａが本住居跡に伴うものと考えている。炉Ａは長径125cm、短径90cmの炭化物の広がりの中に長さ50cm、幅30cmの焼土の分布があるが、両

者ともその分布は密ではなく、かつ掘り込みを伴うものでもない。炉Aのレベルから床面は、地山面より1枚上の黒褐色土中と見られるが、面としては確認できなかった。

床面にP5～10、住居外にP11～14の柱穴が存在するが、これらが2者いずれかの住居跡に伴うものか、全く別の遺構のものかは明らかにし得なかった。柱穴の深さはP6～10で6～20cm、P5、P11～14で32～47cmである。

遺物は、北側の壁溝内より縄文土器細片が1点（第7図1）出土している。

SI62は、SI15壁溝及び炉Aを精査中に、これと同形態の住居跡がわずか50cm前後南にずれて構築されていることが明らかとなったものである。北～北東部に残る壁溝と、SI15のP1・2対応する楕円形の柱穴（P3・4＝推定長径35cm、短径15～20cm、深さそれぞれ11cm、15cm）の位置と合わせてみると本住居跡の規模は、SI15と同じか、やや小さく径280cm前後と推定できる。残存する壁溝は、幅8～15cm、深さ6～12cmである。

炉は、SI15炉Aの南側に炭化物の広がりが認められ、精査により長径80cm、短径65cmの最深で10cmの掘り込みを伴う施設であることが判明した(炉B)。炉底・側面は南側のみ幾らか焼けており、北側側面には焼けた小さな礫が1点認められるが、これだけで石を伴う炉であるか否かについては言及できない。床面は地山面と考えられるが、現況ではあまり平坦とは言えず小さな凹凸が多い。遺物は出土しなかった。

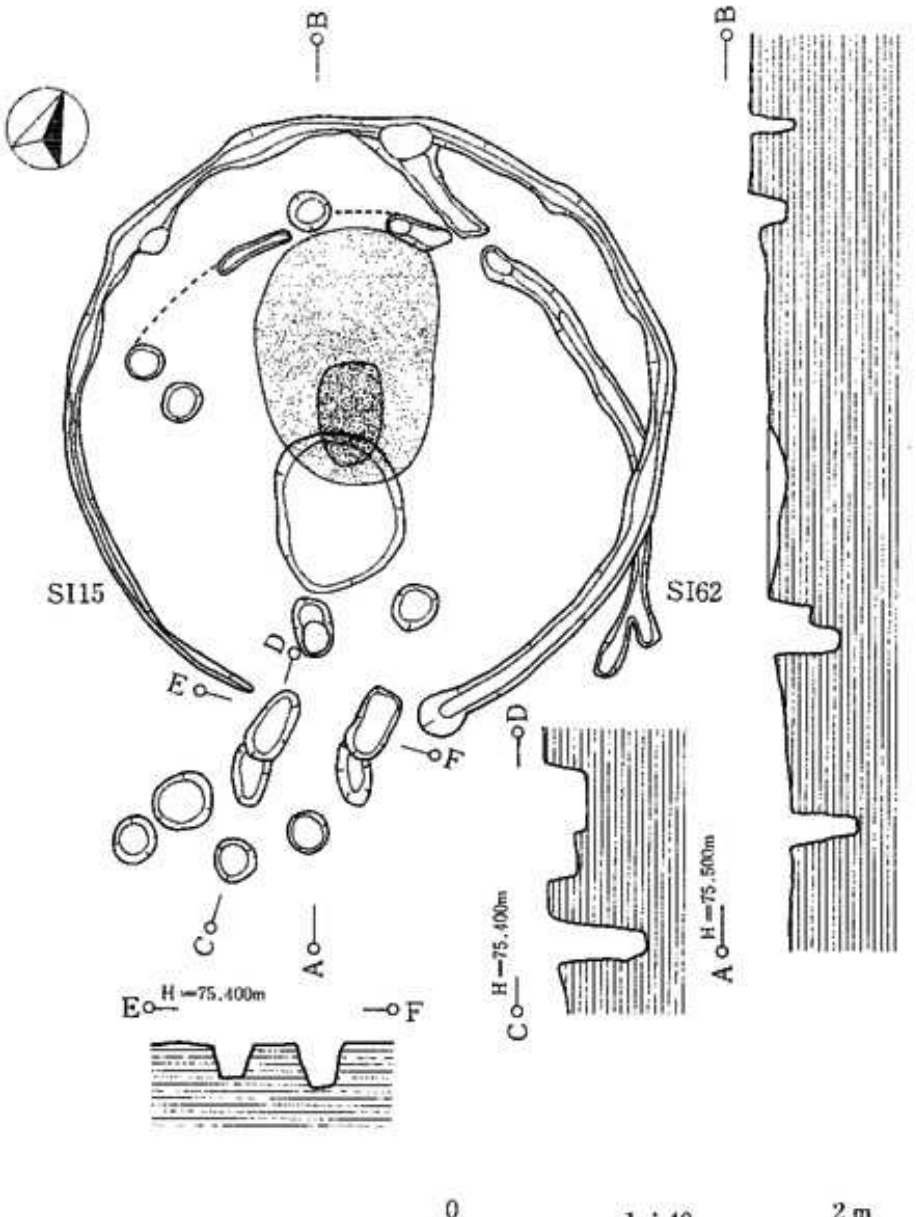
SI29（第8図、図版7、8）

調査区南側、LN・LO36で確認した。住居跡南東部でSK59としたフラスコ状土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

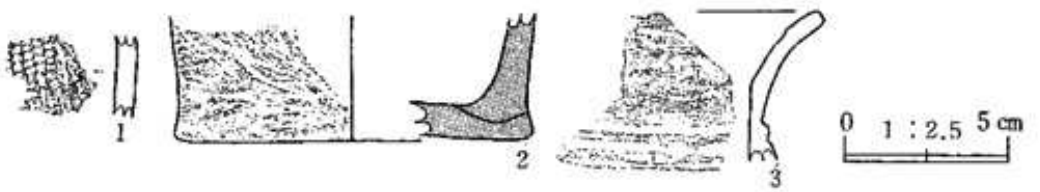
遺構確認面は第Ⅲ層黒褐色土中で、径約3.7mの黒色略円形プランを見いだしていたが、地山面まで掘り下げると殆ど壁は消失してしまう。最終的な遺構構成要素は、壁溝、柱穴、石囲炉のみである。

壁溝は、およそ全体の1／4を検出した。全周していたとしても残りは、溝底面が黒色土中にあり確認できなかったものと思われる。その幅は8～20cm、深さわずか6～10cmであるが、溝底面に深さ16～28cmの小さな柱穴が幾つか確認できる。住居跡内部には主・支柱を成していたと考えられる柱穴が8本（P1～8）見いだせるが、全体に北側に寄っている。柱穴は径約20～30cm、深さは13cm(P2)～27cm（P3）で、平均19.5cmである。

住居跡ほぼ中央には、石囲炉が位置している。一部石(礫)が欠落しているものの径約70cmの円形を呈する形態である。長さ15～20cmの比較的等大の礫をおそらくは13個(現存10個)揃えて配したものと考えられる。炉構築にあたっては、掘り込みを行わず地山面に黒色土を3～4cm貼るか、当初より掘り残すかして、この面に礫を置いている。この面が床面と同一視できる。炉底面がシルト質の黒色土であるためか、幾らか焼土の分布は認められるものの、いわゆる焼



第6図　竪穴住居跡(1) SI 15・62



番号	出土位置	文　様	胎土・焼成・備考	分　類
1	S I 15覆溝	(外) 縄文L R、(内) ナデ	焼成良好	Ⅳ
2	S I 29	(底) ナデ?、(外) 撚糸R、(内) ナデ?	繊維含む	Ⅱ—1
3	S I 29	(外) 沈線・刺突—ミガキ、(内) 横位ミガキ	焼成良好	Ⅴ

第7図　竪穴住居跡出土遺物

面は形成されていない。ただし残っている10個の礫は火熱で非常に脆くなっていた。また焼けてはいないが、炉のすぐ南には平らな河原石(長さ33cm、幅22cm、厚さ5cm)が位置し、地山面からは数cm浮いているが、推定される床面に接していたものと思われる。

出土遺物は、埋土中より縄文土器片を数点確認している。第7図2、3は、それぞれ前期、後期前葉の土器片であり、土器から本住居跡の帰属時期は、後期前葉かそれ以降である。

ＳＩ３０（第9図、図版8、9）

調査区南側、ＬＱ36を中心とする段丘端部に程近い位置で確認した。遺構確認面は、ＳＩ29と同じである。

規模は、南側の壁約1／3が失われているが、推定径250cmの円形もしくは欠落している南側の壁を通る南北方向にやや長い円形と推定できる。壁高は最大で10cmである。床面は地山面を利用し、あまり平坦ではないが堅く締まっている。

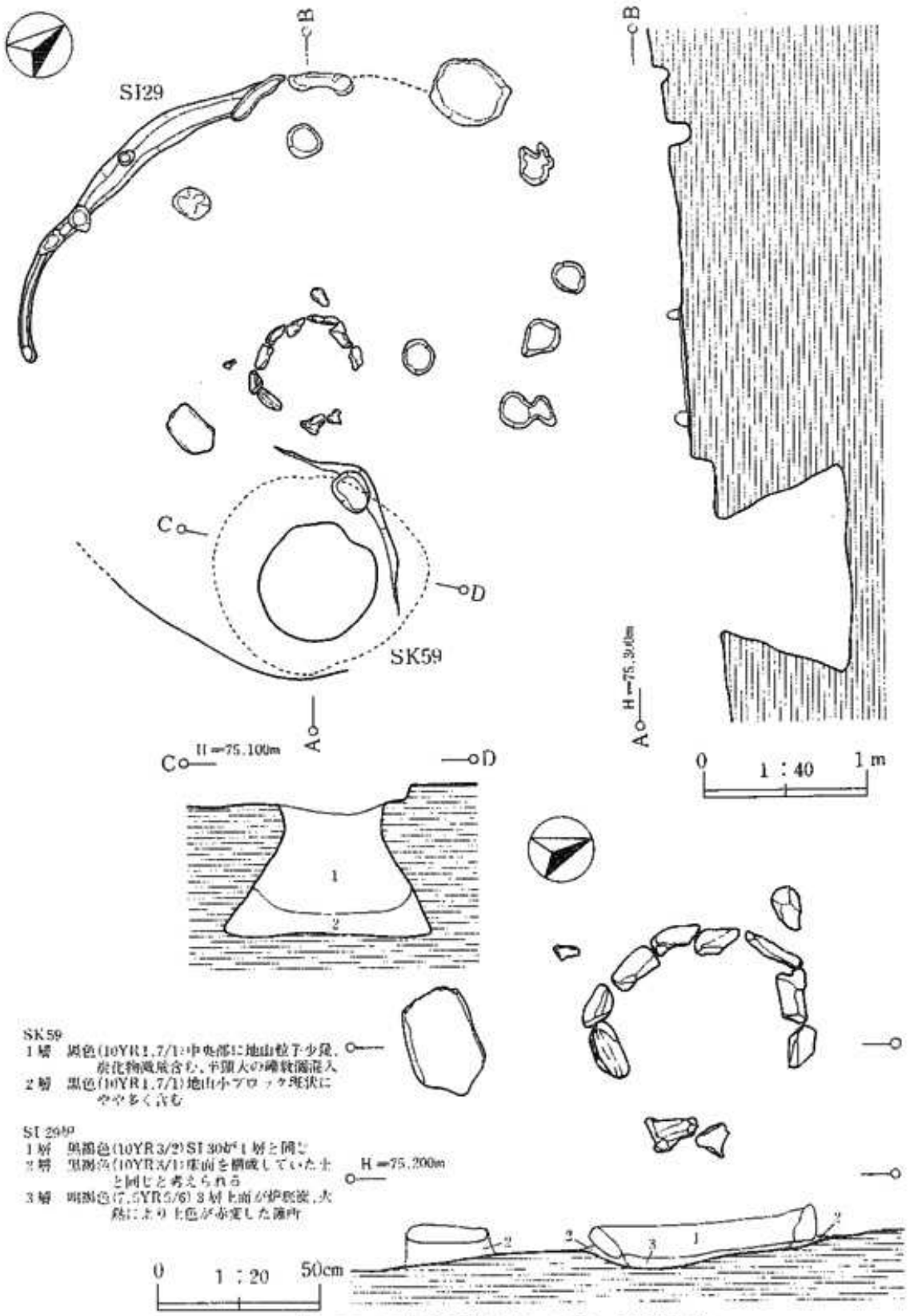
床面ほぼ中央部には石囲炉がある。同じ石囲炉でもＳＩ29とは、用材の選別、構築法において相異が認められる。形態的にはＳＩ29同様円形を呈しており、その規模は径55cmとやや小振りである。炉を構成する礫は8個で欠落はない。ただし個々の礫の径または長さが8～27cmとばらつきが大きく、かつ礫の形態も様々でＳＩ29のように礫を選別しているようには見られない。構築にあたっては、まず床面を径55～60cmの円形に約8cm掘り下げる。用意した礫8個をこの掘り方の内壁に沿わせ、各礫の上面がほぼ同じレベルになるまで掘り方底面に押し付けめり込ませる。礫と掘り方の間には黒色土を充填させている。炉底面は平坦であるが焼面の形成は認められない。礫自体は非常に脆くなっている。炉埋土はやや赤味のある黒色土で、見た目には焼土は含まれていないくらいの細かな焼土が全体に混じっている。床面にはこの炉以外の施設は一切確認できなかった。出土遺物は認められなかった。

ＳＩ３１（第9図、図版7）

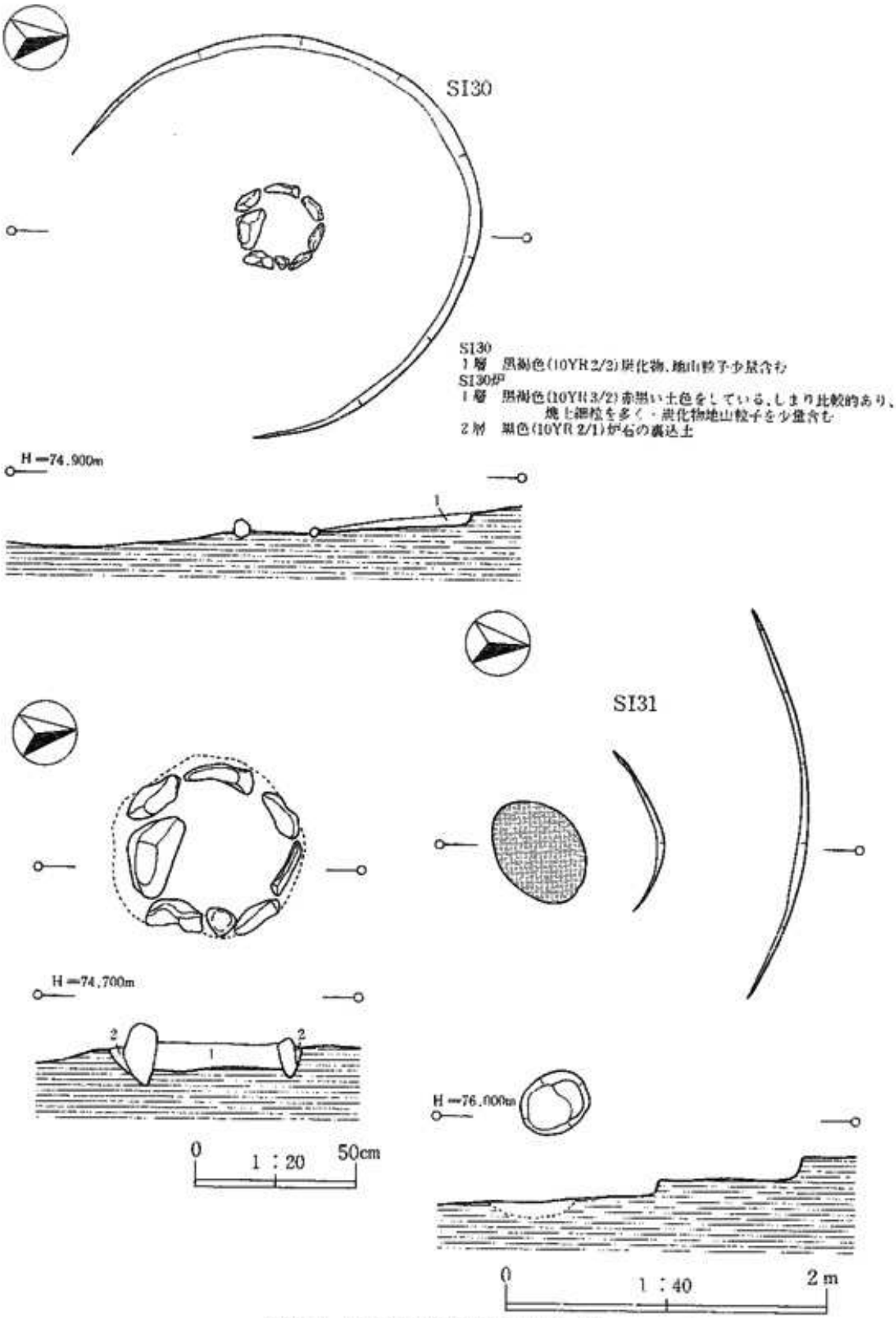
調査区南側、ＬＮ・ＬＯ37で確認した。遺構の検出は、ＬＮ37地山面にて炉を確認したことを受けて周囲を精査した結果、壁の一部を検出し住居跡と認定できたものである。

残存する壁は北側のごく一部で、壁溝はない。壁高は7～13cm、炉が中央に位置するとすれば、推定径が350cm前後であるが、図上で壁の円弧を復元すると400cmを超しそうである。この壁の内側約90cmにも炉を囲むような段差(約8cm)が認められる。2重構造の床面であろうか。

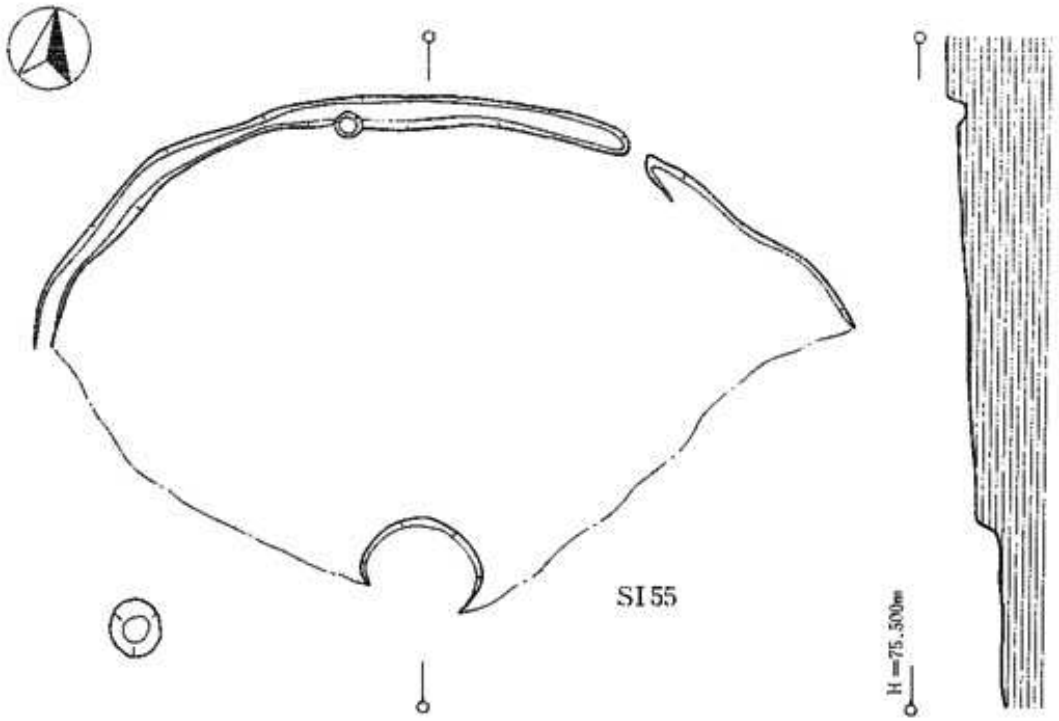
炉は長径70cm、短径52cmの楕円形を呈する掘り込みのない地床炉である。火床面は平坦でカチンカチンに固結しており、火熱の影響で最深10cmまで土が赤変していた。炉の周辺も比較的堅く締まっている。炉の東には深さ43cmの柱穴が1個存在するが本住居跡に伴うのかどうかは不明である。出土遺物はない。

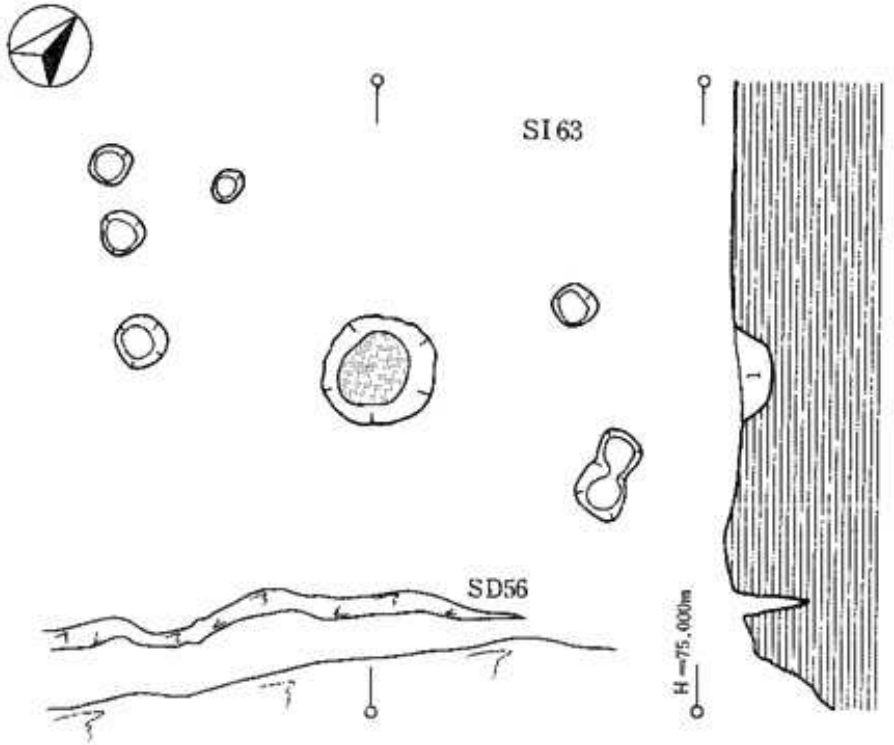


第8図　竪穴住居跡(2) SI 29・SK59土坑



第9図　竪穴住居跡(3)　SI30・31





SI63
1層　黒色(10YR2/1)しまり下位ばどあり、焼土などの混入物は含までいないように見える

0　1：40　2m

第10図　竪穴住居跡(4) SI55・63

ＳＩ５５（第10図、図版９）

調査区南側、ＬＰ37で確認した。暗褐色の埋土を有する壁溝と、その内側に概ね平坦で堅く締まっている床面(図上の一点破線内)を地山面にて検出した。

残存する壁溝は幅15cm前後、確認面からの深さは５－10cmである。この壁溝から推定できる径は460cmとなる。復元径の中央には長径60cm、深さ10cm前後の凹みが存在する。位置的には炉と考えられるが、現況観察では焼土、焼面は認められない。本住居跡の範囲内には柱穴が２本（Ｐ１深さ24cm、Ｐ２深さ40cm）あるが、この住居跡に伴うのか否かは不明である。出土遺物は認められない。

ＳＩ６３（第10図）

調査区南側、ＬＮ35の段丘端部で確認した。壁あるいは壁溝は一切見いだせなかったが、炉と考えられる凹みと周辺の締まった面(＝床面)と柱穴から住居跡と認定したのである。

炉と考えている凹みは径55cm、最深15cmで鍋底状に掘り込まれている。他の炉と異なり、側・底面が焼けていることが特徴である。黒色土の埋土に焼土は含まれていない。

炉の周囲には柱穴を７本確認している。径18－25cmで、確認面からの深さはＰ１－６で16～20cm、Ｐ７で26cmである。遺物は出土しなかった。

２　土坑（第11～16図、図版10～20）

確認した29基の土坑は、住居跡同様調査区南側に集中するが、中央部や北側にも散在的に分布している。これら遺構の確認面は、大部分が地山面である。土坑内出土遺物は第17、18図に一括して示してあるが、量的にも多くなく、坑底面出土の遺物は認められなかった。

土坑は断面形、坑底面の状況から大きく３つに分類することができる。

（１）断面形がフラスコ状もしくは袋状を呈する一群（10基、ＳＫ13・17・33・35・43・45・51・54・57・59）

（２）断面形が円筒状もしくは鍋底状を呈する一群(18基)、これは規模と坑内の状況で３細分できる。

①長径もしくは長軸が100cmを超すもの(10基、ＳＫ16・22・25・32・38・39・41・42・52・64)

②長径もしくは長軸が100cm未満のもの(６基、ＳＫ26・34・40・44・48・53)

③長径が100cm未満で、坑底面近くに平らな石を伴うもの(２基、ＳＫ49・60)

（３）坑底面にピットを有する一群（１基、ＳＫ20）

以下、土坑の記述は各群毎に番号の若い順に進めていく。

（1）群上坑

SK13（第11図、図版10）

調査区中央北側、LO・LP52で確認した。南1m余りに石組炉（SX14）が位置する。規模は、開口部長径155cm、短径140cmの円形を呈し、底径175×160cm、確認面からの深さは90cmである。埋土は自然堆積を示している。

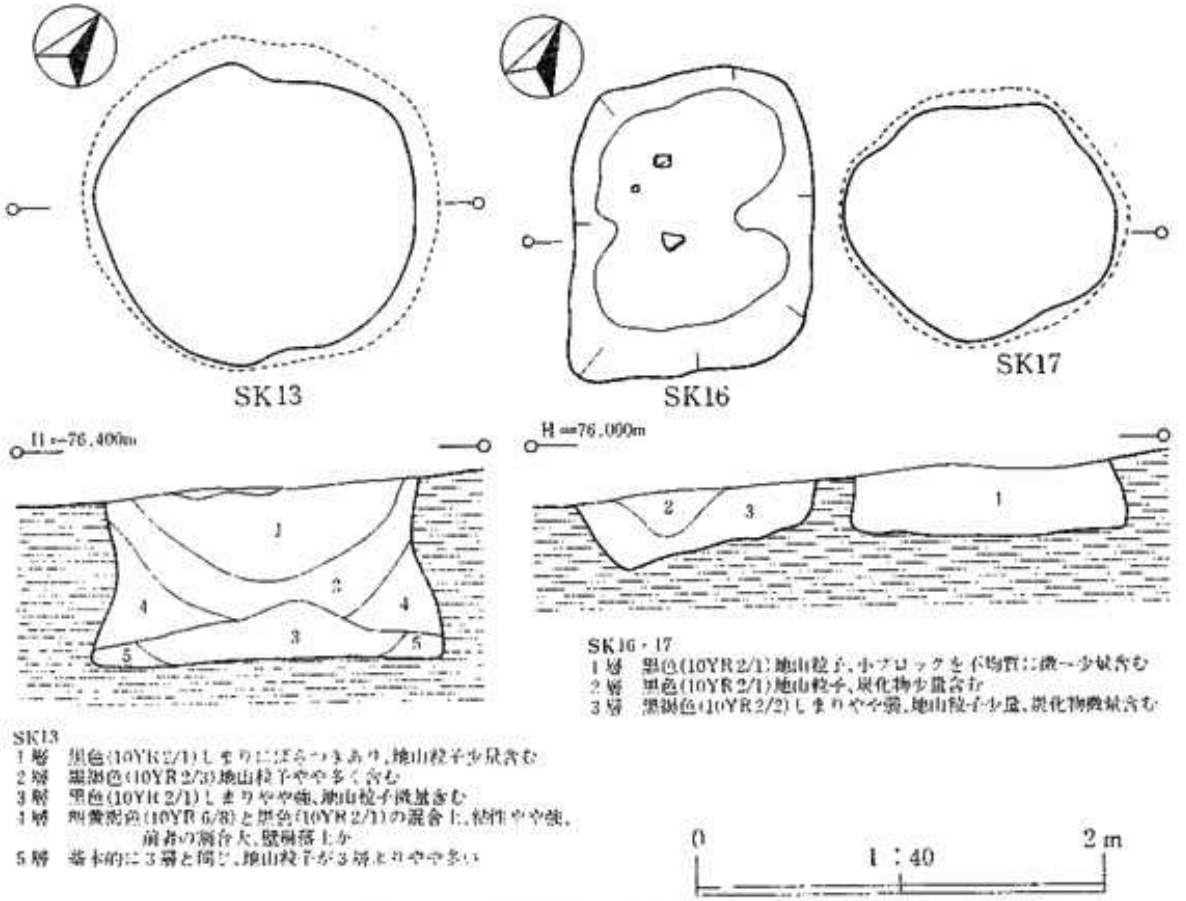
遺物は、内外面に朱塗りの施されている土器片（第17図4）が出土している。

SK17（第11図、図版10、11）

調査区ほぼ中央、LO・LP43で確認した。西隣に（2）①群のSK16が位置する。規模は、開口部長径135cm、短径115cmの円形を呈する。底径は140×125cmで、深さ25～30cmである。埋土は黒色土単層で、人為的に埋められたものであろうか。遺物は認められなかった。

SK33（第12図、図版11）

調査区南側、LO・LP36の遺構集中箇所に位置している。規模は、開口部径115cmの円形を示し、底径は135×120cm、深さは30～45cmである。自然堆積と見られる。遺物は土器片（第17図5、6）を数点確認した。



第11図　土坑（1）SK13・16・17

ＳＫ３５（第13図、図版11、12）

調査区南東側、ＬＭ36・37で確認した。形態は長軸80cm、短軸65cmの隅丸(長)方形を呈している。底面長は85×80cm、深さは25～38cmである。遺物は土器片(第17図７～９)が出土している。

ＳＫ４３（第13図、図版12）

調査区南西側、ＬＱ37で確認した。西隣には同群のＳＫ57が位置する。規模は開口部長径90cm、短径80cmの円形を呈している。底径は100cm前後である。深さは60cmを測る。

確認面において縄文土器底部(第17図10)が正立して、また埋土中位より石鏃(同11)が出土している。

ＳＫ４５（第13図、図版13）

調査区南西側、ＬＱ39を中心とする位置で確認した。形態は開口部で長径125cm、短径90cmの東西方向に長い楕円形を呈しており、北と西側が袋状に掘り込まれている。確認面からの深さは80～100cmである。遺物は土器片(第17図12、13)が出土している。

ＳＫ５１（第12図、図版13）

調査区南側、ＬＯ・ＬＰ37で確認した。東側で(２)①群のＳＫ32と重複しているが新旧関係は明らかにし得なかった。規模は開口部径105cmの円形を呈し、底径は125cmである。確認面からの深さは50～60cm、側・底面とも小さな凹凸が認められる。埋土中より火熱を受けた砂岩系の石が一点出土している。遺物は出土しなかった。

ＳＫ５４（第13図）

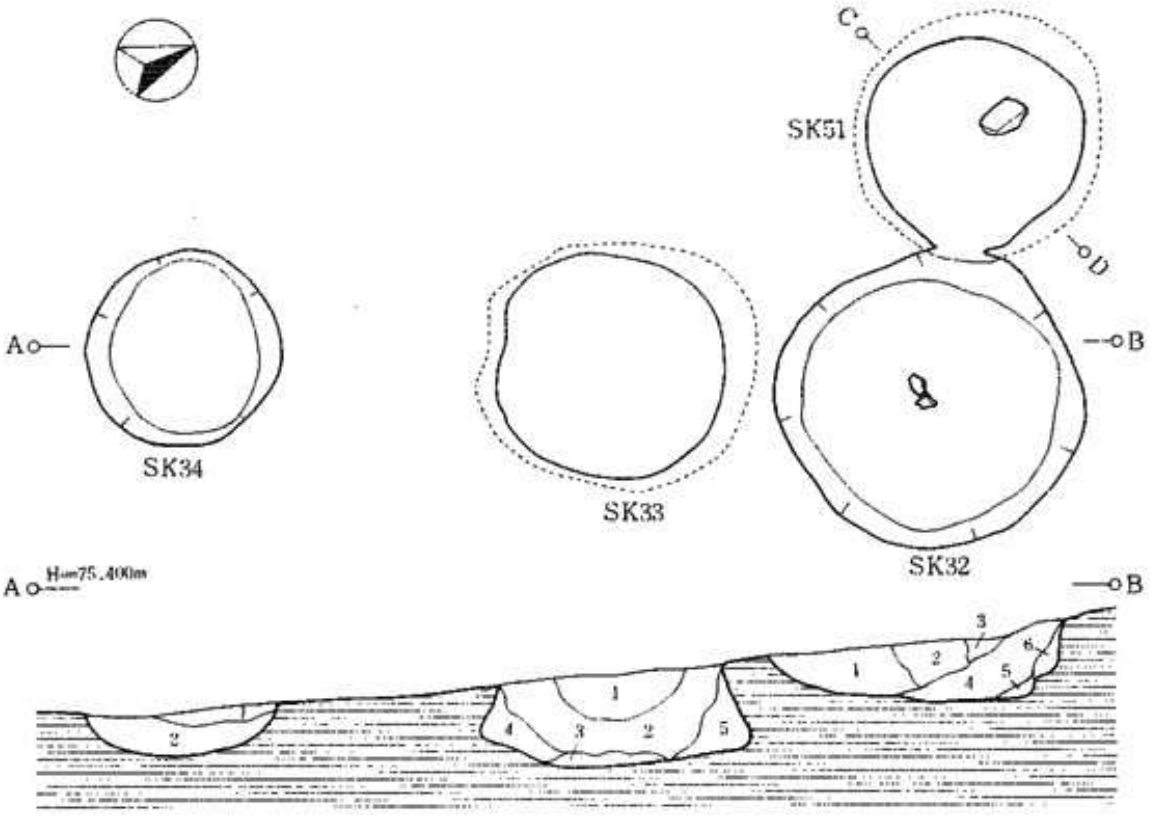
調査区南東側、ＬＮ37を中心とする位置で確認した。規模は開口部長径65cm、短径50cmのやや歪つな円形を呈している。深さは30～35cmである。遺物は縄文土器片とフレークが出土している。

ＳＫ５７（第13図、図版14）

調査区南西端部、ＬＱ37で確認した。土坑の西端部は段丘崖にかかっている。規模は開口部長径90cm、短径80cmの円形を示している。底径は95×90cm、深さは45～70cmを測る。遺物は出土しなかった。

ＳＫ５９（第８図）

調査区南側、ＬＮ・ＬＯ36で確認した。ＳＩ29の範囲内に収まるように位置しているが、両者の関係は不明である。ＳＩ29同様地山面の一枚上層で黒色土のプランを見いだしているが、遺構として認定するには地山面まで掘り下げなければならなかった。規模は開口部径75cm、底径125～135cmの半面円形の典型的なフラスコ状土坑である。確認面からの深さは80cmである。埋土の状態から、土坑廃棄後一定時期が過ぎた段階で一気に埋められている。遺物は出土しな



SK32
1層　黒色(10YR 2/1)地山粒子少量含む
2層　暗褐色(10YR 3/3)しまり粘性やや強、地山粒子ややや多く、炭化物微量含む
3層　黒色(10YR 2/1) 1層に類似、遺物を含む
4層　黒褐色(10YR 2/2)地山粒子ややや多く含む
5層　明黄褐色(10YR 6/8)と4層土の混合
6層　黒褐色(10YR 2/2)

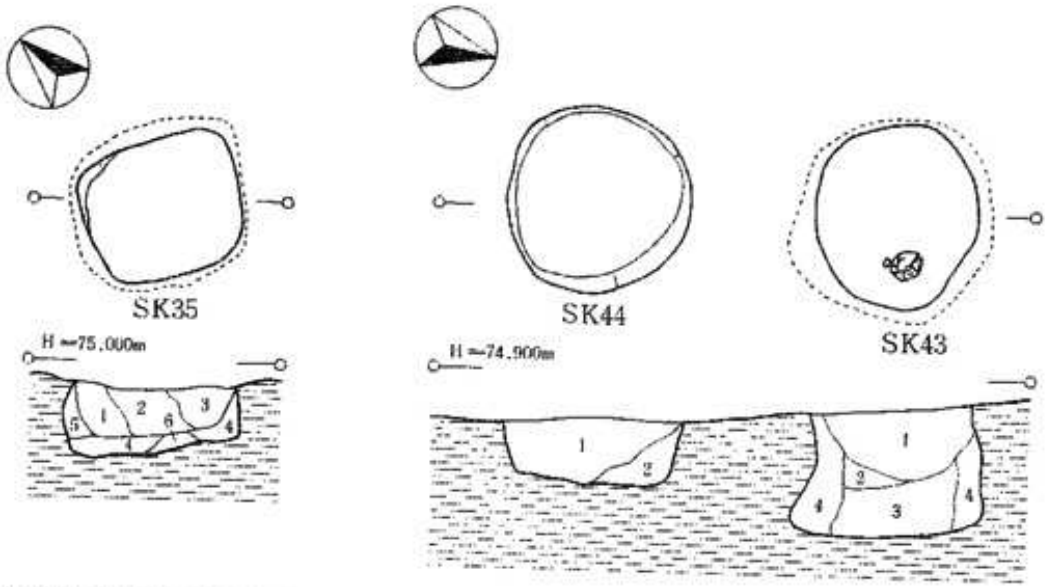
SK33
1層　黒褐色(10YR 2/3)粘性やや強、地山粒子ややや多く含む
2層　黒褐色(10YR 2/2)しまりやや強、地山粒子少量含む
3層　黒褐色(10YR 2/2)しまり粘性やや強
4層　明黄褐色(10YR 6/8)と2・3層土の混合

SK34
1層　黒色(10YR 2/1)地山粒子微量含む
2層　黒色(10YR 2/1)地山粒子少量含む、1層との境はっきりしない

SK51
1層　暗褐色(10YR 3/3)地山粒子少量含む
2層　暗褐色(10YR 3/3)地山小ブロック微量含む
3層　黒褐色(10YR 2/2)炭化物微量含む
4層　黒褐色(10YR 2/2)
5層　黒褐色(10YR 2/2)しまりやや弱
6層　黒褐色(10YR 2/2)
7層　明黄褐色(10YR 7/6)と6層が斑状に混合
8層　暗褐色(10YR 3/4)
9層　暗褐色(10YR 3/4)しまりやや強、地山粒子少量含む

0　1：40　2m

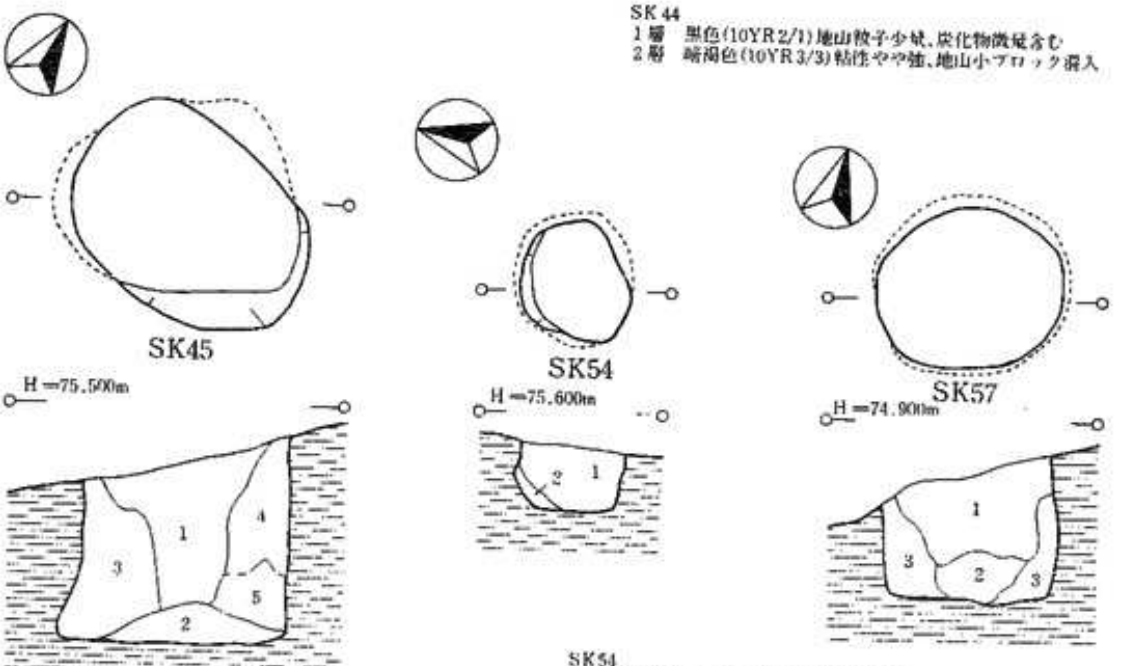
第12図　土坑(2)　SK32～34・51



SK35
1層　黒色(10YR2/1)しまりやや弱、地山粒子、炭化物微量含む
2層　黒色(10YR2/1)地山粒子ややく、炭化物微量含む
3層　黒色(10YR2/1)地山粒子微量含む
4層　暗褐色(10YR3/3)粘性やや強、地山粒子を多く含む
5層　黒色(10YR2/1)しまり弱
6層　黒色(10YR2/1)しまりやや強、地山粒子微量含む

SK43
1層　黒褐色(10YR2/2)しまりやや強、地山粒子少量含む
2層　黒褐色(10YR2/2)地山粒子を含まない
3層　黒色(10YR2/1)しまりやや強、地山粒子微量含む
4層　明黄褐色(10YR7/6)と黒褐色(10YR2/2)の混合土、
・　壁崩落土か

SK44
1層　黒色(10YR2/1)地山粒子少量、炭化物微量含む
2層　暗褐色(10YR3/3)粘性やや強、地山小ブロック混入



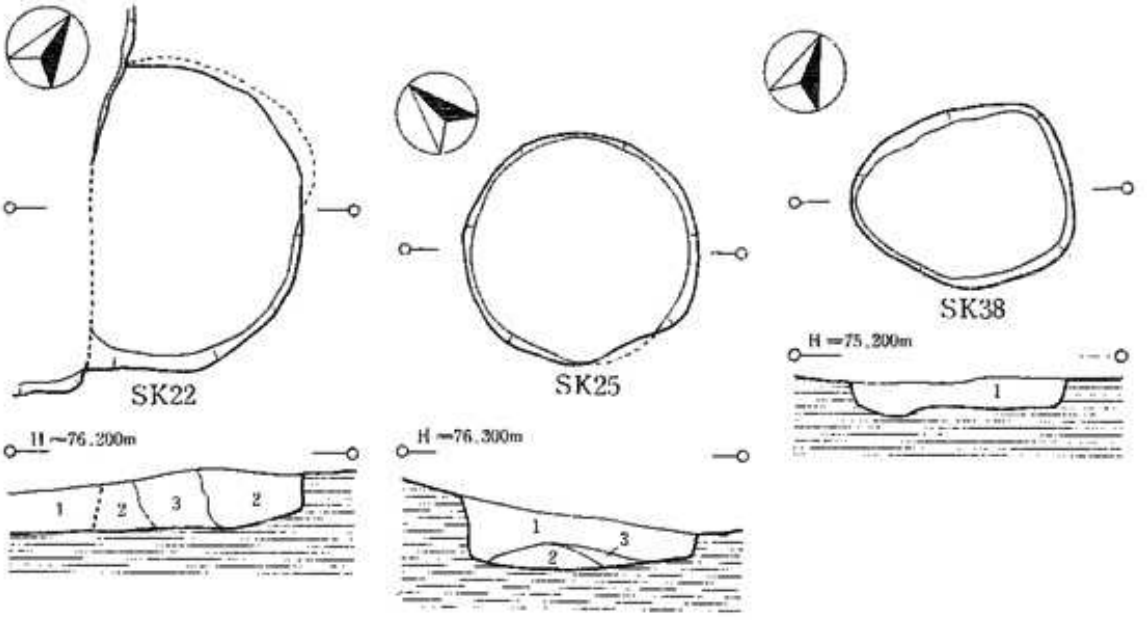
SK45
1層　黒褐色(10YR2/2)しまりやや弱、地山粒子少量含む
2層　黒褐色(10YR2/2)しまりやや強、地山粒子少量含む
3層　黒褐色(10YR2/2)地山粒子やや多く含む
4層　黒褐色(10YR2/3)地山粒子を斑状に多く含む
5層　黒褐色(10YR2/3)地山粒子を斑状にやや多く含む

SK54
1層　黒色(10YR1.7/1)地山粒子少量含む
2層　黒褐色(10YR2/3)しまりやや弱、地山小ブロック混入

SK57
1層　黒褐色(10YR2/2)地山粒子少量、炭化物微量含む
2層　黒褐色(10YR2/3)
3層　褐色(10YR4/6)と2層土の混合、しまり弱、壁の崩落土か

0　1：40　2m

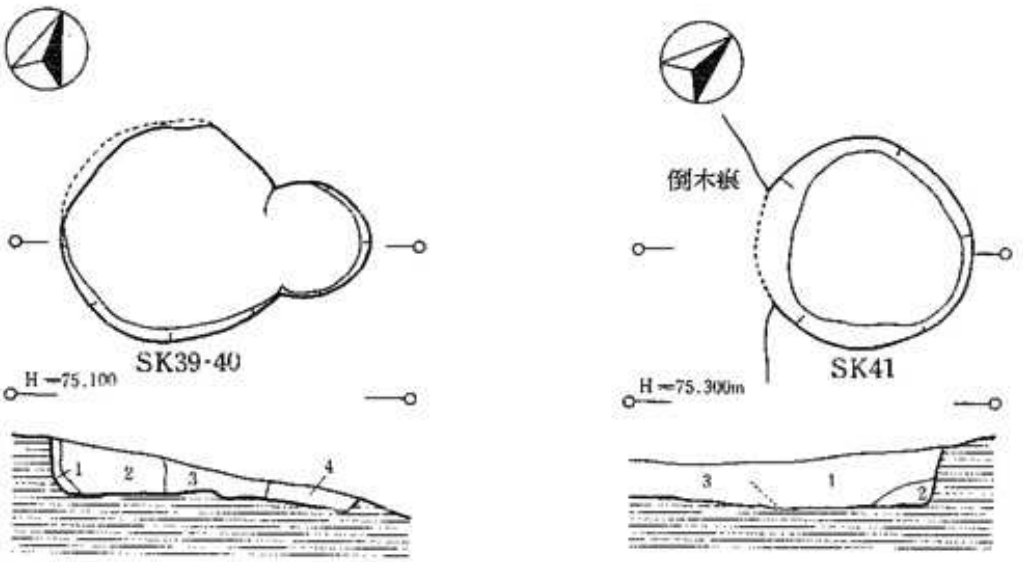
第13図　土坑(3)　SK35・43～45・54・57



SK 22
1層　SX 12堰土1層、2層との境はっきりしない
2層　黒色(10YR2/1)炭化物微量、地山粒子殆ど含まない
3層　黒色(10YR2/1)しまり粘性やや強、地山粒子やや多く、炭化物微量含む

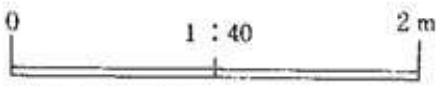
SK 25
1層　黒色(10YR 2/1)炭化物、地山粒子少量含む
2層　暗褐色(10YR 3/4)しまり粘性やや強、地山粒子やや多く含む
3層　暗褐色(10YR 3/4)しまり粘性やや強、地山粒子、小ブロック少量含む

SK 38
1層　黒色(10YR 2/1)地山粒子微量含む



SK 39・40
1層　黒色(10YR 1.7/1)しまり弱、地山小ブロック混入
2層　黒色(10YR 1.7/1)しまり強、地山粒子少量含む
3層　黒色(10YR 1.7/1)地山粒子微量含む
4層　黒色(10YR 1.7/1)と黒褐色(10YR 2/3)の混合土

SK 41
1層　黒褐色(10YR 2/2)しまりやや強、地山粒子少量含む
2層　黒褐色(10YR 2/2)しまり弱、地山粒子微量含む
3層　倒木痕



第14図　土坑(4)　SK22・25・38～41

かった。

なお、本土坑開口部の５～20cm北側には10cm前後の段差を持つプランが確認できる。これがＳＫ５９に伴う掘り込みであるのか否かは不明である。

（２）①群土坑

ＳＫ１６（第11図）

調査区ほぼ中央ＬＰ43で確認した。形態は長軸145cm、短軸115cmの北西－南東方向に長いやや歪つな隅丸長方形を呈している。深さ20～35cmで、坑底面の凹凸の状況から土取り穴のような機能を有していたのであろうか。遺物は出土しなかった。

ＳＫ２２（第14図、図版14）

調査区ほぼ中央、ＬＮ44・45で確認した。西側を竪穴状遺構ＳＸ12により切られている。このため東西方向の規模、形状は不明であるが、径約150cmの円形を呈するもの思われる。確認面からの深さは20～25cmである。遺物は土器片（第17図14）が得られている。

ＳＫ２５（第14図、図版15）

調査区南東側、ＬＬ・ＬＭ38で確認した。確認面は、地山面の一枚上の黒褐色土層である。規模は、径115cmの比較的整った円形を呈している。確認面からの深さは約45cmであるが、完掘段階で地山面まで掘り下げたため、図上では15～35cmの数値を残している。遺物は出土しなかった。

ＳＫ３２（第12図、図版15）

調査区南側、ＬＯ37・38で確認した。西側でＳＫ51と重複している。規模は径145cmで円形を呈する。深さは20～35cmである。埋土中位より縄文土器片（12～14）が出土している。

ＳＫ３８（第14図、図版15）

調査区南東側、ＬＭ36で確認した。形態は長径110cm、短径90cmの不整円形を示す。確認面からの深さは15cmで黒色土単層である。底面はやや凹凸している。遺物は縄文土器片が出土している。

ＳＫ３９（第14図、図版16）

調査区南東側、ＬＭ35で確認した。東側で（２）②群のＳＫ40と重複しているが、新旧関係は不明である。規模は推定長径115cm、短径105cmで、円形を呈している。深さは10－25cmである。遺物は出土しなかった。

ＳＫ４１（第14図、図版16）

調査区南側、ＬＰ37で確認した。土坑南西部で倒木痕と重複している。断面観察では本土坑が切っているようであるが明言できない。なおこの位置は、Ｓ１55の推定される範囲内に収まる。規模は径105cmの円形を示し、深さは20－30cmである。遺物は土器片（第17図18、19）が出

七している。

SK42（第15図、図版17）

調査区南西側、LQ37で確認した。規模は径100～105cmの円形を呈し、確認面からの深さは50～55cmである。本土坑埋土1層のあり方はSK59の1層に近似するものと考えられる。遺物は出土しなかった。

SK52（第15図、図版17）

調査区南東端部、LL35・36で確認した。土坑東端部は沢筋伝いに登る小道により一部は破壊されているものと見られる。規模は現況で長径125cm、短径95cmの歪つな楕円形を示す。確認面からの最深値は40cmである。遺物は出土しなかった。

SK64（第15図）

調査区ほぼ中央部、LN41・42で確認した。当初は土坑東側に大きく展開する倒木痕の一部として掘り下げていたのであったが、次第に円形のプランが現れ、土坑と認定するに至ったのである。規模は長径170cm、短径155cm、深さは25～40cmを測る。遺物は出土しなかった。

埋土の状態から次の想定ができる。土坑埋土と倒木痕内部双方に一度撹乱を受けた同質の地山の二次堆積を主とする土が多量に入り込んでいる。このことは大木のそばに開口している土坑が存在し、ここに何らかの原因で大木が倒れ、持ち上げられた地山土が、倒木に伴ってできた凹みと本土坑ともに埋まってしまったか、あるいは倒木に伴い土坑の機能が消失したため、倒木により生じた地山土を人為的に埋めたと見ることができるのではないか。その証拠には、本土坑の周囲数m以内には土坑その他の遺構が存在せず、倒木以外に土坑埋土の供給源を特定できないからである。

（2）②群土坑

SK26（第15図）

調査区南東部、LL39で確認した。形態は、径50～55cmの円形と言うより隅丸方形に近い。深さは15cmで、黒色土が単層で堆積している。遺物は出土しなかった。

SK34（第12図、図版18）

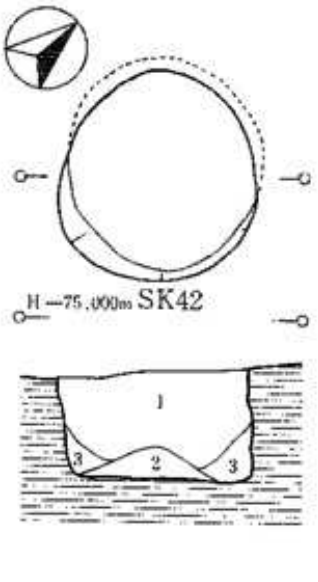
調査区南側、LP36で確認した。径95cmの円形を呈し、確認面からの深さは中央部で20cmである。遺物は土器片が出土している。

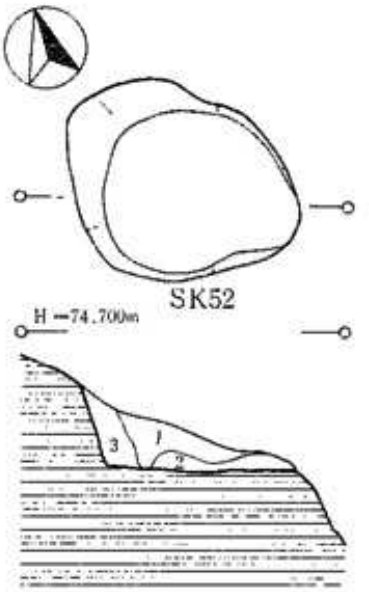
SK40（第14図、図版16）

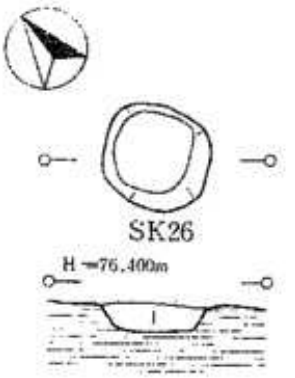
調査区南東側、LM35で確認した。本土坑西側でSK39と重複している。規模は、径55cm前後の円形を呈していたと考えられる。深さは8cmである。遺物は土器片が出土している。

SK44（第13図、図版18）

調査区南西側、LQ37で確認した。規模は径90cm、深さ25～30cmで、平面円形を示している。



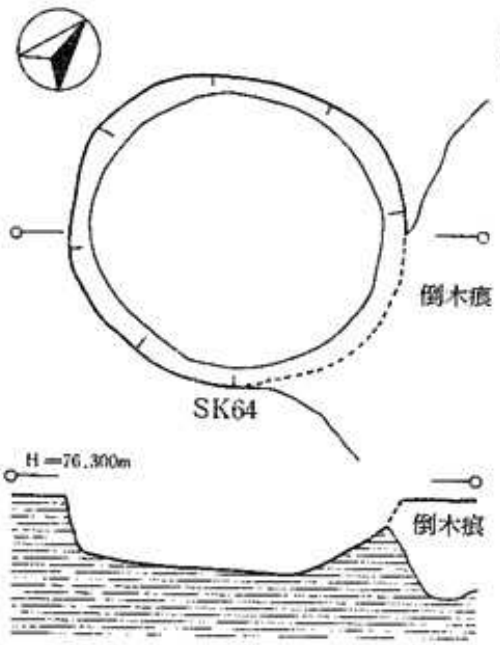


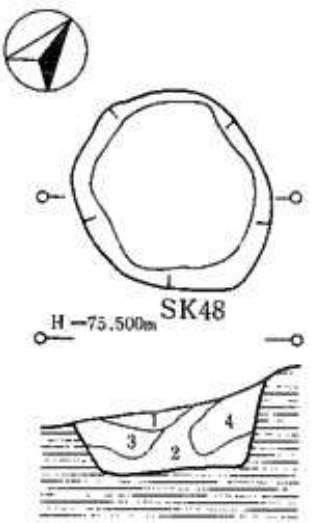


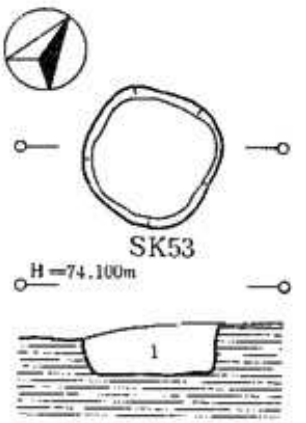
SK42
1層　黒褐色(10YR 2/2)炭化物、地山粒子少量含む
2層　黒褐色(10YR 2/3)地山粒子少量含む
3層　暗褐色(10YR 3/4)しまりやや弱、地山小ブロックを多く含む

SK26
1層　黒色(10YR 2/1)しまり粘性やや強、底面近くに地山小ブロックが認められる

SK52
1層　黒褐色(10YR 2/3)地山粒子少量含む
2層　にぶい黄褐色(10YR 4/3)地山小ブロックを少量含む
3層　2層と同じ、地山小ブロックを2層よりやや多く含む





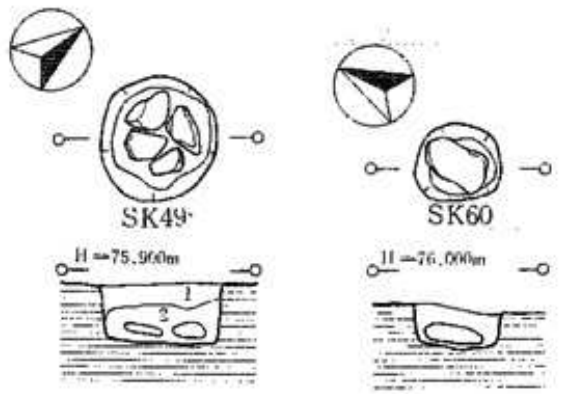


SK48
1層　黄橙色(10YR 6/8)地山の二次堆積土
2層　暗褐色(10YR 3/3)しまりやや弱、地山粒子少量含む
3層　黒褐色(10YR 2/2)しまりやや弱、地山粒子少量含む
4層　黒褐色(10YR 2/2)しまりやや弱、地山小ブロック混入

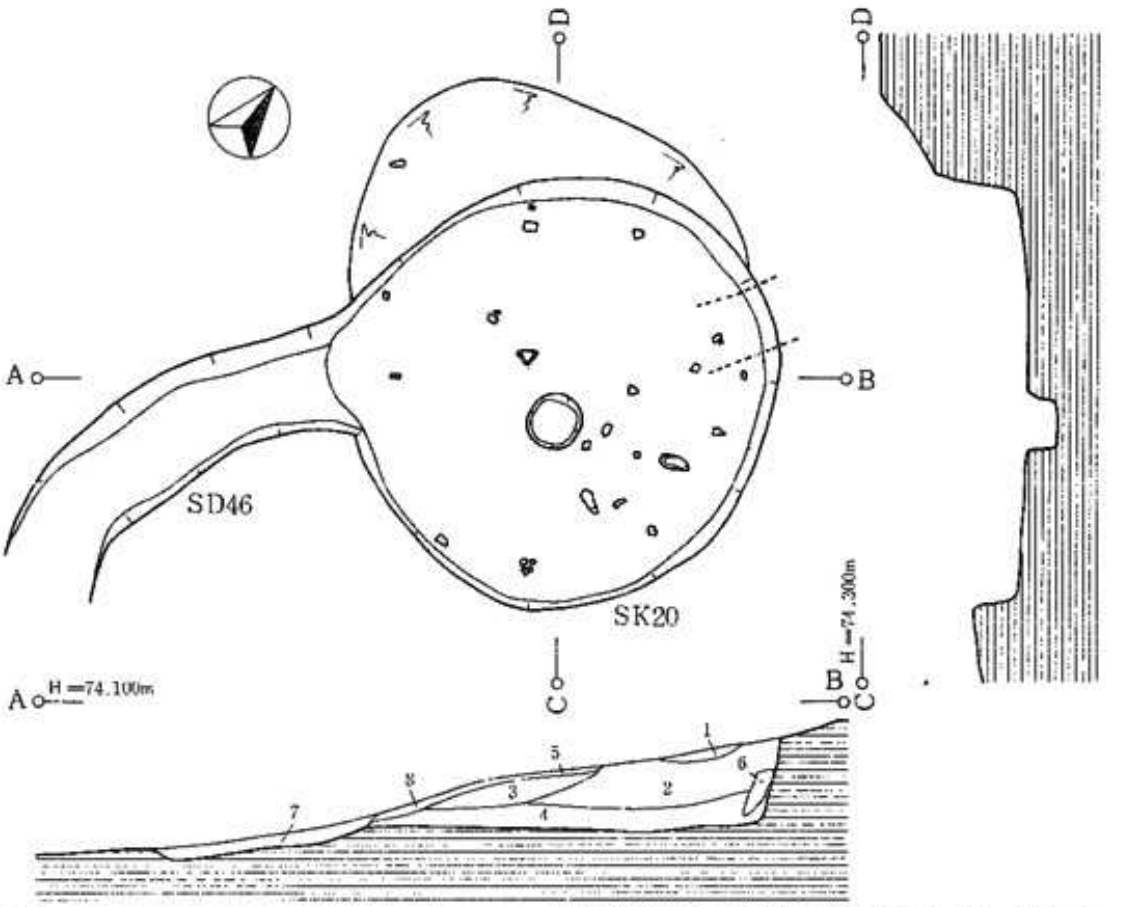
SK53
1層　黒褐色(10YR 2/2)地山粒子少量、炭化物微量含む

0　1：40　2m

第15図　土坑(5)　SK26・42・48・52・53・64



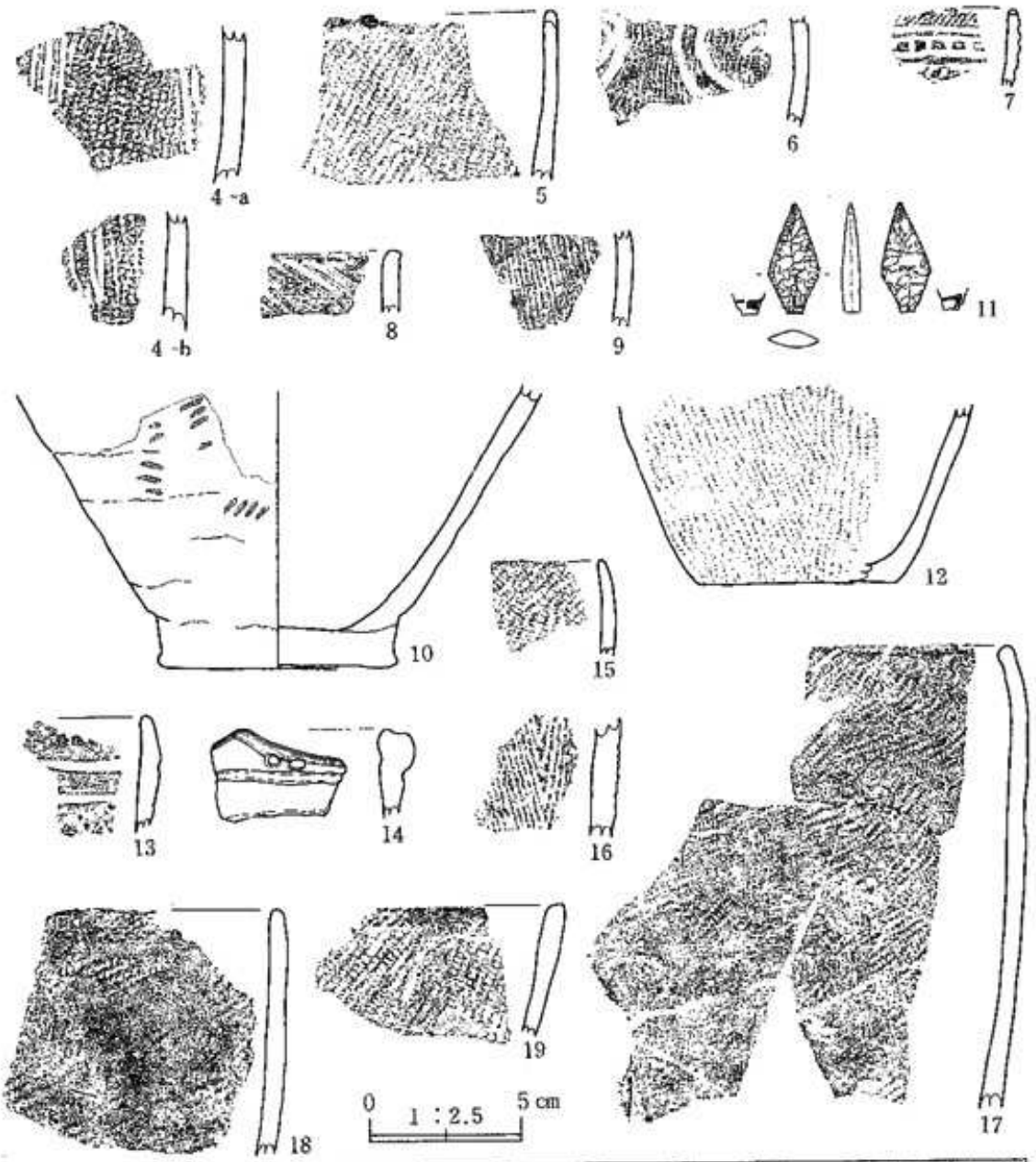
SK49
1層　黒褐色(10YR2/2)しまり弱
2層　暗褐色(10YR3/4)しまり粘性弱、砂質の地山を多く含む



SK20
1層　黒色(10YR2/1)
2層　黒色(10YR1.7/1)しまり弱、上面で炭化物少量、地山粒子微量含む
3層　黒褐色(10YR2/2)しまり粘性強、グライ化しているように見える、地山粒子少量、炭化物微量含む
4層　黒褐色(10YR2/3)土質は3層に類似、径10～20mmの礫若干含む
5層　黒色(10YR2/1)しまり粘性強、地山粒子少量含む
6層　地山土のブロック
7層　黒色(10YR1.7/1)SD46埋土、しまり極めて強
8層　暗褐色(10YR3/3)しまり弱、砂質の地山粒子を多く含む

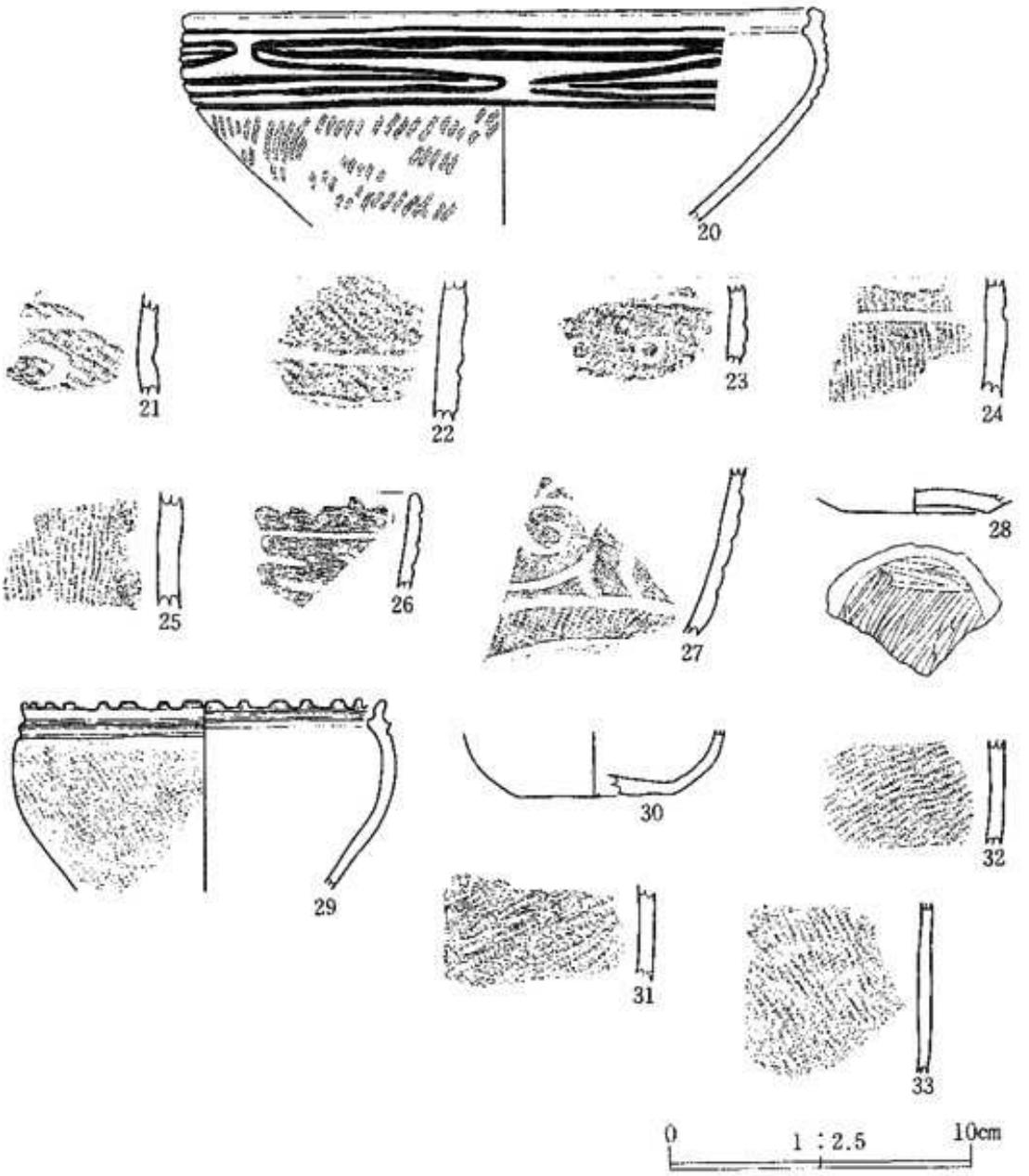
0　1：40　2m

第16図　土坑(6)　SK20・49・60・SD46



番号	出土位置	文様	胎土・焼成・備考	分類
4	SK13	(外)縄文RL→沈線→内外面半端(内)横位・横位ミガキ	砂粒多	Ⅳ－1
5	SK33RP1	口唇小突起、(外)縄文LR、(内)斜位ナデ	焼成良好	Ⅴ
6	SK33	(外)縄文LR→沈線→磨消、(内)横位ナデ	焼成良好	Ⅴ
7	SK35	口唇小突起、(外)縄文LR→沈線→刺目→磨消、(内)横位ナデ	焼成良好	Ⅴ－3
8	SK35	(外)斜位条痕、(内)横位ナデ		Ⅳ－1
9	SK35	(外)縄文LR、(内)不定方向ナデ	焼成良好	Ⅴ
10	SK43RP1	(底)ナデ、(外)縄文LR→ナデ、(内)横位・斜位ケズリ→ナデ、底径7cm	(内)煤付着	Ⅳ
11	SK43	基部欠損、長さ(現存37mm)幅17mm厚さ6mm重量(3.0g)、黒曜アスファルト質産		－
12	SK45	(底)ナデ？、(外)縄文RL、(内)横位・斜位ケズリ→ナデ、推定底径7cm		Ⅴ
13	SK45	口縁小突起、(外)縄文？→沈線→磨消、(内)ナデ？	摩滅著しい	Ⅳ
14	SK32	山形突起、口縁部沈線、(外)粘土接着→沈線→磨消ミガキ、(内)沈線・ミガキ		Ⅴ－4
15	SK32	(外)縄文LR、(内)横位ミガキ	焼成良好	Ⅴ
16	SK32	(外)木目状撚糸R、(内)不明	砂粒多	Ⅴ
17	SK32RP1	(外)縄文LR、(内)横位・縦位ナデ	(外)煤付着	Ⅳ
18	SK41	(外)縄文LR、(内)不定方向ナデ	(外)煤付着、砂粒多	Ⅴ
19	SK41	(外)縄文LR、(内)横位ナデ	砂粒多	Ⅴ

第17図　土坑内出土遺物(1)



番号	出土位置	文様	胎土・焼成・備考	分類
20	SK44 RP1	(外)縄文L R→沈線→磨消→未磨、(内)沈線→横位ミガキ→未磨、推定口径205mm	胎土均質、焼成良好	V－4
21	SK20 RP5	(外)縄文R→沈線、(内)横位ミガキ		Ⅳ－1
22	SK20	(外)縄文L R→沈線、(内)横位ミガキ		Ⅳ－1
23	SK20 RP17	(外)縄文L R→沈線・円形刺突、(内)横位ナデ	焼成不良	Ⅳ－1
24	SK20 RP26	(外)撚糸R→沈線、(内)ミガキ		Ⅳ－1
25	SK20	(外)撚糸R、(内)ミガキ、22と同一個体か		Ⅳ－1
26	SK20 RP8	口縁部小突起・刺突、(外)沈線→磨消(ミガキ)、(内)横位ミガキ	(外)煤付着、焼成良好	V－1
27	SK20 RP1	(外)縄文L R→沈線→磨消、(内)横位ミガキ	胎土均質、焼成良好	V－1
28	SK20 RP3	口縁部小突起、(外)縄文R L→沈線、(内)沈線→ミガキ、推定口径120mm	(内外)煤付着、焼成良好	V
29	SK20 RP2	(底・外)ミガキ、(内)ナデ、推定底径48mm	焼成良好	V－3
30	SK20 RP22	(内外全面)ミガキ、推定底径52mm	焼成良好	V
31	SK20 RP25	(外)縄文R L、(内)横位ナデ	(外)煤付着	V
32	SK20 RP20	(外)縄文L R、(内)横位ミガキ	焼成良好	V
33	SK20 RP2	(外)縄文R L、(内)不明	摩滅著しい	V

第18図　土坑内出土遺物(2)

埋土中位より内側を上に向けた浅鉢形土器(第18図20、口縁部でおよそ3／4欠)が出土している。

ＳＫ４８（第15図、図版19）

調査区南西側、ＬＰ・ＬＱ39で確認した。径95cm前後のやや歪つな円形を呈している。深さは25～45cmを測る。遺物は出土しなかった。

ＳＫ５３（第15図）

調査区南側、ＬＯ36で確認した。規模は径65cm、平面形はＳＫ26に類似し、隅丸方形に近い。深さは15～25cmである。遺物は出土しなかった。

（２）③群土坑

ＳＫ４９（第16図、図版19）

調査区南西側、ＬＰ39で確認した。この位置は竪穴状遺構ＳＸ50の範囲内に収まる。形態は径55～65cmの円形を呈し、深さは30cmである。坑底面からわずかに浮くように平らな河原石が４点埋納されているかのように検出できた。遺物は出土しなかった。

ＳＫ６０（第16図、図版19）

調査区南側、ＬＰ40で確認した。規模は径40～45cm小さな円形を呈し、深さも15～20cmでしかない。本例も坑底面からわずか浮くように長さ38cm、幅18cm、厚さ８cmの河原石が一点出土している。他の遺物は検出できず、本群の所属時期は明らかにし得ない。

（３）群土坑

ＳＫ２０（第16図、図版20）

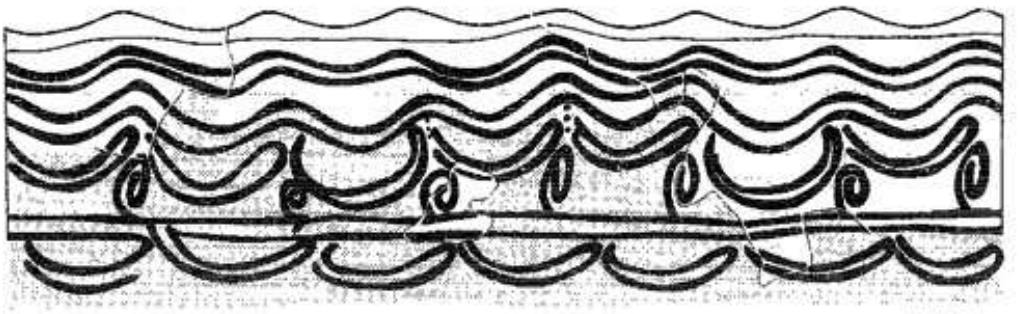
調査区中央西側、ＬＲ47を中心とする位置で確認した。ここは沢２と仮称した小さな沢尻にあたり、沢筋を利用したと見られる小径(ＳＤ46)の下部で検出した。規模は径210cm、最深45cmで、円形を呈している。坑底面はほぼ平らで、中央部には径25cm、深さ15cmの円形の柱穴が掘り込まれている。

坑内からは、縄文時代早期～晩期中葉の時期の土器(第18図、第25図34)が比較的多く出土している。

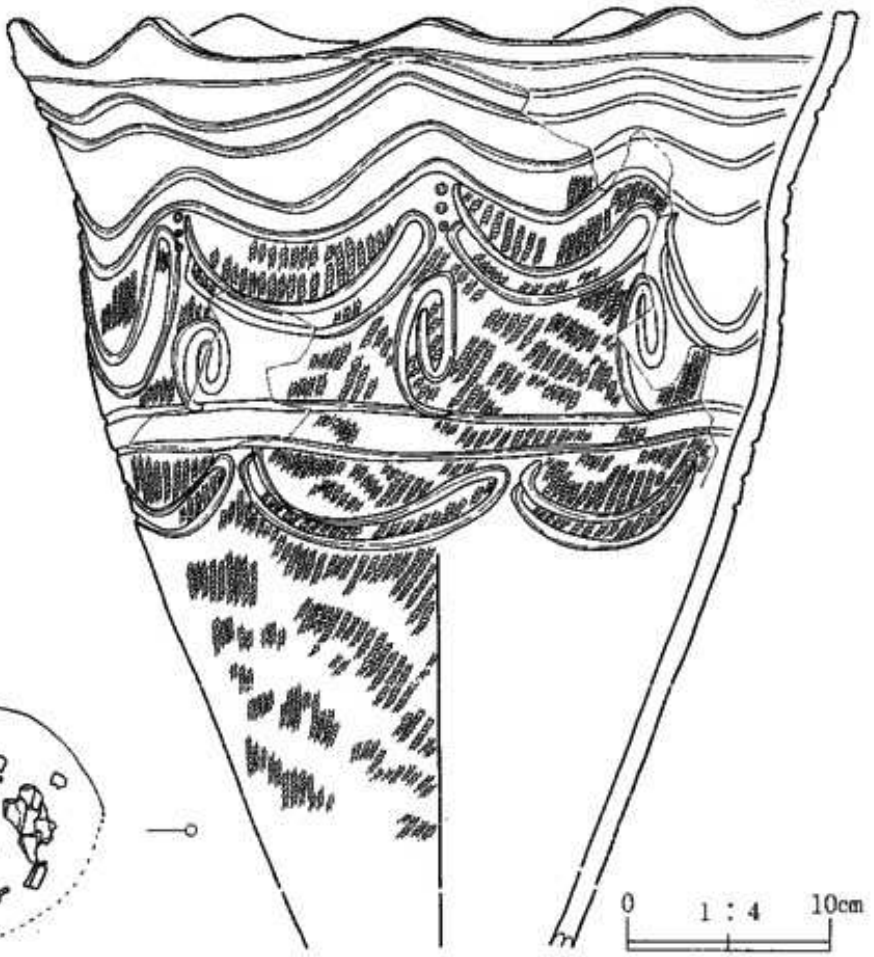
３　土器埋設遺構ＳＲ１０（第19図、図版21）

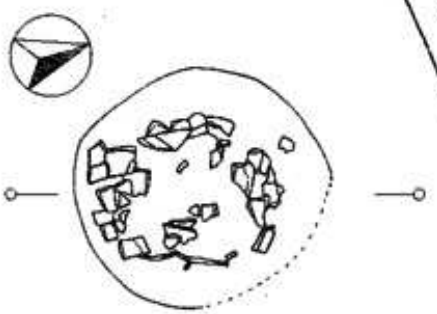
土器埋設遺構は調査区南東側、ＬＬ36で１基確認した。遺構確認は第Ⅲ層黒褐色土層であるが、掘り込み面のプランを特定できたのは地山面であった。この面での規模で径60cm前後の掘り方に復元口径40cm、現存器高45.5cmの縄文土器が正立状態で埋設されていた。土圧の影響からか、口縁部が南西方向に傾いていた。底部は一片もなく、埋設時点で既に存在しなかったものと思われる。なお、口縁部の1／2はその欠損状況から後世の削平等で失われたのであろう。

埋設土器は、７単位の波状口縁をもつ深鉢形土器である。文様構成は、地文の縄文ＲＬ→沈線（２本一組の波状文・直線文→二重の弧状文・渦巻文）・刺突→磨消（基本的に２段目の波

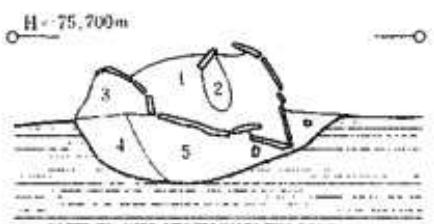


(1/2)





0　1：4　10cm



0　1：20　50cm

1層　黒色(10YR 2/1)しまり粘性弱、土質きめ細かい、地山微量含む
2層　暗褐色(10YR 3/3)粘性やや弱、地山粒子、小ブロック多く含む
3層　黒褐色(10YR 2/2)地山小ブロック、粒子少量含む
4層　黒色(10YR 2/1)粘性やや強、地山粒子多く含む
5層　黒色(10YR 2/1)しまり粘性やや弱、地山粒子微量含む

第19図　土器埋設遺構SR10

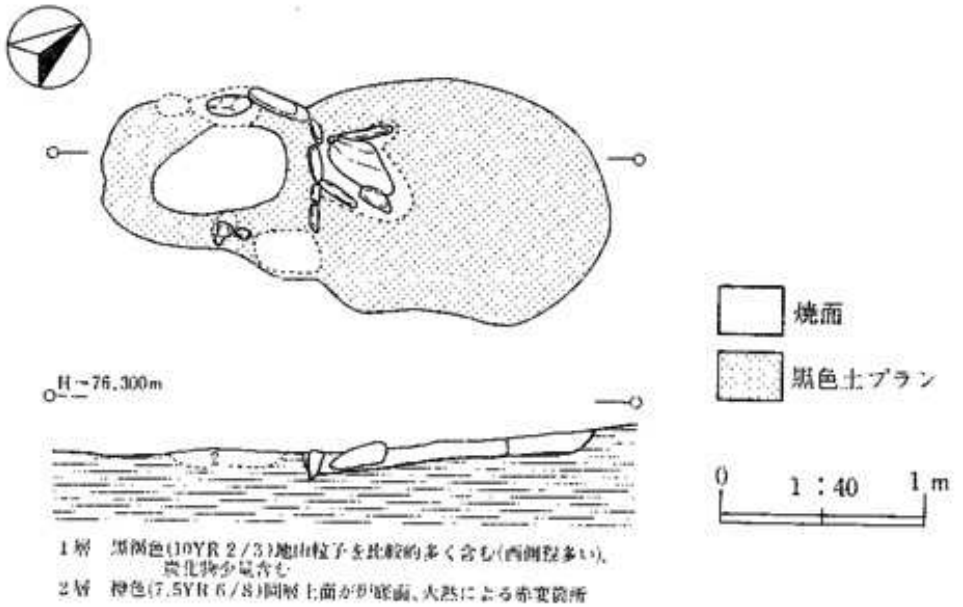
状文より上）からなる。磨消は、折り返しの口縁部にも丁寧に施されている。文様帯以下の一部には煤状炭化物が付着している。

4　石組炉ＳＸ１４（第20図、図版21）

調査区中央北側、ＬＰ52を中心とする地山面で確認した遺構は、形態的には間違いなく竪穴住居跡に伴う石組炉である。ところが方周囲を精査しても住居跡を構成する壁、柱穴、床面などの要素を一切検出できなかったため竪穴住居跡とは切り離し、ここではいわゆる屋外炉を想定して本項を設けた。

炉は、「コ」字の石組とこの石組の閉じられた側に接続する「ハ」字の石組、及びこれらを大きく囲む浅い掘り方からなる。規模は、石組長軸長95cm、短軸長75cm、掘り方長250cm、幅115cmである。焼土は「コ」字で囲まれた内側に長さ70cm、幅45cmの範囲で薄く認められる。「コ」字側は８個の平石を縦にして地山にめり込ませている。ただし石が欠落している箇所もあり、当初から「コ」字形を意図していたのか、あるいは方形であった可能性もある。「ハ」字側は棒状の石３個で「ハ」の字とし、この上に長さ40cm、幅20cm、厚さ10cmの比較的大型の石で蓋をするように置いている。石組を構成する各々の石のレベルは、「コ」の字の横画相当部分を０とすると、「コ」の字縦画で－５～７cm、「ハ」の字では－12cmの数値となる。

このような石組炉は、縄文時代中期後葉～後期初頭頃に広く分布している複式炉の１種とみられるが、遺構内及び周辺からの出土遺物なく、時期は不明である。



第20図　石組炉SX14

5　近現代の遺構（第5、21、22図、図版22）

ここで報告するのは、埋土の状況等から近現代の構築・所産ではないか、と想定している竪穴状遺構5基、溝状遺構3条、畑跡1ケ所についてである。遺構確認面はいずれも地山面である。遺構内からの出土遺物はない。

（1）竪穴状遺構

竪穴状遺構の主(長)軸線方向は、多少のぶれはあるものの、およそ北東－南西を示している。これは、段丘崖線に直交するように、すなわち短軸が崖線に沿うように構築されている。

ＳＸ11（第21図、図版22）

調査区北側、ＬＲ53を中心とする位置で確認した。形態は隅丸長方形を呈し、その長さ520cm、幅420～440cm、確認面からの深さ50～65cmである。本遺構の南西側には長さ170cm前後、幅約70cmのテラス状の張り出しを持つ。底面は平坦で、形態的には中世の竪穴遺構とも言えそうである。埋土は、地山小ブロックを主体とするボソボソした、一見して撹乱土のようなが単層入り込んでおり、ある時期一気に埋められたものと考えられる。

ＳＸ12（第22図、図版22）

調査区ほぼ中央部、ＬＯ45を中心とする位置で確認した。2種類のやや歪つな長方形の組み合わせからなる。大きい方は、東隅でＳＫ22を切っている。その長さ850～880cm、幅660～730cm、確認面からの深さ25～50cmである。底面は平坦で、内部にはＬ字状に一段低く掘り下げられている箇所もある。小さい方は、長さ700cm前後、幅130～150cm、確認面からの深さは50cmであるが、南の斜面側に残る掘り上げられたと見られる地山土の二次堆積土(Ａ層)から、当時は80～90cmの壁高を有していたと考えられる。

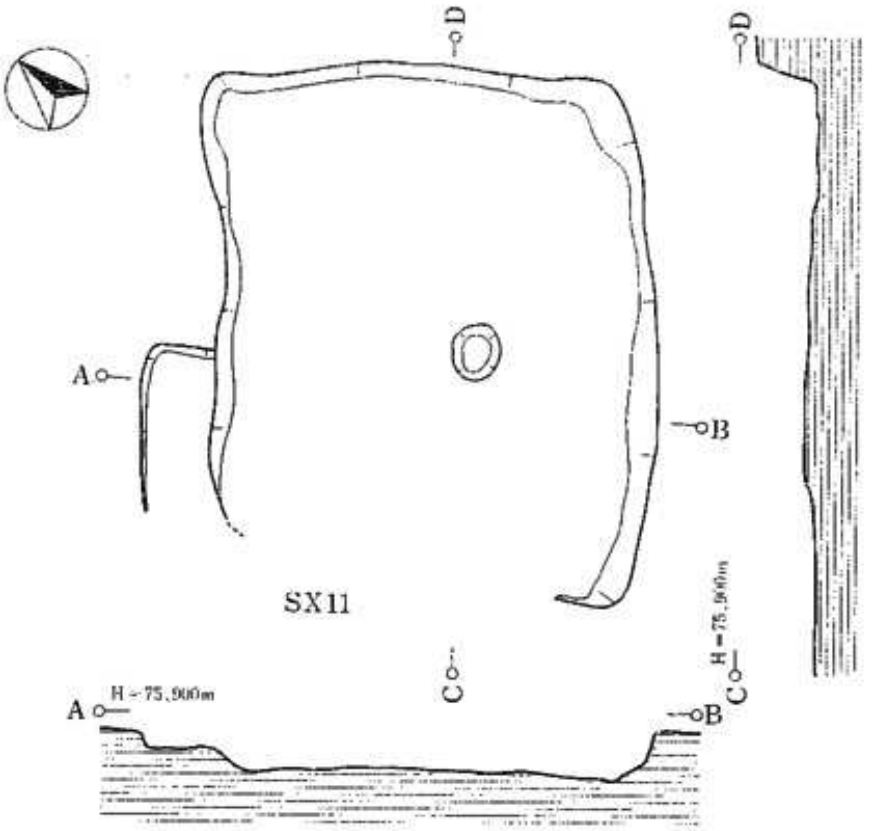
埋土のあり方はＳＸ11と同様で、形態に相異はあるもののほぼ同時期の構築と見られる。ただ小さい方の第2層には、灰状のものが比較的多く含まれており、この内部か周囲での火の使用が想定できる。

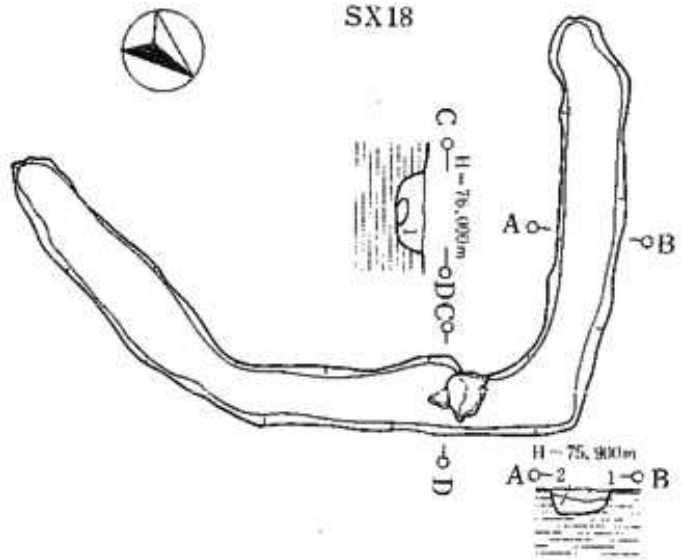
ＳＸ18（第21図、図版22）

調査区南側、ＬＰ39を中心とする位置で確認した。遺構確認時は上記2例同様長方形のプランとして把えていたが、掘り下げていくうちに幅60cm前後の変形した「コ」字を呈する溝状の遺構であることが判明した。確認面からの深さは、25～30cmである。埋土には砂質の地山土が充填している。

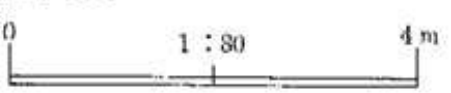
ＳＸ50（第5図、図版4）

調査区南側、ＬＰ40を中心とする位置で確認した。ＳＸ18は南側に隣接している。軸線方向はＳＸ12に近似する。遺構の西側を欠いており、平面形・規模は不明瞭であるが、北西－南東方向で540cm、これに直交する側で現存長280cmである。確認面からの深さは5－25cmで底面

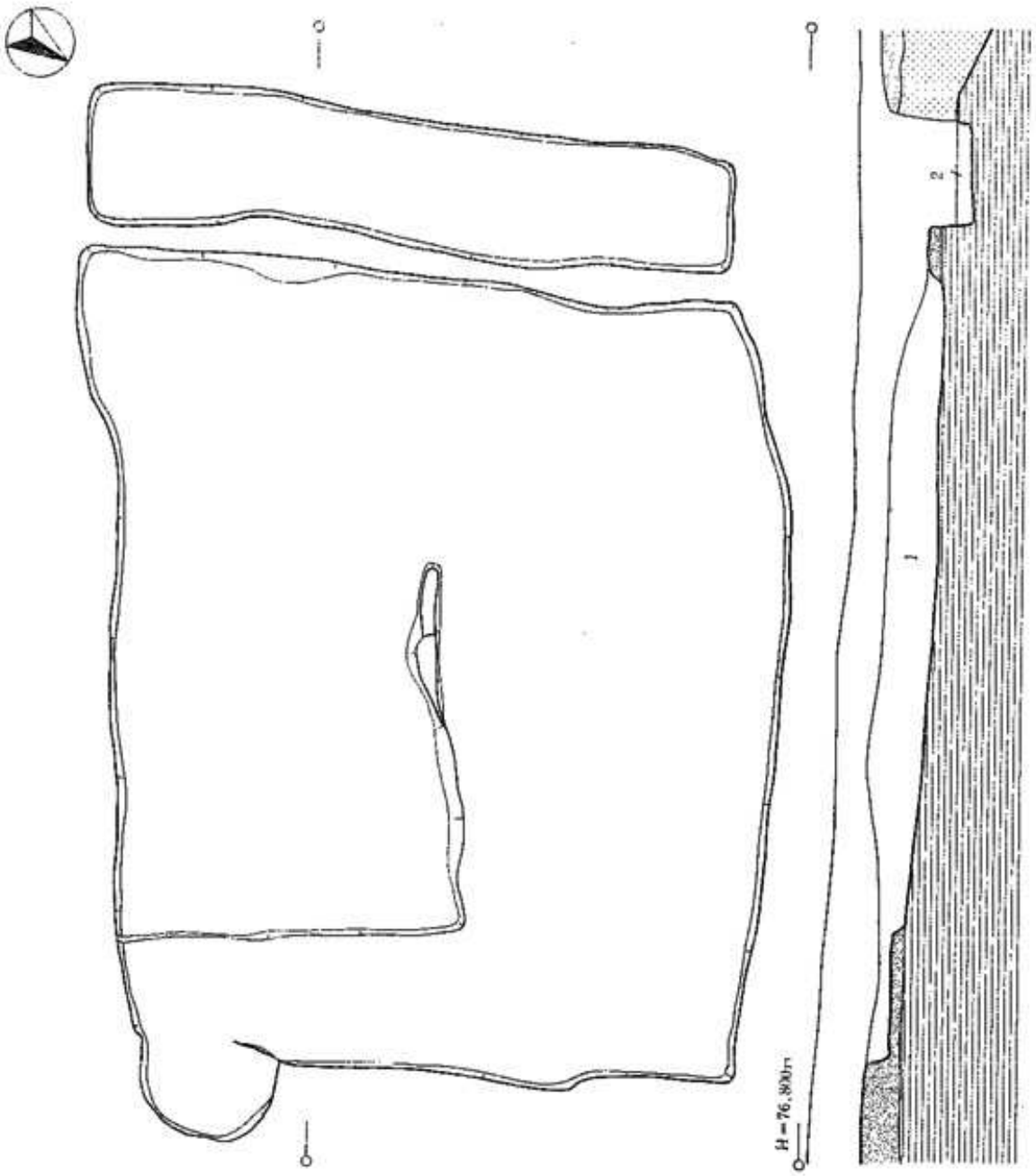




SX18
1層　黄褐色(10YR 5/6～5/8)砂質粘土、しまり弱、地山土のように
　　地山粘土ブロックが斑状に混入している
2層　黄褐色(10YR 5/6)と黒褐色(10YR 2/2)の混合土(5：5)



第21図　竪穴状遺構(1) SX11・18



1層　B・C層の二次堆積土、上位で径5～15mm、下位で20～70mmのC層の小ブロックを主とする、この為土層そのものがボソボソした攪乱土のように見える
2層　黒褐色(10YR 2/2)しまり弱、炭をやや多く含む、C・D層はほとんど含まれていない

第22図　竪穴状遺構(2)　SX12

も凹凸が著しく、ＳＸ11・12やＳＸ18とは異なる機能－土取り穴など－が想定される。

ＳＸ５８（第５図）

調査区南側、ＬＯ37で確認した。削平を受けたためであろうか、遺構の北側隅のみの検出である。僅かに残る遺構の壁高は最大で32cm、軸線方向、形態、埋土から見てＳＸ11・12と同一視できるものと考えている。

（２）溝状遺構

３条検出しているが、三者三様を示している。

ＳＤ２３（第５図）

調査区中央南側、ＬＰ40～ＬＱ43にわたって位置している。確認できる長さは11.2ｍで段丘崖に沿うように配されている。幅は20cm前後、深さは５～13cmである。

ＳＤ４６（第16図、図版20）

調査区中央西側、ＬＲ47を中心とする位置で確認した。ＳＫ20と重複しこれより新しい。確認できる長さは400cm余り、幅は35～50cmで、溝上面が非常に堅く締まっている。検出位置が沢口部(沢２)であることと考え合わせ、単に沢水の流路であったかあるいはこれを利用した小径であったのかもしれない。

ＳＤ５６（第５、10図）

調査区南端部、ＬＮ・ＬＯ35で確認した。確認できる長さは400cm余りで、検出位置、断面形態（Ｖ字形、深さ30～40cm)のあり様から、地滑りに伴う地割れ痕跡ではないかと想定している。同様の例は、昭和62年に発掘調査されている能代市石丁遺跡でも確認されている。

（３）畑跡ＳＸ６１(第５図、図版３、20)

調査区ほぼ中央、沢２と竪穴状遺構ＳＸ12に囲まれる位置で確認した。畑跡は、最低５列あり、北東から南西に向かってそれぞれ８～12cmの段差で下っている。一列あたりの幅は130～160cm、一区画内の面積は、はっきりしているもので3.6～６ｍ2程ある。

第２節　遺構外出土遺物

上ノ山Ⅱ遺跡で出土した遺物は、整理用コンテナで12箱ある。このうち前節で取り上げた遺構内出土遺物が１箱にも満たないことから、大部分の遺物は遺構外出土と言える。

出土遺物は、縄文時代の土器・土製品、石器・石製品を主とし、少量の近現代陶磁器と一片の須恵器である。土器類と石器類の出土比率はおよそ5.5：4.5で、全出土量に占める石器の割合が比較的高い。これらの遺物は、畑地造成等に伴う削平や土の移動により必ずしも廃棄時の位置を保っているのか明確でない区域もあるが、少なくとも数箇所の遺物集中ブロックを見い

だすことができる。しかも縄文時代について見れば、ある特定時期の遺物が特定のブロックに集中している場合や、逆に比較的広く分布している場合などの特徴を抽出できそうである。この点に注視し、第23、24図に時期別の出土土器分布図を示してある。

1　土器（第25～39図、図版25～27）

出土土器は、時期毎に大別、型式等で細分を行った。

第Ⅰ群土器－縄文時代早期の土器－　1類、2類に細分できる。

第Ⅱ群土器－縄文時代前期の土器－　1類、2類に細分できる。

第Ⅲ群土器－縄文時代中期の土器－　1類、2類に細分できる。

第Ⅳ群土器－縄文時代後期の土器－　1類～4類に細分できる。

第Ⅴ群土器－縄文時代晩期の土器－　1類～4類に細分できる。

第Ⅵ群土器－古代以降の土器－　1類、2類に細分できる。

第Ⅰ群土器（第25、26図、巻頭図版1、2、図版24）

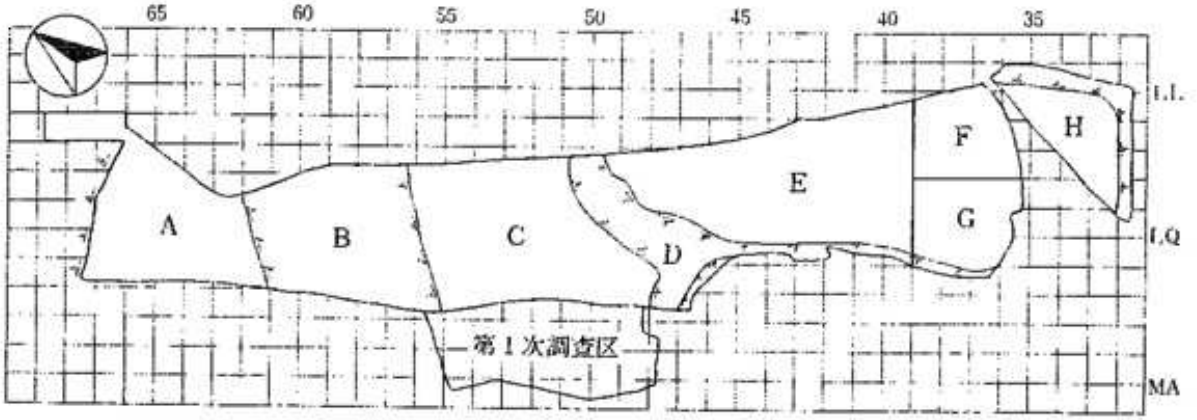
縄文時代早期(前葉～)中葉の貝殻文土器群である。いずれも破片で50点ほど出土している。

1類(34)は、縄文の後貝殻条痕を施した土器である。D区域(沢2、第23図上の8区域区分図参照)の南側で1個体分検出している。全体の形状は不明であるが、出土した7点の土器片から見て比較的大形の土器になるものと考えられる。

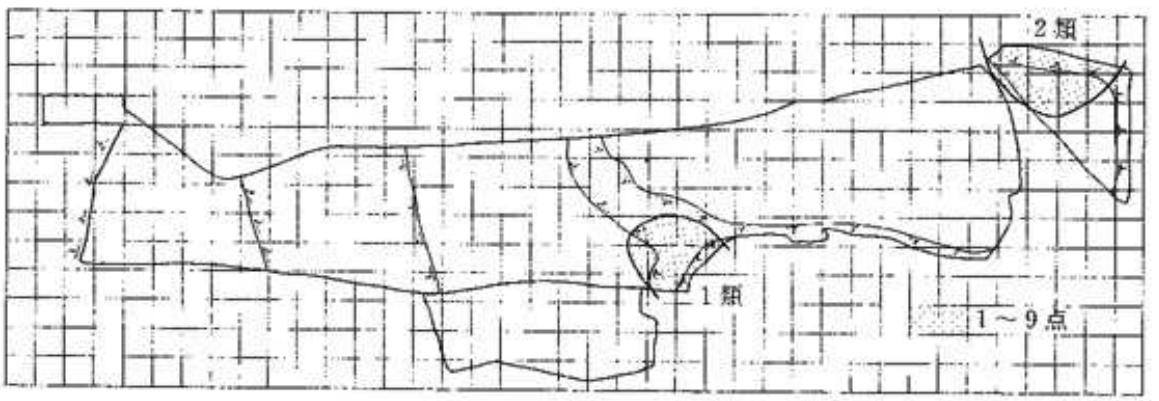
色調は、外面暗赤褐色、内面黒褐色を呈し、焼成良好である。胎土には細かな石英粒子を含む砂粒が多く含有している。僅かに繊維も含まれている。口唇部は無文であるが面取りされ、外面は縄文(ＬＲ)の後、横位に貝殻条痕が浅く施文されている。内面は丁寧にナデられている。

2類(35～49)は、貝殻沈線文系統の末葉に位置づけられる土器群である。出土位置は、調査区南端のH区域の一角に限定される。少なくとも14個体は存在し、胎土には白色、有色の砂粒を比較的多く含み孔隙やや大であるが焼成良好である。色調は、焼成の極めて良好な35が橙色、43、48が赤褐色、他はにぶい黄褐色～黒褐色を呈している。いずれの個体にも繊維は含まれていない。全体の形状の知れるものはないが、平縁あるいは波状口縁を呈し、36から推定すると頸部がやや窄み、口縁部が直線的に外傾し、底部は尖底をなすと考えられる。36は少なくとも25cm以上の器高を有していたと思われる。

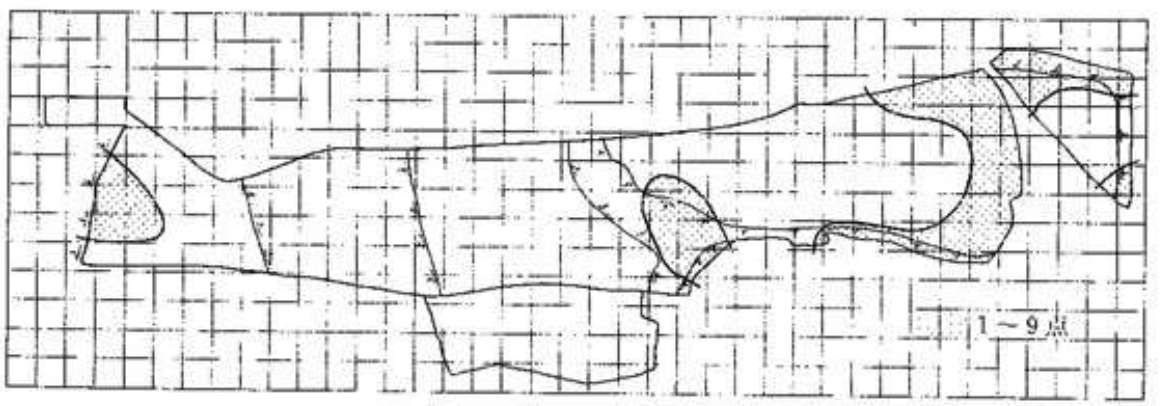
本類の特徴は、口縁部に貝殻腹縁を斜位または縦位に比較的長く押捺施文していることにある。これに短沈線(35、37)や刺突(36)を加える例もある。文様帯の認められるものは、40で幅5.5cm、36で3.5cmである。口唇部には、刺突(35)、貝殻腹縁圧痕(37、40)、刻目(39)、36は先後は不明であるが指頭圧痕と貝殻条痕が施文されバラエティー豊かである。41は口縁部に近い破片で、沈線による矢羽根状(羽状)施文のある土器である。



上ノ山Ⅱ遺跡区域区分図（A～H区域）



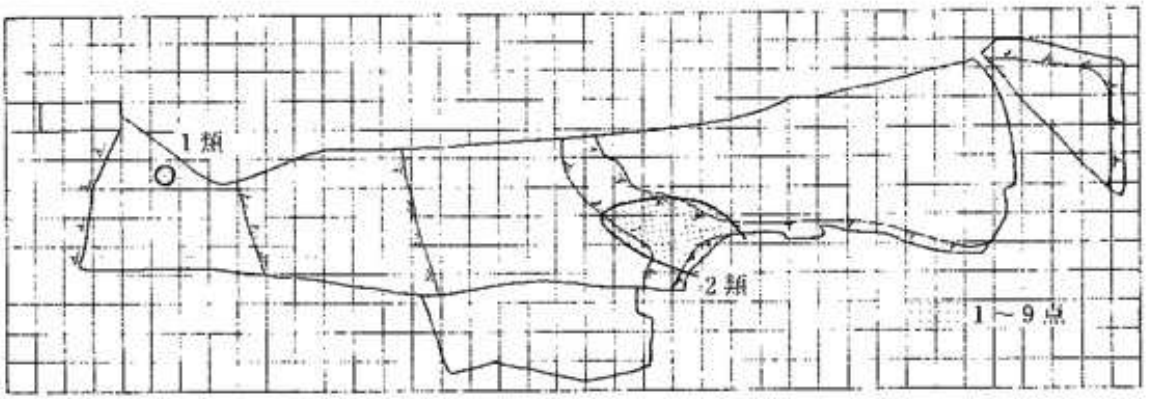
第Ⅰ群土器（早期）



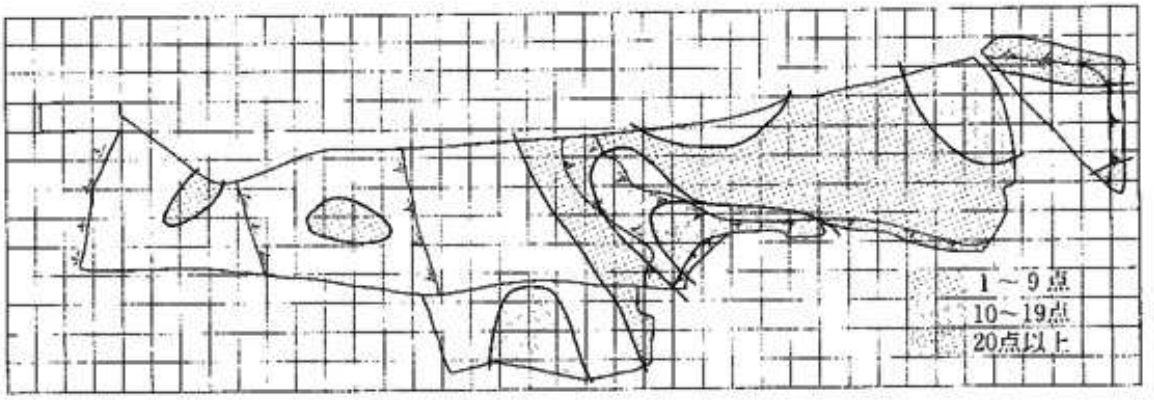
第Ⅱ群土器（前期）

0　1：1120　28m

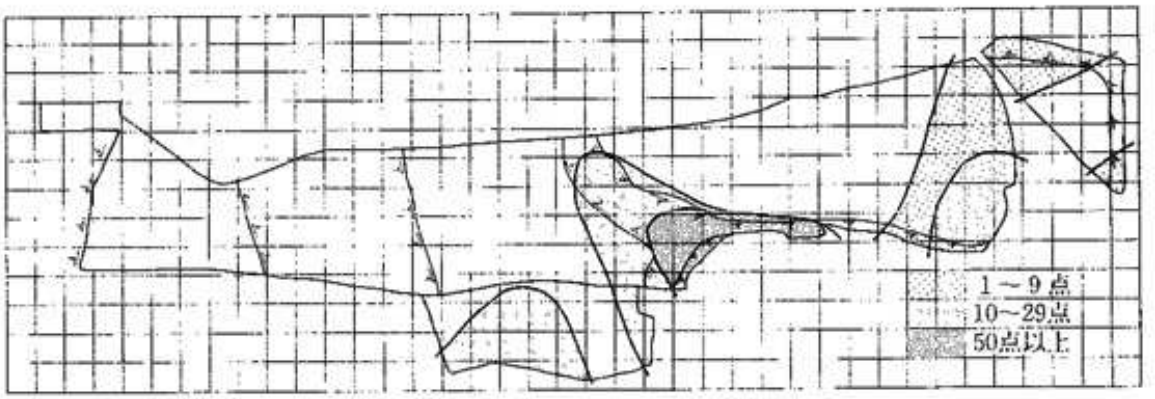
第23図　遺構外出土土器時期別分布図（1）



第Ⅲ群土器(中期)



第Ⅳ群土器(後期)

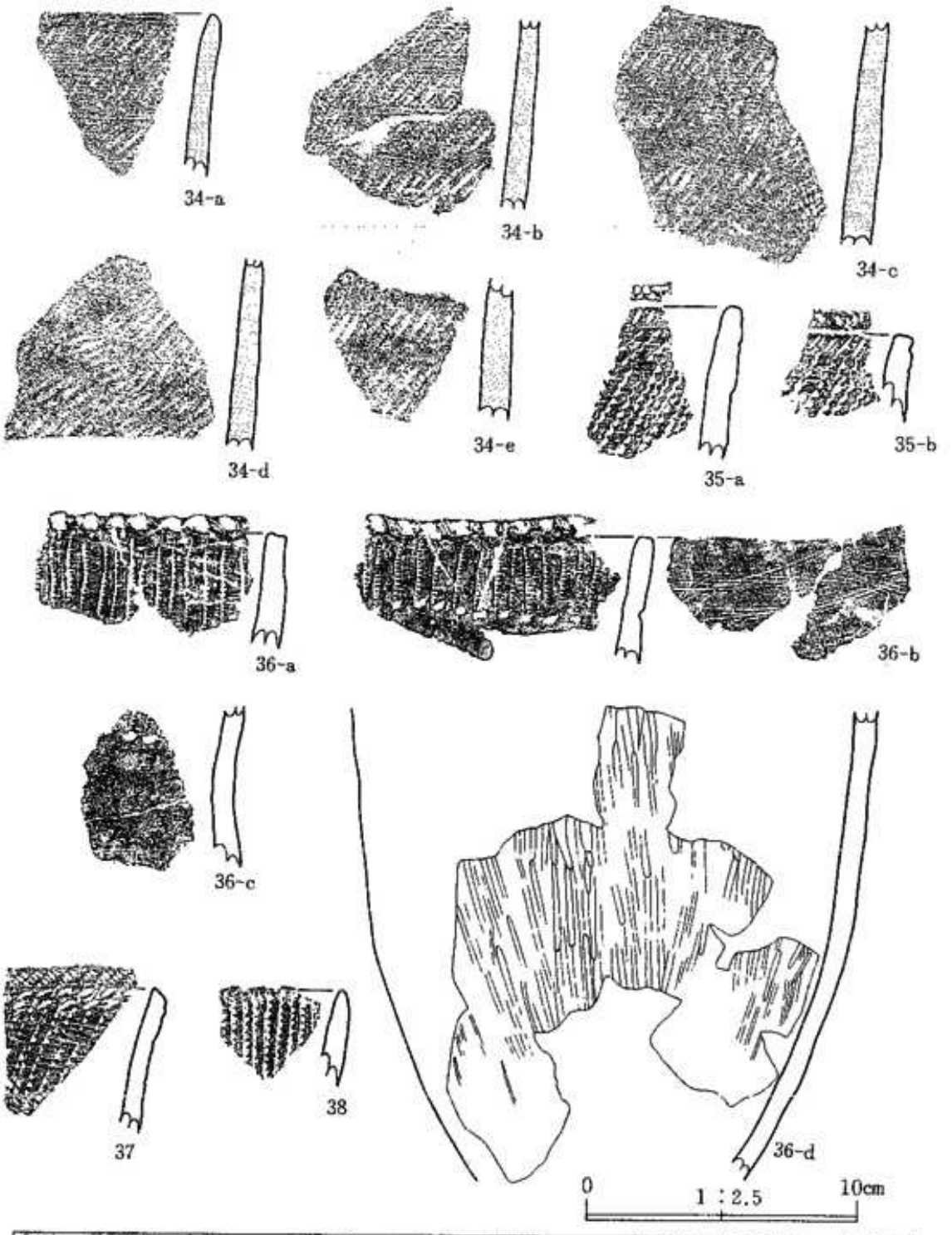


第Ⅴ群土器(晩期)

0　1：1120　28m

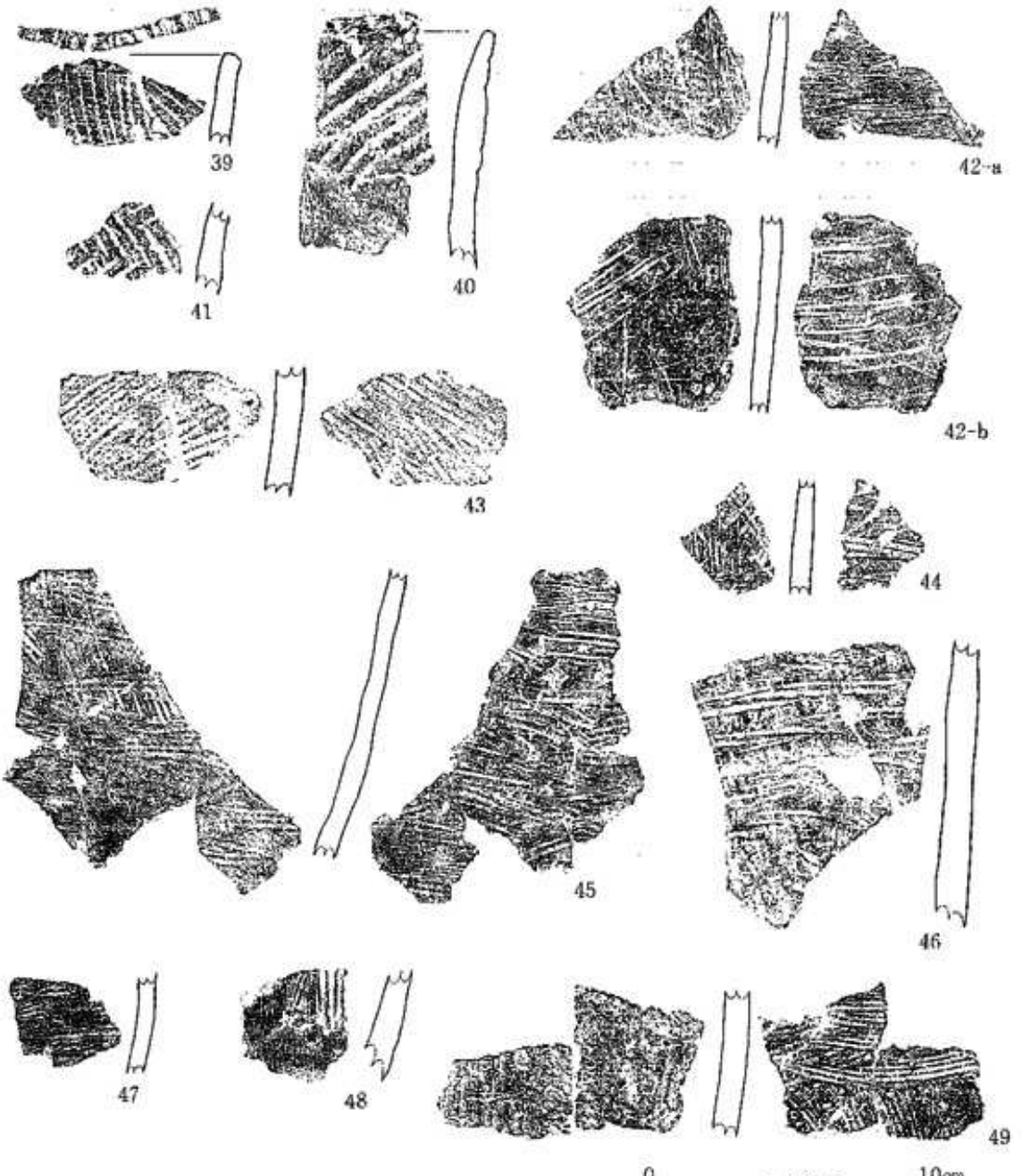
点数(個体数)は各グリッドあたりの出土点数

第24図　遺構外出土土器時期別分布図(2)



番号	出土位置	文様	胎土・焼成・備考	分類
34	SK20、LH48 LQ46～48	(外)縄文LR→横位貝殻条痕、(内)横位ナデ	繊維、石英、繊維含む	I - 1
35	LK34、35	口縁部斜交貝殻条痕→指頭圧痕、(外)口縁部貝殻腹縁文→斜交、(内)横位ミガキ	砂粒やや多いが焼成良好	I - 2
36	LL34	口縁部貝殻条痕→指頭圧痕、(外)口縁部貝殻腹縁文→斜交、胴部横位ミガキ、(内)口縁部貝殻条痕、胴部粗いナデ	砂粒やや多いが焼成良好	I - 2
37	LL34	口縁部貝殻腹縁文、(外)貝殻腹縁文→横位、貝殻条痕、(内)横位ミガキ	砂粒やや多いが焼成良好	I - 2
38	LL35	小波状口縁、(外)貝殻腹縁文、(内)ナデ	砂粒少量含む	I - 2

第25図　遺構外出土遺物(1)・土器(1)　第Ⅰ群土器(1)



番号	出土位置	文様	胎土・焼成・備考	分類
39	LK33	波状口縁、口唇部刻目、(外)貝殻腹縁文、(内)ナデ？	砂粒やや多く含む	I - 2
40	LL34	口唇部貝殻腹縁圧痕、(外)貝殻腹縁文、(内)横位ナデ	砂粒多量に含む	I - 2
41	LL33	(外)矢羽根状沈線文、(内)ナデ(貝殻条痕か)	砂粒をやや多く含む	I - 2
42	LL35	(外,内)貝殻条痕(内面の一部は棒状工具を使用している可能性がある)	砂粒やや多いが焼成良好	I - 2
43	LL31	(外,内)貝殻条痕	砂粒をやや多く含む	I - 2
44	不明	(外,内)貝殻条痕	砂粒少量含み焼成良好	I - 2
45	LL35	(外,内)貝殻条痕、42と同一個体である可能性がある	砂粒やや多いが焼成良好	I - 2
46	LL32	(外)貝殻条痕、(内)横いナデ	砂粒やや多いが焼成良好	I - 2
47	LK34	(外)貝殻条痕、(内)ナデ？、煤状炭化物付着	砂粒やや多く含む	I - 2
48	LL33	(外)貝殻条痕、(内)ナデ	砂粒やや多いが焼成良好	I - 2
49	LL34	(外)ナデ、(内)貝殻条痕	砂粒少量、焼成ややあまい	I - 2

第26図　遺構外出土遺物(2)・土器(2)　第Ⅰ群土器(2)

胴部以下には文様を持たず、主に貝殻による条痕が調整手法として用いられている。42～45は内外面に、46～48は外面のみ、49は内面に条痕が観察できる。条痕が片面のものの一方はナデのようである。

第Ⅱ群土器(第27～30図、図版25)

縄文時代前期の土器群である。いずれの個体にも含有量の多寡はあるものの、胎土に繊維を含んでいる。

1類(50－96)は、深郷田式あるいは茂屋下岱式と呼ばれる土器群を一括してある。100点程出土している。出土位置は特定の区域に集中するのではなく、D－H区域に散在している。器形の知れるものはないが、口縁部や底部の破片から見て比較的小形で平底の深鉢形を呈するものであろう。

文様構成は、縄文(50～73)もしくは撚糸(74～94)からなり、例外的に沈線(95)、爪形(96)を施文する例もある。54の内面、87の底部には貝殻条痕が認められる。50、51の口唇部には指頭による圧痕をもつ。内面は基本的にナデである。なお63は、丸底を呈する底部付近の部位と見られ、本類の中では古手に位置づけられるのかもしれない。

本類は、標識となった田代町茂屋下岱遺跡の他、大館市上ノ山Ⅰ遺跡・羊掘沢遺跡・福館遺跡などでも検出されている。

2類(97－102)は、円筒下層d式に比定される土器でる。総計でも10点に満たない出土量である。出土位置はA、G－H区域に点在している。

97～99は、それぞれ別個体であるが、口縁部に縄文圧痕、形式的な隆帯、胴部には羽状縄文を施文する共通点がある。口縁部文様帯は、幅20～28㎜と狭い。97の隆帯には、先端がやや丸みをもったヘラ状工具による刺突が認められる。木目状撚糸文をもつ102は、胎土に多量の砂粒を含み、本類の他の土器と比較して異質の感がある。

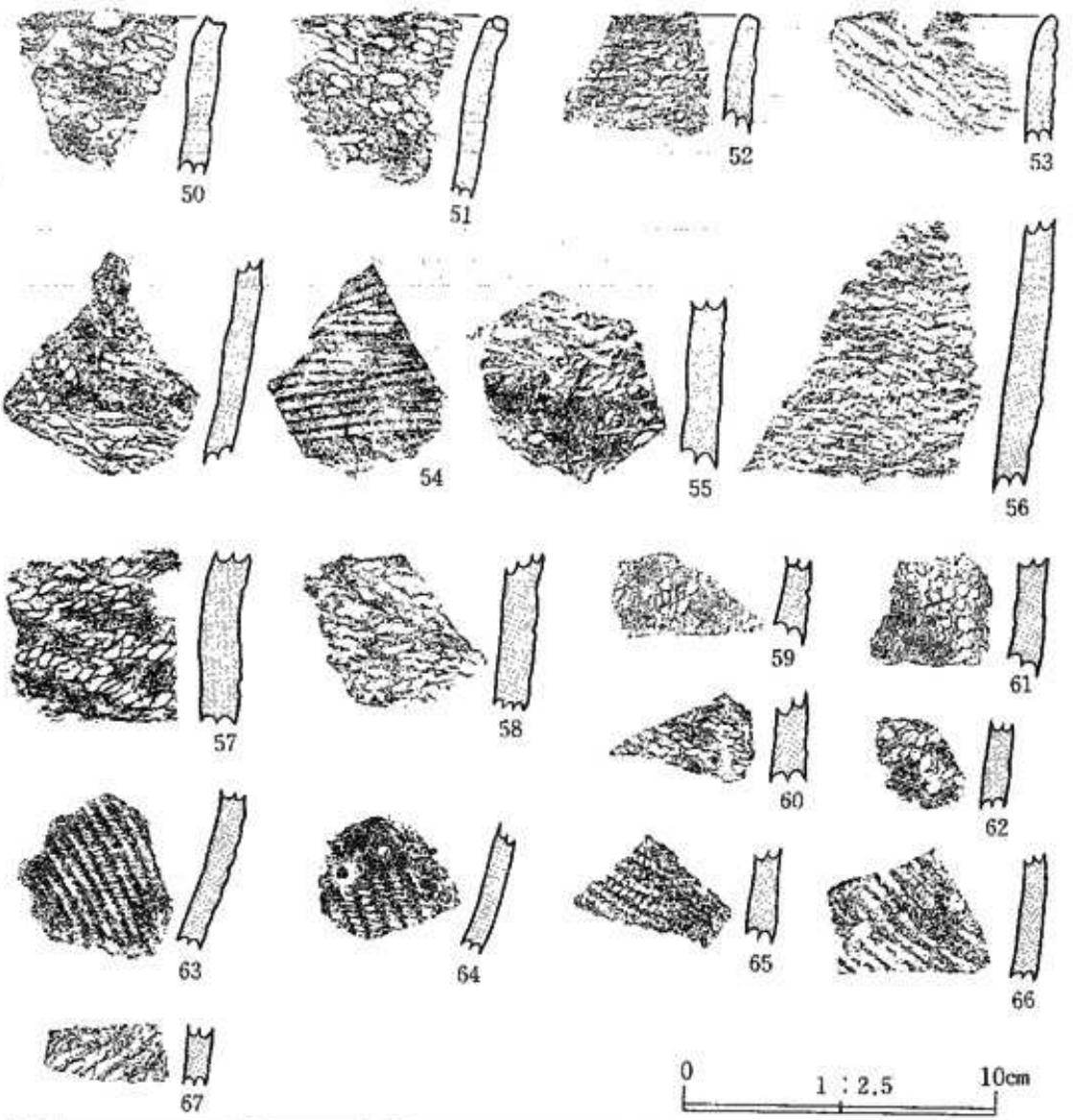
第Ⅲ群土器(第31図、 図版26)

縄文時代中期の土器である。出土量としては本群が最も少ない。

1類(103)は、円筒上層d式に比定できるものである。A区域LO64から1個体単独に検出された。

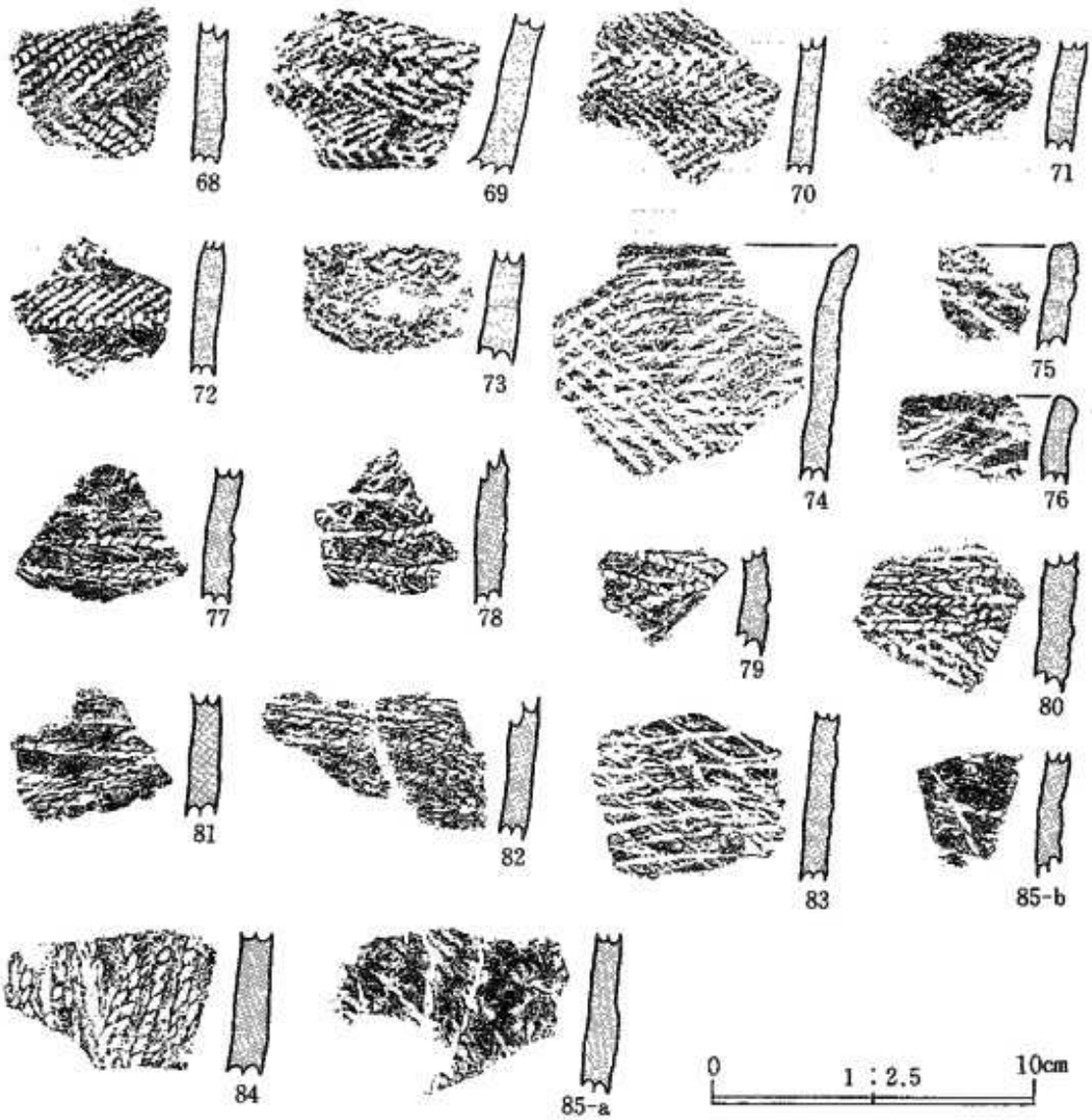
2類(104－107)は、大木9式併行と考えられる土器である。D区域から4点出土している。

104と105～107は、その文様構成から前者が大木9式(中～後段階)、後者が最花式(中の平Ⅲ式)に比定できる。両者は、鹿角市天戸森遺跡で伴出している事例(第71号A竪穴住居跡など)もあることから、ほぼ同時期と見ることができよう。



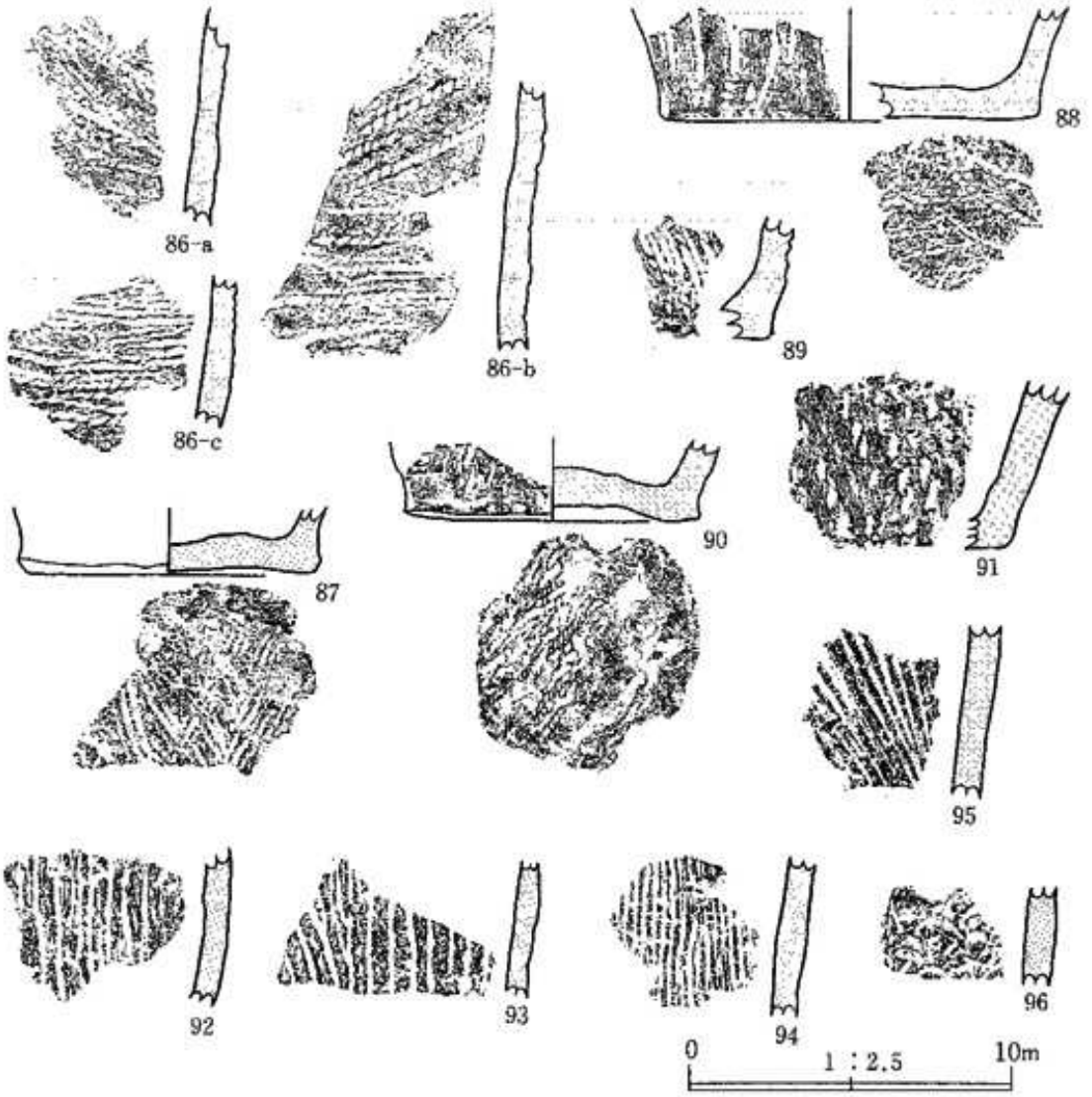
番号	出土位置	文様	胎土・焼成・備考	分類
50	LO36	口縁部指頭圧痕、(外)節の大きい縄文、(内)ナデ	繊維、白色砂粒、焼成良好	Ⅱ－1
51	LM34	口唇部指頭圧痕、(外)節の大きい縄文、(内)ナデ？、焼成	繊維、白色砂粒、焼成やや良	Ⅱ－1
52	LL32	(外)縄文ＬＲ、(内)ナデ	繊維、砂粒、焼成良好	Ⅱ－1
53	不明	(外)撚のあまい縄文ＬＲ？、(内)ナデ	繊維、白色砂粒	Ⅱ－1
54	LI36	(外)縄文ＲＬ・燃尻ＬＲ？、(内)貝殻条痕	繊維、白色砂粒、堅緻	Ⅱ－1
55	LN36	(外)縄文ＬＲ、(内)ナデ	繊維、白色砂粒、焼成良好	Ⅱ－1
56	LO35	(外)縄文、(内)ナデ、LI縁部に裡近い破片	繊維、白色砂粒	Ⅱ－1
57	LN36	(外)縄文ＬＲ、(内)ナデ	繊維、白色砂粒	Ⅱ－1
58	LO36	(外)縄文ＬＲ、(内)平滑なナデ	繊維、白色砂粒	Ⅱ－1
59	LL31	(外)縄文、(内)ナデ、煤状炭化物付着	繊維、白色砂粒	Ⅱ－1
60	LQ37	(外)縄文ＬＲ＋付加条？	繊維、白色砂粒	Ⅱ－1
61	LN36	(外)縄文、(内)ナデ	繊維、白色砂粒	Ⅱ－1
62	LN36	(外)縄文、(内)ナデ、煤状炭化物付着	繊維、白色砂粒	Ⅱ－1
63	LQ40	(外)縄文0段多条ＬＲ、(内)ナデ、底部に裡近い破片	繊維微量、白色砂粒、焼成良	Ⅱ　1
64	LM35	(外)縄文0段多条ＬＲ、(内)ナデ	繊維微量、堅緻	Ⅱ－1
65	LL37	(外)縄文ＲＬ、(内)ナデ	繊維、白色砂粒	Ⅱ－1
66	不明	(外)縄文Ｌ、(内)ナデ	繊維微量、堅緻	Ⅱ－1
67	LL33	(外)縄文Ｌ、(内)ナデ	繊維、細砂粒	Ⅱ－1

第27図　遺構外出土遺物（３）・土器（３）第Ⅱ群土器（１）



番号	出土位置	文　　様	胎土・焼成・備考	分類
68	LK35	(外)羽状縄文LR、(内)平滑なナデ	繊維、緊緻	Ⅱ－1
69	LM39	(外)結束第1種羽状縄文、(内)平滑なナデ、煤状炭化物付着、平底	繊維、緊緻	Ⅱ－1
70	LM39	(外)結束第1種羽状縄文RL？、(内)平滑なナデ	繊維、緊緻	Ⅱ－1
71	LM39	(外)結束第1種羽状縄文LR、(内)平滑なナデ	繊維、緊緻	Ⅱ－1
72	LM39	(外)結束第1種羽状縄文LR、(内)平滑なナデ	繊維、緊緻	Ⅱ－1
73	LM36	(外)結束第2種羽状縄文LR？、(内)ナデ？、摩滅	繊維、砂粒多量	Ⅱ－1
74	LP37	(外)撚糸文R、(内)ナデ？、(煤状炭化物厚く付着)	繊維、砂粒	Ⅱ－1
75	LN36	(外)撚糸文R、(内)ナデ	繊維、白色砂粒　繊	Ⅱ－1
76	LQ47,48	(外)撚糸文R、(内)ナデ	繊維、白色砂粒	Ⅱ－1
77	LO36	(外)撚糸文R、(内)ナデ	繊維、砂粒	Ⅱ－1
78	不明	(外)撚糸文R、(内)ナデ	繊維、砂粒	Ⅱ－1
79	LO45	(外)撚糸文L、(内)ナデ	繊維、砂粒やや少ない	Ⅱ－1
80	LN36	(外)撚糸文R、(内)ナデ	繊維、白色砂粒	Ⅱ－1
81	LO36	(外)撚糸文R、(内)ナデ	繊維、砂粒多量	Ⅱ－1
82	LO36	(外)撚糸文R、(内)ナデ、摩滅	繊維、白色砂粒	Ⅱ－1
83	LO45	(外)不整網目状撚糸文R？、(内)ナデ	繊維、白色砂粒	Ⅱ－1
84	不明	(外)撚糸文L、(内)平滑なナデ	繊維、白色砂粒多量、緊緻	Ⅱ－1
85	LN36	(外)撚糸文R、(内)平滑なナデ	繊維、砂粒やや少ない、焼成良	Ⅱ－1

第28図　遺構外出土遺物（4）・土器（4）第Ⅱ群土器（2）



番号	出土位置	文　様	胎土・焼成・備考	分割
86	LM42	(外)撚糸文R、(内)ナデ	繊維、砂粒少量、焼成良好	Ⅱ－1
87	LM42	底部(外)貝殻？条痕、(内)ナデ、86と同一個体か	繊維、砂粒	Ⅱ－1
88	LO81	(外、底部)撚糸文R、(内)ナデ	繊維、砂粒やや少ない	Ⅱ－1
89	LL36	(外)撚糸文R、(内、底部)ナデ	繊維、白色砂粒	Ⅱ－1
90	LM36	(外、底部)撚糸文R、(内)ナデ	繊維、白色砂粒多量	Ⅱ－1
91	LL37	(外)撚糸文、(内、底部)ナデ	繊維、白色砂粒	Ⅱ－1
92	LO45	(外)撚糸文R？、(内)ナデ	繊維、白色砂粒、焼成良好	Ⅱ－1
93	LO45	(外)撚糸文R、(内)ナデ、煤状炭化物付着	繊維微量、細砂粒	Ⅱ－1
94	LL37	(外)撚糸文R？、(内)ナデ	繊維多量、細砂粒やや少ない	Ⅱ－1
95	LK33	(外)沈線、(内)ナデ	繊維、砂粒、孔隙大	Ⅱ－1
96	不明	(外)縄文？一爪形文、結束を呈する、(内)ナデ？、摩滅	繊維、砂粒	Ⅱ－1

第29図　遺構外出土遺物(5)・土器(5)　第Ⅱ群土器(3)

第Ⅳ群土器(第32、33図、図版26)

縄文時代後期の土器である。出土量は第Ｖ群土器に次いで多く、出土範囲は全群中最も広域であり、Ｄ～Ｇ区域に多いものの、一応調査区のほぼ全域に及ぶ。１類～４類に細分できる。

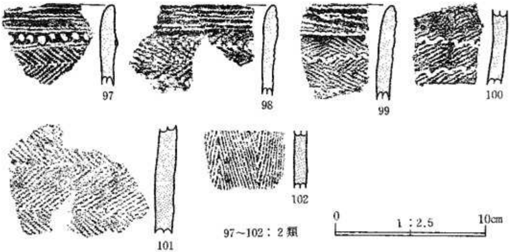
１類（108～115)は、後期初頭～前葉に位置づけられる一群で、前十腰内式とも称される。４類のうちの過半数がこの１類土器で占められる。Ｄ・Ｆ区域に比較的多く、Ｂ区域でも１点出土している。

本類の代表格は、第19図のＳＲ10埋設土器であり、縄文(108～113)あるいは撚糸(114、115)の地文に比較的幅の広い沈線を描いており、磨消手法は顕著に認められない。近傍における類例は、鳶ケ長根Ⅳ遺跡の第Ⅲ群土器に求めることができる。

２類(116、117)は、十腰内Ⅰ式とされるもので、沈線や磨消縄文に特徴がある。Ｆ区域に散在し、他区域では認められないようである。本類は、大館市塚の下遺跡、能代市真壁地遺跡などで比較的まとまって出土している。

３類(118、119)は、後期中葉に位置づけらける。Ｂ区域に１個体２点、Ｄ区域で１点のみ確認できた。

４類(120～126)は、後期後葉－末葉に帰属するものであろう。Ｄ区域にのみ確認できた。平行沈線間に刻目(120、126)や刺突(124、125)を充填させたモチーフに特徴がある。



番号	出土位置	文　様	胎土・焼成・備考	分類
97	LO39	(外)口縁部縄文ＬＲ，ＲＬ圧痕,隆帯貼付→刺突,胴部結束第1種羽状縄文ＬＲ，(内)ミガキ	繊維,砂粒やや少,孔隙大	Ⅱ－2
98	LM36,39	(外)口縁部縄文ＬＲ圧痕,胴部結束第1種羽状縄文ＲＬ？,(内)ミガキ	繊維,砂粒,孔隙大	Ⅱ－2
99	LL31	(外)口縁部縄文ＬＲＬ圧痕,胴部結束第2種羽状縄文ＬＲ,(内)ミガキ	繊維,砂粒,孔隙やや大	Ⅱ－2
100	LR48	(外)結束第2種羽状縄文ＲＬ,(内)ミガキ	繊維,砂粒やや少,孔隙大	Ⅱ－2
101	LM35	(外)結束第1種羽状縄文ＲＬ,(内)ナデ	繊維,砂粒やや少ない	Ⅱ－2
102	LO36	(外)木目状撚糸文Ｌ＋Ｒ	繊維少量,砂粒多量	Ⅱ－2

第30図　遺構外出土遺物（６）・土器（６）第Ⅱ群土器（４）

第V群土器(第33～38図、図版26、27)

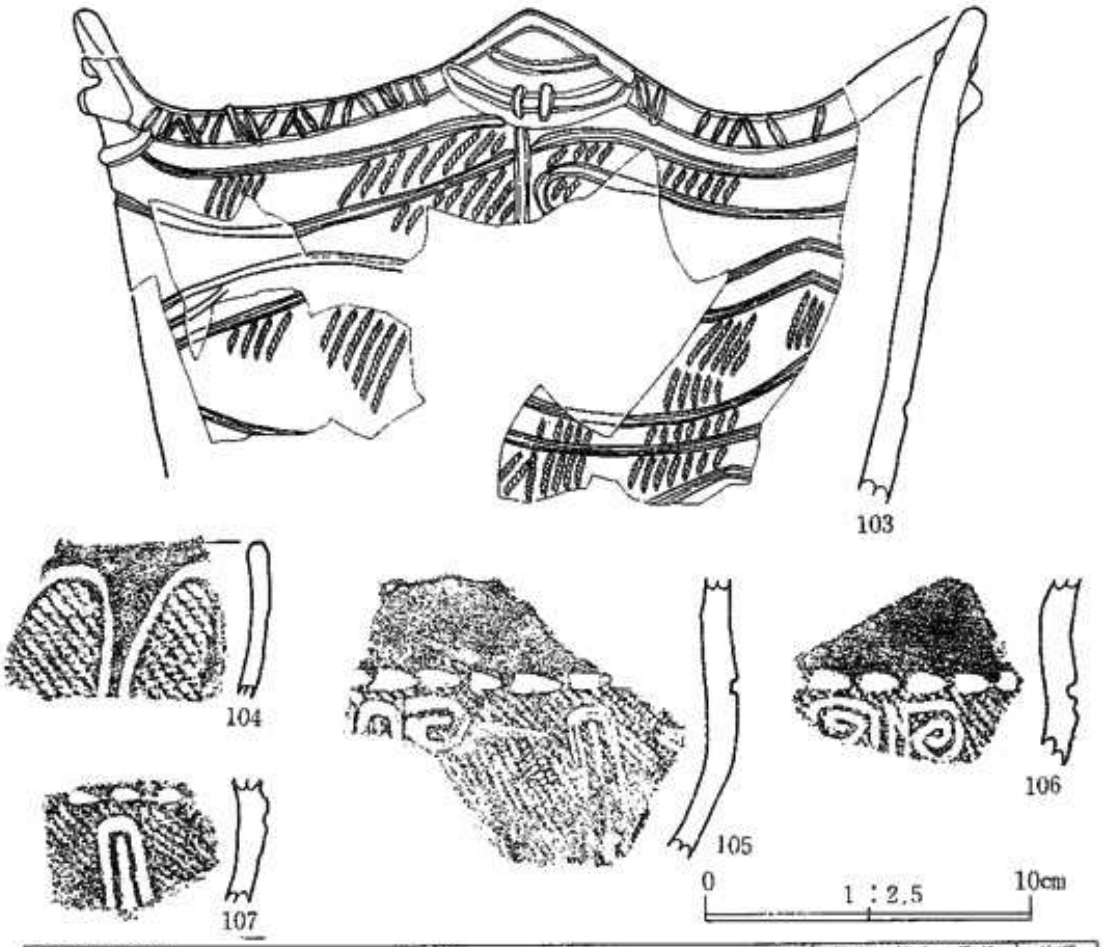
縄文時代晩期の土器である。本遺跡において主体を占める土器群となる。D、F～H区域に分布し、D区域LQ45～47で突出した出土量を示している。

本群は、出土量とともに器種も豊富である。その一方で破片資料の多さと、粗製の土器をもって第I～IV群土器のように型式細分した場合、どの型式(類)に帰属させればよいのか明らかにし得ない土器も多く含まれている。このような事由から、本群は器種・部位別に序列を定め、型式名(類)は副次的な扱いとする。

A種　深鉢～鉢形土器(127～151、179～208)は、口縁部の文様から分類できる。

a)弧状文あるいは三叉文をもつもの(127～130)、b)羊歯状文をもつもの(133～139)、

c)平行沈線間に連続刻目文をもつもの(140～142)、d)平行沈線文だけとなるもの(144～151)



番号	出土位置	文様	胎土・焼成・備考	分類
103	LQ64	(外)口縁部隆帯(縄)貼付→刻目、口縁～胴部縄文LR→沈線、(内)口縁部山形突起隆線貼付→ミガキ	細砂粒を多く含む	III－1
104	LQ49	(外)縄文LR→沈線→磨消、(内)ミガキ、波状口縁か、摩滅	砂粒	II－2
105	LQ45	(外)口縁部無文、頸部刺突、胴部縄文RL→沈線(懸垂文)、(内)ミガキ	石英を含む砂粒	III－2
106	LQ45	(外)口縁部無文、頸部刺突、胴部縄文RL→沈線(懸垂文)、(内)ミガキ	石英を含む砂粒	III－2
107	LR47	(外)頸部刺突、胴部縄文RL→沈線(懸垂文)、(内)ミガキ	石英を含む砂粒	III－2

第31図　遺構外出土遺物(7)・土器(7)　第III群土器

143は、本種の中では「く」の字に強く内湾する特異な形態の鉢形土器である。体部以下の文様は、斜行する縄文のみの場合と、半肉彫的手法による雲形文などで構成される場合がある。

B種　浅鉢～皿形土器(152～165)のうち152～159は、口縁部に装飾的要素の強い浮彫による突起を特徴とする。体部の文様は、鉢形土器と同じように雲形文を意図したモチーフが見られる。

C種　壺形土器(166～173)は、推定される頸部径の小さいもの(166～169)とやや大きいもの(170～172)がある。173は前者に伴うと考えられる底部資料である。

D種　注口土器(174～178)は、図示した5点を含めて、計10点にも満たない出土量である。

これらの土器を従来の編年大綱(大洞B～A′式)のなかに位置づけると、構成文様の豊富なA種(深鉢～鉢)では次のようになると考えている。

a)は大洞B式、b)は大洞BC式、c)は大洞C1式、d)は大洞C1～A(A′)式

以上のように本群土器を一覧してみると、主体は大洞C1式であるものの、前段階の影響を残しているように看て取ることができることから、C1式でも比較的早い段階に位置づけられよう。

挿図下の観察表における類別は、大洞B式を1類、大洞BC式を2類、大洞C1・C2式を3類、大洞A・A′式を4類として記してある。

第Ⅵ群土器(第39図212、213 図版27)

縄文時代以降の土器を一括する。

1類(212)は、B区域(沢1=LS58)出土の須恵器甕である。胎土は均質で焼成も良好である。該期の遺物はこれ1点だけである。

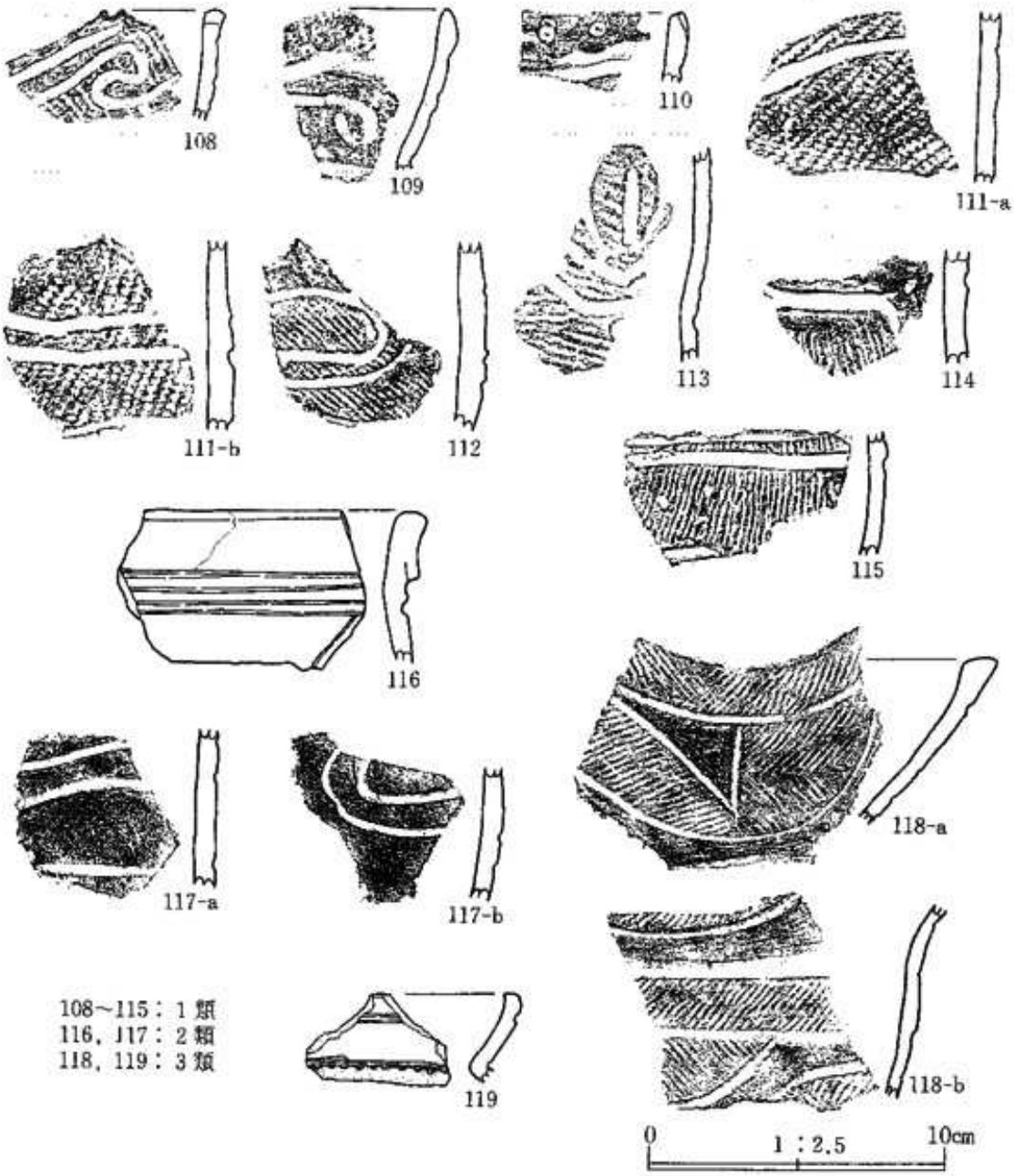
2類(213)は、B区域以南に散発的に検出される近現代陶磁器を指す。図示した1点はLQ45出土の唐津灰釉皿(肥前産陶器)である。見込みと高台に砂目痕が残る。同陶器を鑑定していただいた大橋康二氏によれば、1600～1630年代に帰属する遺物であるということであった。

2　土製品(第39図209～211、図版27)

本項に該当する土製品は、円盤状土製品2点と土版1点である。

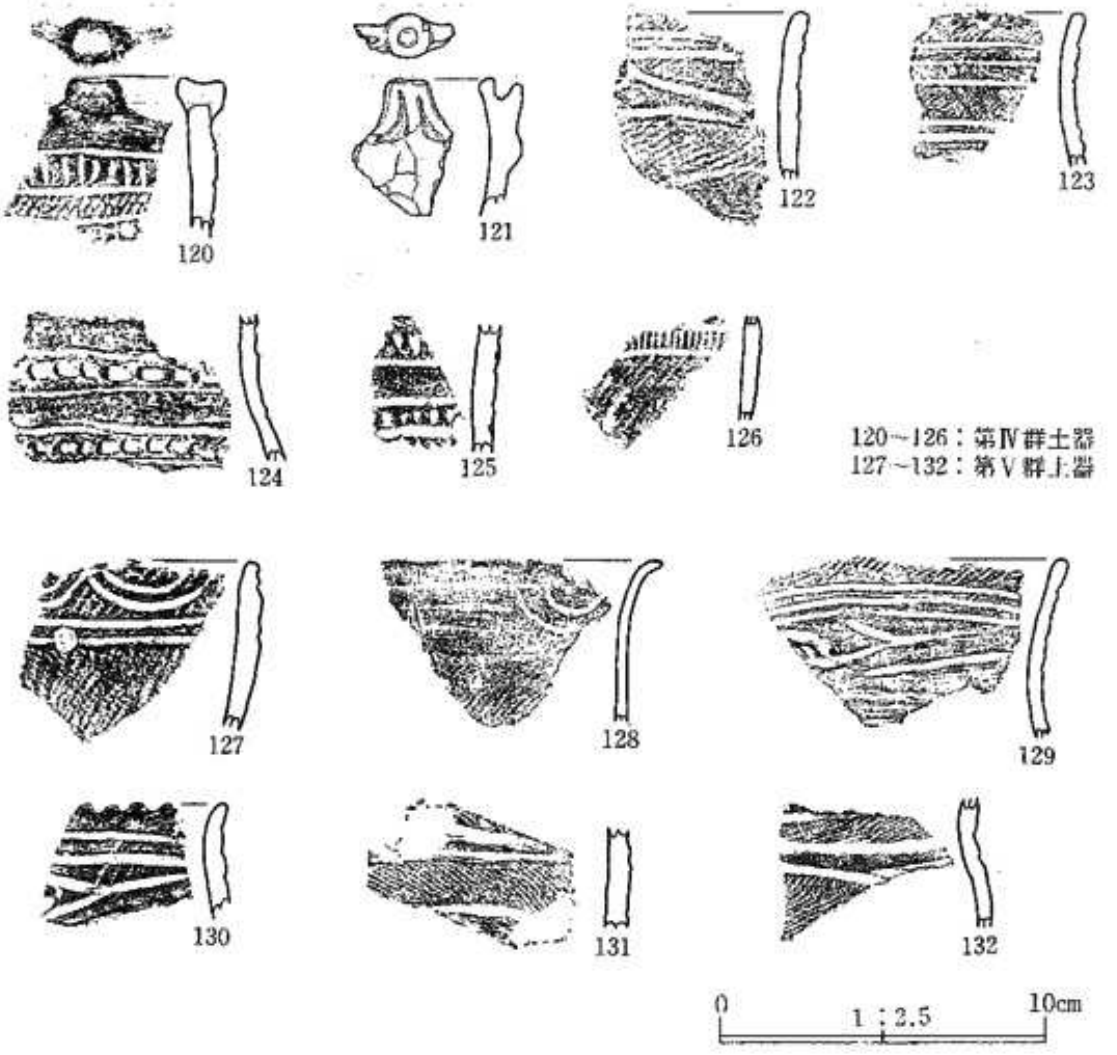
円盤状土製品(209、210)は、半欠しているが推定径32mmと44mmになる。2点とも最終的な整形は周縁部の研磨による。209の中央部には孔をもつ。胎土、縄文から第Ⅴ群土器に伴う遺物と考えられる。LM36、LQ41の出土である。

土版(211)は、LQ45から出土している。欠損及び摩滅のため全体の形状は不明であるが、明らかに表裏面でモチーフの異なる刻線が描出されている。胎土、焼成とも一般的な縄文土器と差異はない。



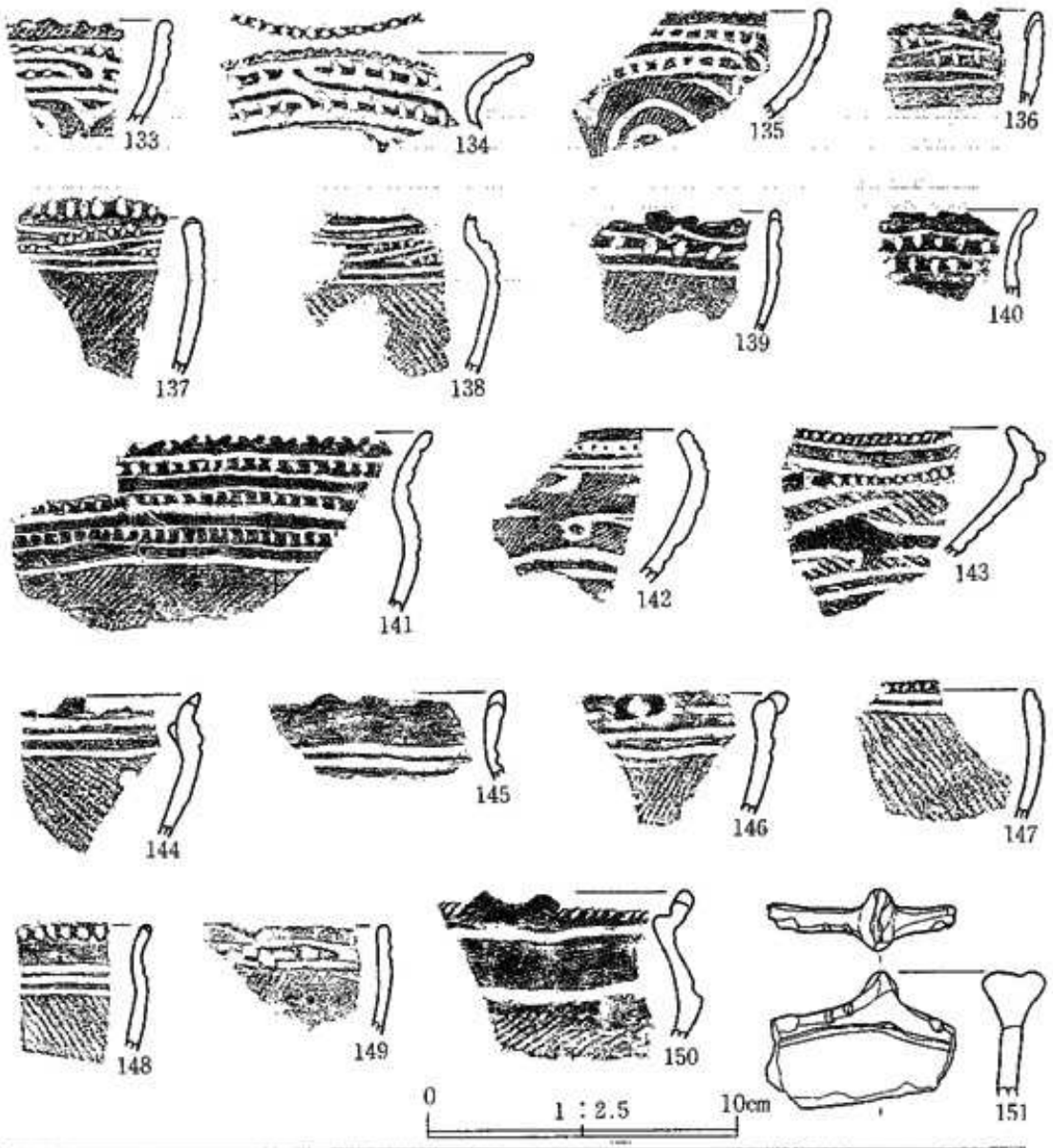
番号	出土位置	文　様	胎土・焼成・備考	分類
108	L N36	山形口縁頂部刻目，(外)縄文LR→沈線→一部磨消，(内)ミガキ	石英を含む砂粒，焼成良好	Ⅳ－1
109	L O58	(外)口縁端部縄文，口縁部沈線，(内)ミガキ	細砂粒多い	Ⅳ－1
110	L M36	(外)円形竹管刺突，沈線，(内)ミガキ	砂粒，焼成良好	Ⅳ－1
111	L L37	(内)縄文RL→沈線，(内)ミガキ　外	細砂粒やや少，焼成良好	Ⅳ－1
112	L Q45	(外)縄文L→沈線，(内)ミガキ	細砂粒，焼成良好	Ⅳ－1
113	L M39	(外)縄文L→沈線，(内)ミガキ	砂粒を多く含む	Ⅳ－1
114	L P47	(外)撚糸R→沈線→磨消，(内)ミガキ	砂粒，焼成良好	Ⅳ－1
115	L N39	(外)撚糸R→沈線，(内)ミガキ	砂粒，焼成良好	Ⅳ－1
116	L L37	(外)沈線，(内)ミガキ	砂粒	Ⅳ－2
117	L L37	(外)沈線→磨消，(内)ミガキ	砂粒やや少，焼成良好	Ⅳ－2
118	L Q58	(外)縄文LR，RL(一部羽状)→沈線→磨消，(内)ミガキ	砂粒やや多，焼成良好	Ⅳ－3
119	L Q42	(外)沈線→刺突→条痕，(内)ミガキ	砂粒	Ⅳ－3

第32図　遺構外出土遺物(8)・土器(8)　第Ⅳ群土器(1)



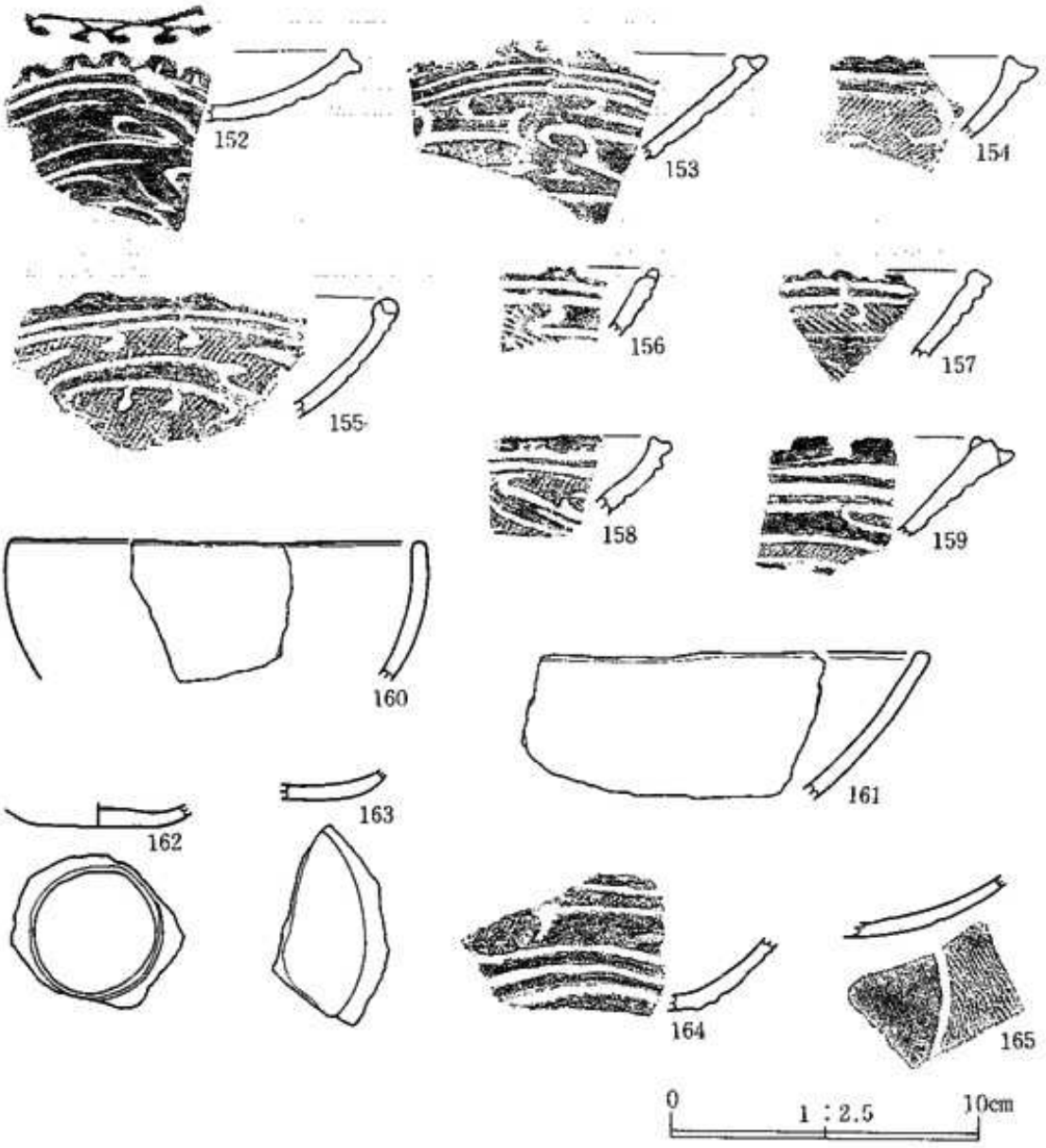
番号	出土位置	文　様	胎土・焼成・備考	分類
120	LQ41	口唇部ボタン状突起、(外)縄文L→沈線→磨目、(内)ナデ	砂粒	Ⅳ－4
121	LQ40	山形突起部隆帯刺突、(外)磨目、(内)ミガキ	繊砂粒、焼成良好	Ⅳ－4
122	LQ45	(外)縄文LR→沈線→磨消、(内)ミガキ	繊砂粒	Ⅳ－4
123	不明	(外)縄文R？→沈線→磨消、(内)ミガキ、煤状炭化物付着、薄い波状口縁か	繊砂粒、堅緻	Ⅳ－4
124	不明	(外)沈線→刺突、煤状炭化物付着、(内)ナデ	砂粒やや多く含む	Ⅳ－4
125	LQ45	(外)沈線→刺突、(内)ナデ	繊砂粒	Ⅳ－4
126	LQ45	(外)縄文？→沈線→磨目、(内)ナデ	砂粒やや多く含む	Ⅳ－4
127	LQ47	口唇部刻目、(外)縄文LR→沈線、補修孔、(内)ミガキ	砂粒少量、焼成良好	Ⅴ－1
128	LQ45	(外)縄文LR→沈線・磨消、(内)ミガキ、小波状口縁、器壁薄い	砂粒、焼成良好	Ⅴ－1
129	LM37	(外)縄文LR→沈線・磨消、(内)ミガキ、小波状口縁	砂粒やや少、焼成良好	Ⅴ－1
130	LQ47	(外)沈線、磨消、(内)ミガキ、小波状口縁	胎土均質	Ⅴ－1
131	LQ44	(外)縄文RL→沈線、(内)横位ミガキ	胎土均質	Ⅴ－1
132	LQ38	(外)縄文LR→沈線・磨消、(内)横位ミガキ、ナデ、煤状炭化物付着	砂粒、焼成良好	Ⅴ－1

第33図　遺構外出土遺物（9）・土器（9）第Ⅳ群土器（2）、第Ⅴ群土器（1）



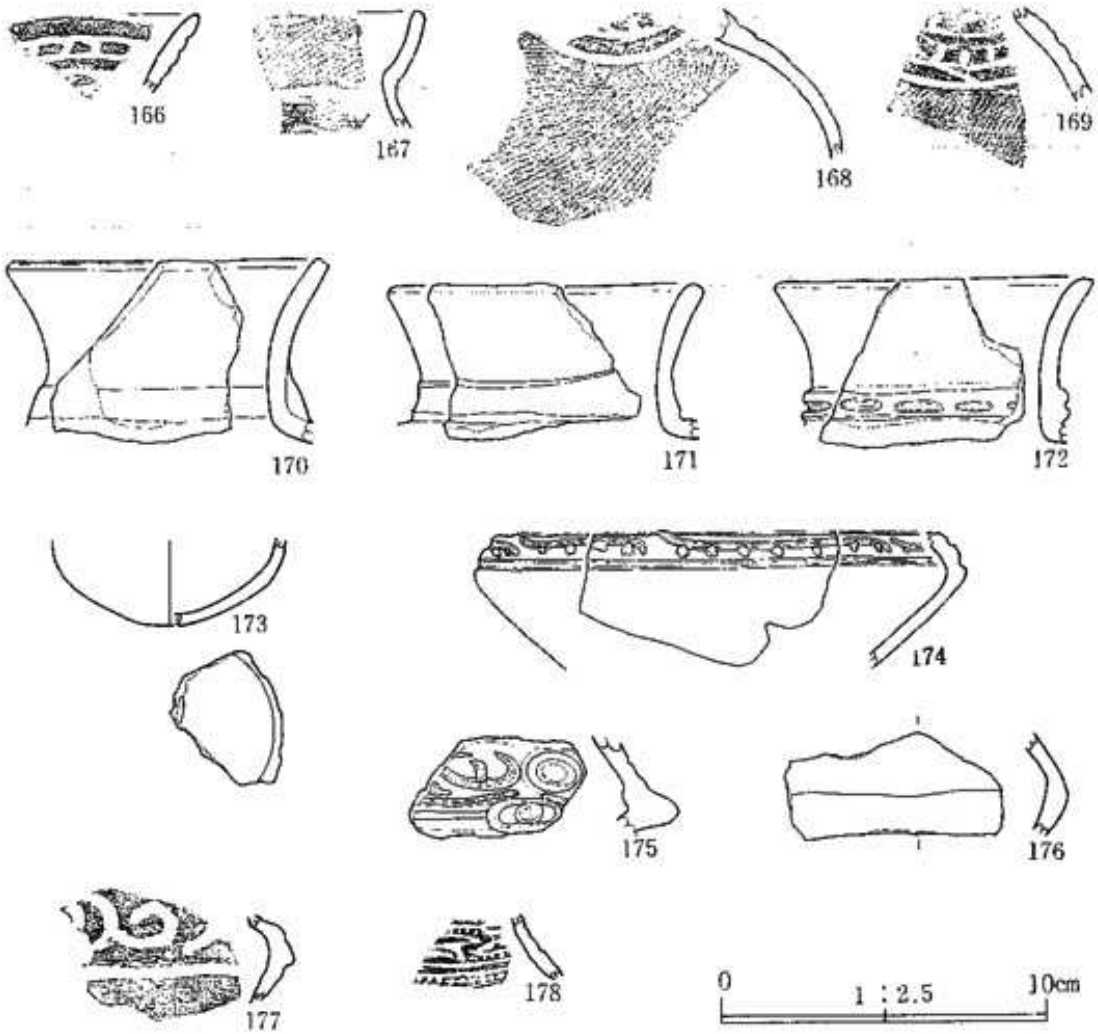
番号	出土位置	文　様	胎土・焼成・備考	分類
133	LQ45	口唇部刻目，(外)縄文LR？→沈線・刻目(羊歯状)，(内)ミガキ，内外面炭化物付着	緻密，焼成良好	V－2
134	LN35	口唇部刻目，(外)沈線・刻目(羊歯状)，(内)ミガキ	焼成良好	V－2
135	LQ44	(外)縄文LR→沈線・刻目(羊歯状)，(内)ミガキ	焼成良好	V－2
136	LQ42	口唇部小突起→刻目(外)沈線・刻目(羊歯状)，(内)ミガキ	砂粒	V－2
137	LQ42	口唇部刻目，(外)縄文LR→沈線・刻目(羊歯状)，(内)ミガキ	緻密	V－2
138	LQ44	(外)縄文RL→沈線・刻目(羊歯状)，(内)ミガキ	砂粒	V－2
139	LQ45	口唇部小突起，(外)縄文LR→沈線・刻目(羊歯状)，(内)ナデ	緻密，焼成良好	V－2
140	LQ46	口唇部小突起，(外)沈線・刻目，(内)ミガキ，煤状炭化物付着	砂粒	V－3
141	LN36	口唇部小突起→刻目，(外)縄文LR→沈線・刻目，(内)ミガキ，煤状炭化物付着	孔隙やや大，焼成良好	V－3
142	LQ45	(外)縄文LR→沈線・刻目→磨消(菱形)，(内)ミガキ	砂粒，焼成良好	V－3
143	LQ35	口唇部刻目，(外)縄文RL→沈線→磨消(菱形)，小突起，刻目，(内)ミガキ，煤付着	孔隙やや大，焼成良好	V－3
144	LQ44	口唇部突起，(外)縄文RL→沈線，(内)隆線→ミガキ，補修孔あり	砂粒	V　3
145	LQ40	口唇部小突起，(外)沈線，(内)ミガキ	砂粒	V－3，4
146	LQ47	口縁部上端小突起，(外)縄文LR→沈線→磨消，(内)沈線→ミガキ	砂粒やや多い	V－3
147	LQ45	口唇部刻目，(外)縄文RL→沈線，(内)ミガキ，煤状炭化物付着	孔隙やや大，焼成良好	V－3
148	LL31	口唇部刻目，(外)縄文RL→沈線，(内)磨滅	砂粒やや多，焼成不良	V　3
149	LQ46	口唇部刻目，(外)縄文L？→沈線(押し引き)・刺突，(内)ミガキ	砂粒やや多，焼成良好	V－3，4
150	LQ45	口唇部小突起，刻目，(外)縄文LR→沈線，(内)沈線→ミガキ，煤状炭化物付着	孔隙やや大	V－3
151	LQ45	口唇部突起，刻目(外)沈線→ミガキ，(内)指ナデ	緻密，焼成良好	V－4

第34図　遺構外出土遺物(10)・土器(10)　第Ⅴ群土器(２)



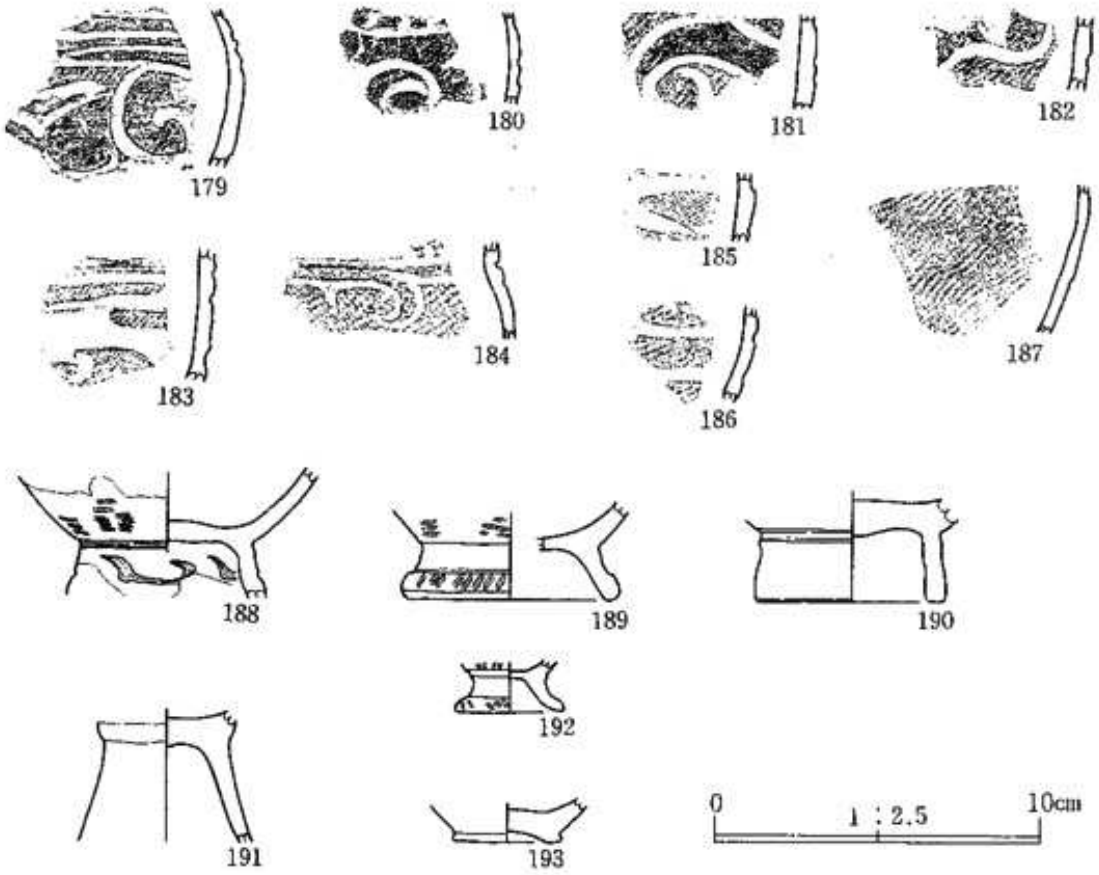
番号	出土位置	文　様	胎土・焼成・備考	分類
152	LL37	口縁部刻目(浮彫)、(外)沈線(雲形)、(内)ミガキ、内外朱塗り	緻密、焼成良好	V－3
153	LQ45	口縁部刻目(浮彫)、(外)縄文LR→沈線→磨消(雲形)、(内)ミガキ、内外朱塗り	緻密	V－3
154	LQ45	口縁部刻目、(外)縄文LR→沈線(雲形)、(内)ミガキ	孔隙やや大	V－3
155	LQ45	口縁部小突起→沈線、(外)縄文LR→沈線(雲形)、(内)ミガキ	砂粒	V－3
156	LQ45	口縁部小突起→刻目、(外)縄文RL→沈線→磨消(雲形)、(内)ミガキ	孔隙やや大、焼成良好	V－3
157	LQ45	口縁部小突起→刻目、(外)縄文RL→沈線→磨消(雲形)、(内)ミガキ	砂粒、焼成良好	V－3
158	LQ44	口縁部沈線、(外)縄文LR→沈線→磨消(雲形)、(内)ミガキ	細砂粒やや多い	V－3
159	LQ46	口縁部刻目(浮彫)、(外)縄文LR→沈線→磨消(雲形)、(内)ミガキ	緻密、焼成良好	V－3
160	LQ45	(内外)横位ミガキ	焼成良好	V
161	LQ44	(外)横位ミガキ、(内)横→縦位ミガキ、内外朱塗り	緻密	V
162	LP49	底部(外)縄文→沈線、(内)粗いナデ	細砂粒やや多い	V
163	LQ44	底部(外)ミガキ、(内)ナデ、内外朱塗り	金雲母を含む細砂粒	V
164	LQ45	(外)縄文LR→沈線→磨消、(内)縦位ミガキ、底部ミガキ	砂粒	V－3
165	LQ45	底部(外)縄文LR→沈線→磨消、(内)横位ミガキ	緻密、焼成良好	V

第35図　遺構外出土遺物(11)・土器(11)　第Ⅴ群土器(3)



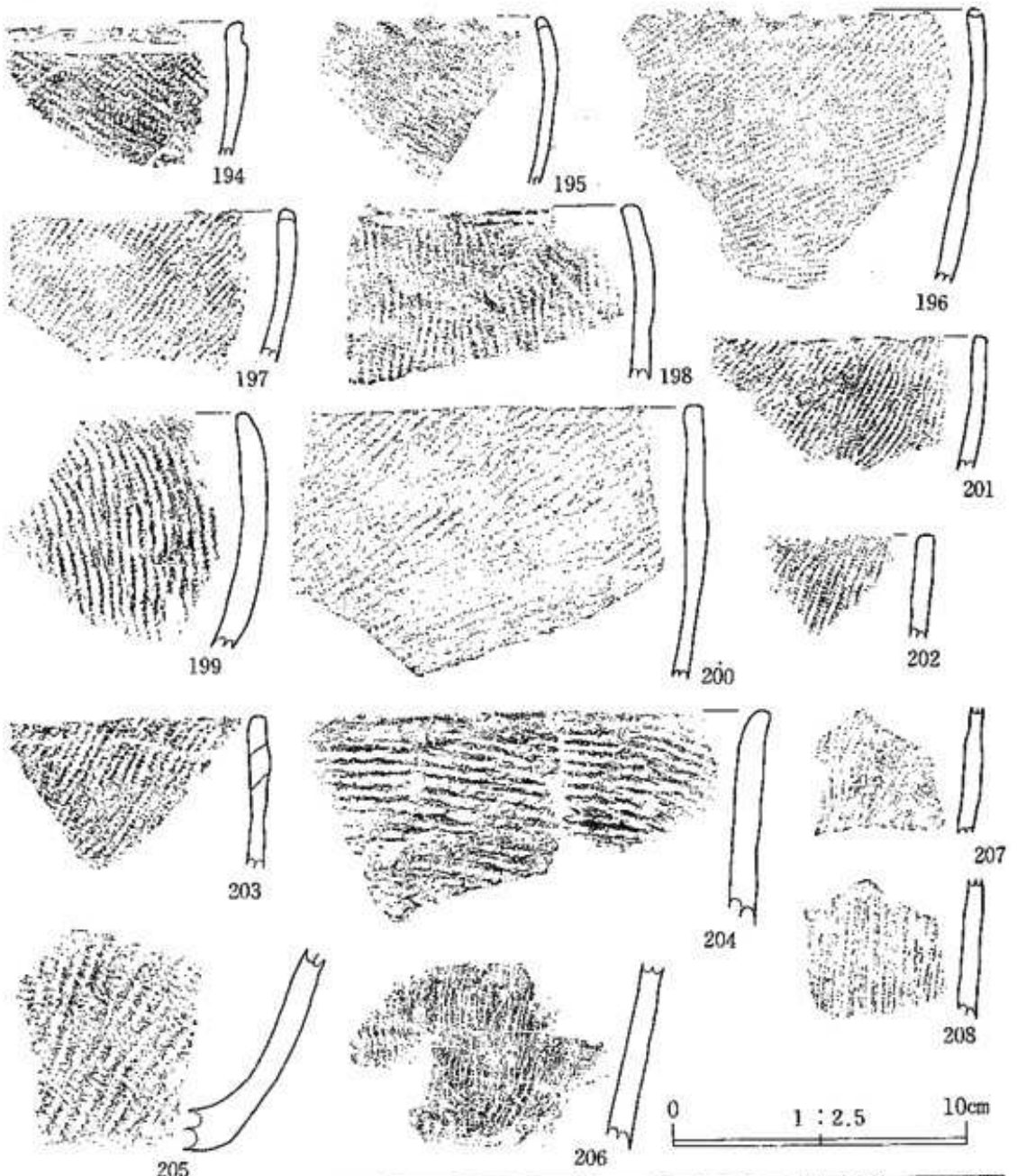
番号	出土位置	文　　様	胎土・焼成・備考	分類
166	LQ44	(外)沈線・刻目(羊歯状)、(内)ナデ、内外朱塗り	砂粒少量	V－2
167	LQ45	(外)縄文LR、(内)横位ミガキ	細砂粒	V
168	LK35	(外)縄文LR→沈線・刻目、刻部沈線、縄状炭化物付着、(内)横位ミガキ	堅緻	V－2,3
169	LQ45	(外)縄文LR→沈線・刻目、(内)横位ミガキ	砂粒やや少ない	V－3
170	LQ45	(外)縦→横位ミガキ、(内)横位ミガキ	砂粒、焼成良好	V
171	LQ45	(外)沈線→縦・横位ミガキ、(内)横位ミガキ	砂粒やや多い	V
172	LQ31	(外)隆帯→刻目→縦・横位ミガキ、(内)ナデ	砂粒多量、焼成やや不良	V
173	LQ45	(内外)ミガキ(やや粗い)、朱塗り	細砂粒やや多い	V
174	LQ45	(外)沈線→刻目(羊歯状)→ミガキ、(内)ナデ	堅緻	V－2
175	LQ45	(外)突起・隆線貼付→沈線、刻目、(内)粗いナデ	細砂粒多量に含む	V－3
176	LQ36	(外)ミガキ、(内)ナデ、摩滅	細砂粒	V
177	LQ41	(外)沈線→ミガキ、(内)ナデ	堅緻、焼成良好	V
178	LQ42	(外)沈線→刻目・刺突、(内)ナデ	堅緻	V－2

第36図　遺構外出土遺物(12)・土器(12)　第V群土器(4)



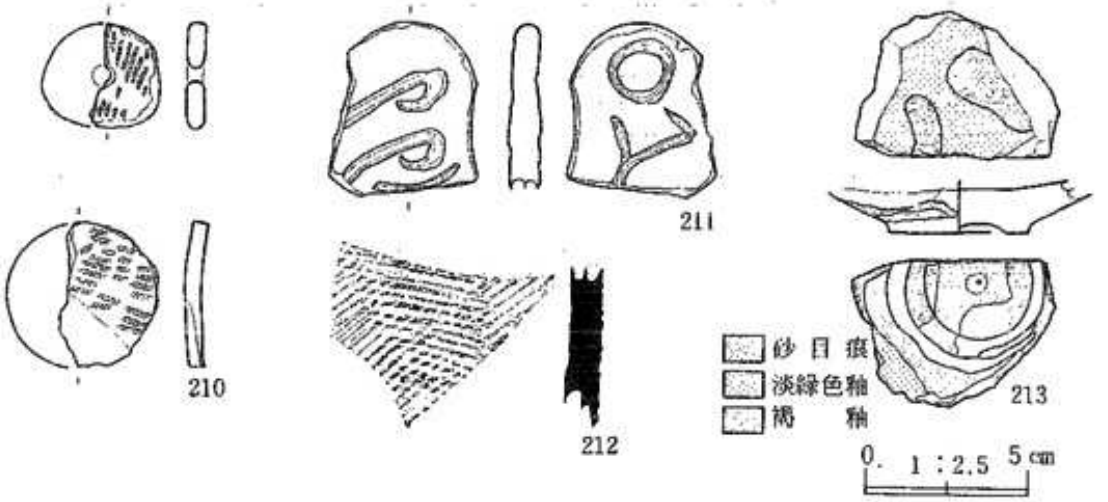
番号	出土位置	文　様	胎土・焼成・備考	分類
179	LN36	(外)縄文LR→沈線、(内)ナデ	砂粒やや多い	V－3
180	LO49	(外)縄文LR→沈線・刻目、(内)ミガキ	細砂粒多量に含む	V－3
181	LQ47	(外)縄文LR→沈線→磨消、(内)ナデ	堅緻	V－3
182	LQ45	(外)縄文LR→沈線→磨消、(内)ナデ	砂粒やや多、焼成良好	V
183	LQ45	(外)縄文LR→沈線→磨消、(内)ミガキ、内外朱塗り	堅緻、砂粒やや多い	V－3
184	LQ41	(外)縄文LR→沈線→刻目、(内)ナデ	孔隙やや大、焼成やや不良	V
185	LQ41	(外)縄文LR→沈線、(内)ミガキ、内外朱塗り	堅緻、焼成良好	V
186	LQ45	(外)縄文LR→沈線、(内)ミガキ、内外朱塗り	砂粒やや多い	V
187	LQ45	(外)縄文LR、(内)縦→横位ミガキ、内外朱塗り	堅緻	V
188	LQ47	胴部(外)縄文RL→沈線、(内)ナデ、内外煤状炭化物付着、脚部沈線→透彫	砂粒やや多い	V・2,3
189	LQ41	(外)縄文LR、(内)ミガキ、脚内部ナデ、内外煤状炭化物付着	砂粒やや多い	V
190	LQ47	(外)沈線→ミガキ、(内)ナデ	砂粒やや多い	V
191	LQ41	(内外)ナデ	細砂粒多量に含む	V
192	LQ45	(外)縄文RL、ミガキ、(内)ナデ、脚内部ミガキ	砂粒やや多、焼成良好	V
193	LQ47	(内外)ナデ	砂粒多量、焼成やや不良	V

第37図　遺構外出土遺物(13)・土器(13)　第Ⅴ群土器(5)



番号	出土位置	文様	胎土・焼成・備考	分類
194	LQ41	(外)縄文RL→沈線,(内)ナデ	孔隙やや大	V
195	LQ44	口縁部小突起→指頭圧痕,(外)縄文LR,煤状炭化物付着,(内)ナデ	細砂粒	V
196	LQ45	L1字部小突起→指頭圧痕,(外)縄文LR,(内)ナデ	砂粒やや多,焼成良好	V
197	LQ42	口縁部小突起,(外)縄文LR,(内)横位ミガキ	砂粒やや少,焼成良好	V
198	LN36	(外)縄文LR,(内)ナデ	細砂粒多量,焼成良好	V
199	LQ45	(外)縄文LR,(内)ナデ,補修孔あり	砂粒やや少ない	V
200	LQ45	(外)縄文RL,(内)ナデ	石英を含む砂粒多量	V
201	LQ45	(外)縄文LR,(内)ナデ,推定口径32cm	砂粒多量	V
202	LM39	(外)縄文LR,(内)ミガキ	孔隙やや大	V
203	LP37	(外)縄文LR,(内)ナデ	砂粒多量,焼成良好	V
204	LQ45	(外)縄文L,(内)ミガキ	砂粒やや多,焼成良好	V
205	LQ41	(外)縄文LR,(内)ナデ,底部ナデ	細砂粒やや多い	V
206	LP49	(外)撚糸R,(内)横位ミガキ,内外煤状炭化物付着	細砂粒やや多,焼成良好	V
207	LQ58	(外)条痕,(内)ナデ,煤状炭化物付着	孔隙やや大	V
208	LQ41	(外)条痕,(内)ナデ	焼成良好	V

第38図　遺構外出土遺物(14)・土器(14)　第Ⅴ群土器(6)



第39図　遺構外出土遺物(15)・土器(15)　第Ⅵ群土器、土製品

3　石器・石製品（第43～53図、図版28、29）

第2次調査で得られた石器・石製品は、1,100点余りである。この中で遺構内出土の遺物は、ＳＫ43出土の石鏃(第17図11)1点とＳＫ54出土のフレーク2点にすぎない。

遺構外出土はＬＱ45で総数の1／5を占めるなど、土器の出土状況と同じようにＤ区域で突出した頻度を示している。次いでＧ・Ｈ区域が続き、Ｈ区域では土器類より遙かに多くの石器類が検出されている。

確認できた器種は、(1)剥片石器・石斧類として、石鏃、石槍、石錐、トランシェ様石器、篦状石器、石匙、掻器、削器、打製石斧、磨製石斧、(2)礫石器類として、半円状扁平打製石器、搬石、石錘、砥石、凹石、磨石、礫器、石皿、台石、(3)石製品として、石棒、線刻をもつ石製品、円盤状石製品を列記できる。これらの遺物の大部分は縄文時代に属すると考えられるが、一部において形態から平安時代かそれ以降の時代に帰する可能性をもつものが混在している。

(1) 剥片石器・石斧類（第40～46、52図、図版28)

定形的と見られる剥片石器については、その全てを図示している。石質はいずれも頁岩である。石斧は、緑色凝灰岩を素材としている。

石鏃、石槍（214、215）

石鏃は遺構内出土を含めて2点のみである。214は器長、形態から、縄文時代早期を下限とする尖頭器の部類に入る可能性がある。ただし出土位置、ＬＮ38(Ｇ区域)では早期の土器は確認できていない。調整剥離は比較的粗雑である。

石槍の形態を示すものは1点であるが、削器とした48の尖頭部をもって本器種に帰属できるのかもしれない。215は、基部あるいは先端部を欠いている。

石錐(216～219)

E～F区域(36～41ライン)で4点確認している。小型で両面全体に調整剥離の及んでいるもの(216)、比較的大型で粗い調整剥離がなされているもの(217～219)に分けられる。錐先端部断面は、菱形、三角形を呈している。後者は縦長の剥片を用いている。

トランシェ様石器(220、221)

LP41から2点出土している。平面形は撥形あるいは二等辺三角形を呈し、刃部はいわゆる直刃形態を示している。石器の製作技法上刃部が最も古い面をなし、両刃となっている。2点とも自然面を残した横形剥片を用いている。

トランシェ様石器は、ここで第1群土器とした縄文時代早期に多く伴うものとされる。しかしながら、石器の検出位置(E区域南側)は、後期の土器が僅かのみ出土しているところであり、この点から言えば、明確に早期に伴う石器であると判断できない。

箆状石器(222～240)

剥片石器の中では最も多く、19点確認されている。出土位置は、D・H区域で各5点、F区域で4点、G区域で2点、C区域で1点である。

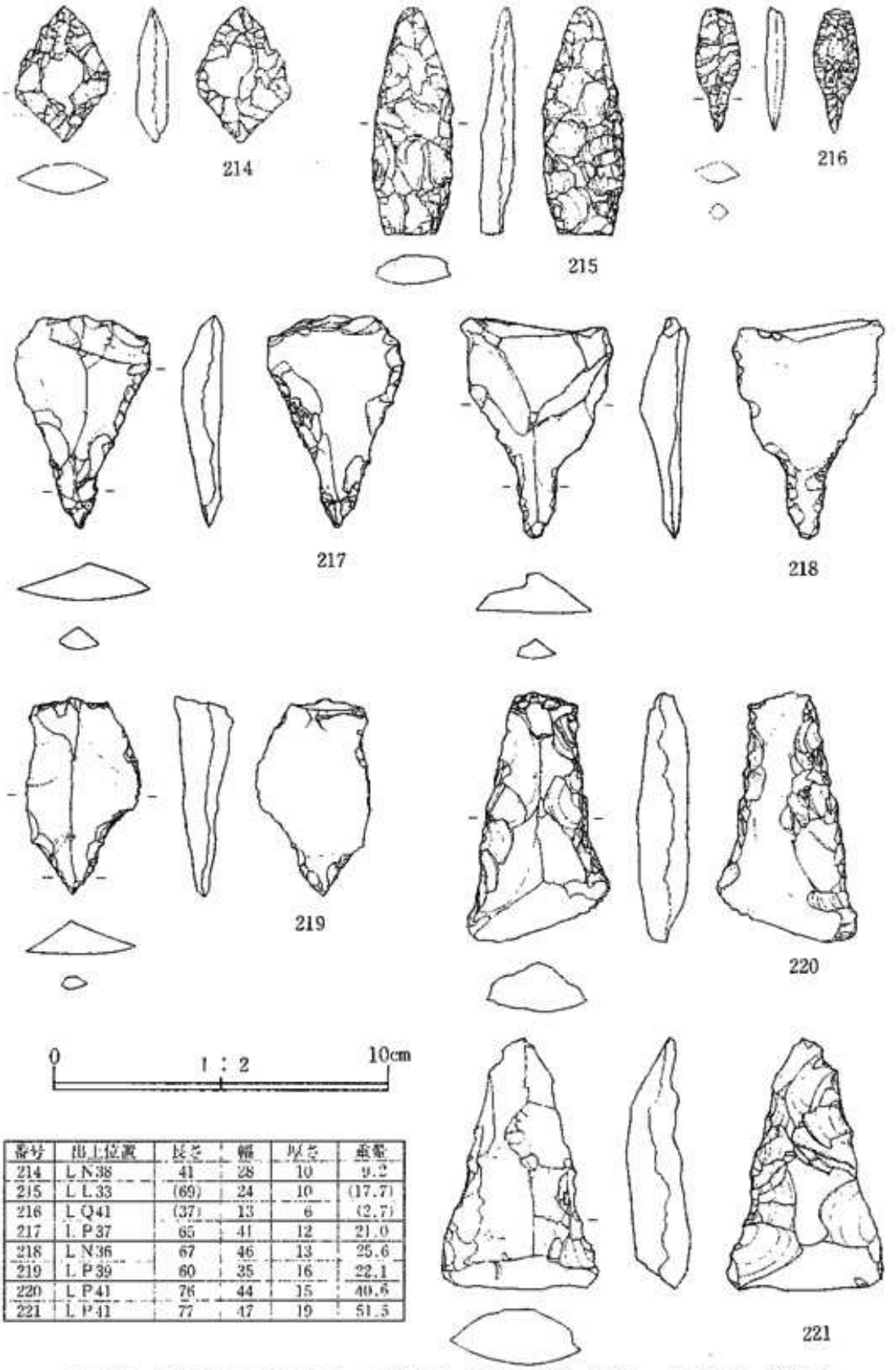
平面・刃部形態にはバラェテーがあるが、刃部側面観からすると、230、232以外は片刃となっている。刃部の平面形状は、直刃か弱い丸刃となる例が多い。229～231は、刃部が幾分抉られている。237～239は、刃部の欠損した資料としてここに載せてあるが、石槍の可能性もある。

石匙(241～253)

未製品と考えられるものを含めて計13点出土している。出土位置は、G・F区域にやや集中する傾向にある。形態上いわゆる縦型(241～249)と横型(250～253)に大別できる。縦型には2側縁が直線的で細身のもの(241~243)と、これよりやや幅広で側縁が曲線を描くもの(244、248、249など)もある。横型つまみ部の対辺(縁)は緩い弧を描く。つまみ部を除き、刃部の調整剥離は基本的に片面のみである。いずれも縦長の剥片を用いている。242、252、253のつまみ部にはアスファルトの付着が認められ、242のあり方はアスファルトを染み込ませた紐をかけていたものを想定できる。

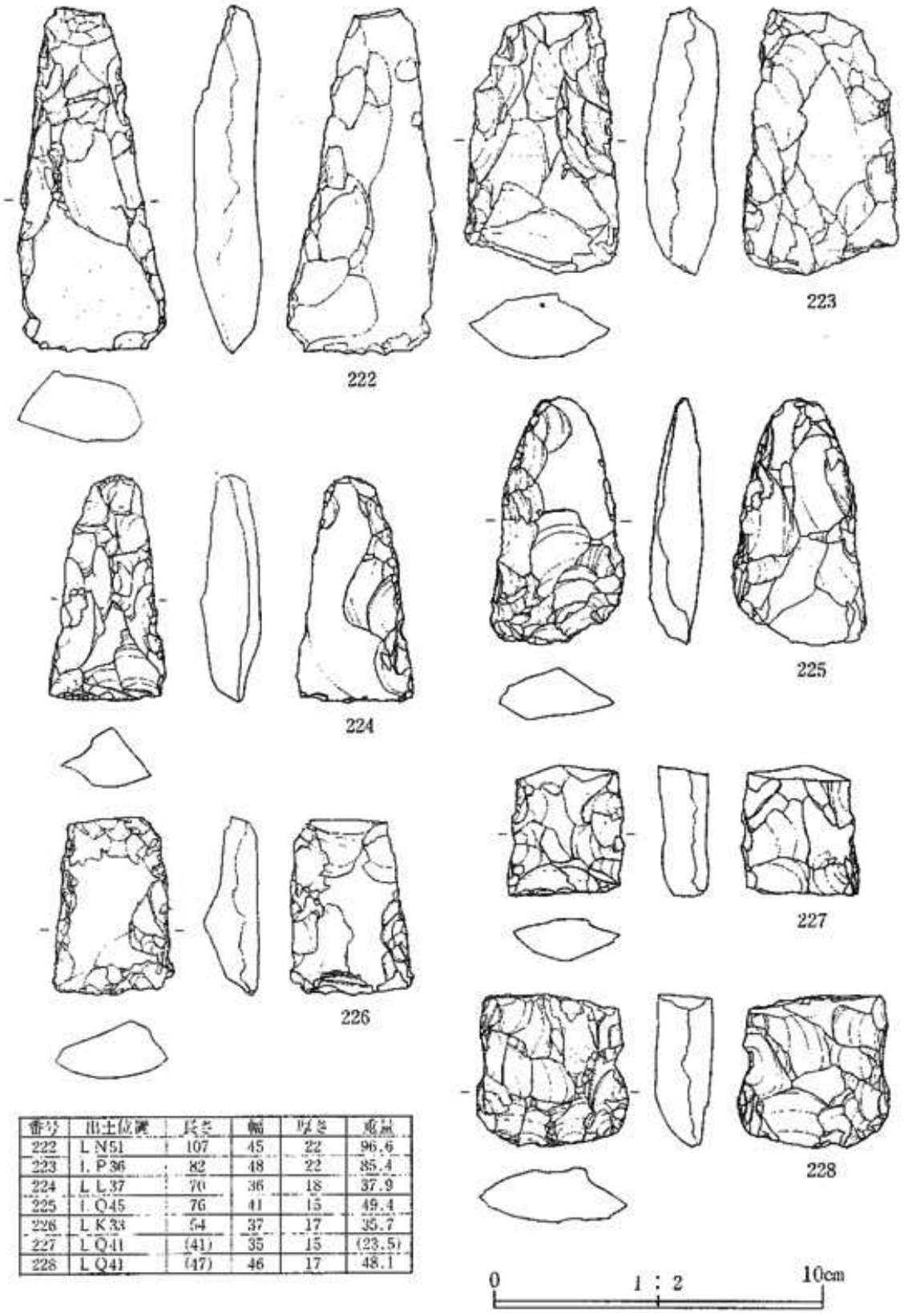
掻器・削器(254～261)

いろいろな形態の剥片に片面調整による急角度の刃部を作出した石器を一括してある。刃部を側面から見ると、ほとんど手の加えられていない面(主要剥離面)が幾らか反っている箇所を利用している場合が多いようである。258は、両側縁には表面から、先端部には裏面からそれぞれ2次調整が施されている。260は、横形剥片を用いた横形削器と呼ばれるものであろう。



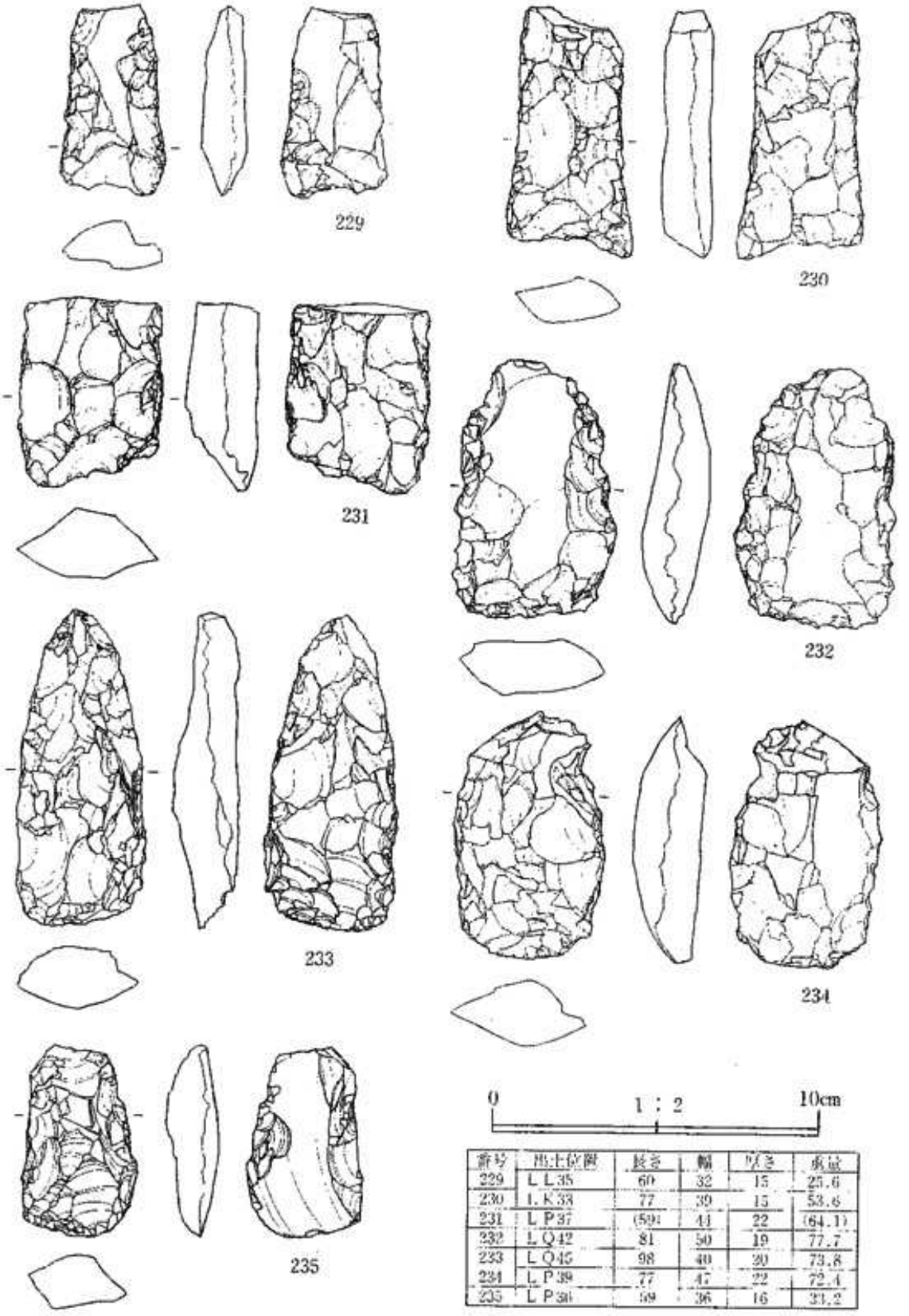
番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量
214	L N38	41	28	10	9.2
215	L L33	(69)	24	10	(17.7)
216	L Q41	(37)	13	6	(2.7)
217	L P37	65	41	12	21.0
218	L N36	67	46	13	25.6
219	L P39	60	35	16	22.1
220	L P41	76	44	15	40.6
221	L P41	77	47	19	51.5

第40図　遺構外出土遺物(16)・石器(1) 石鏃、石槍、石錐、トランシェ様石器



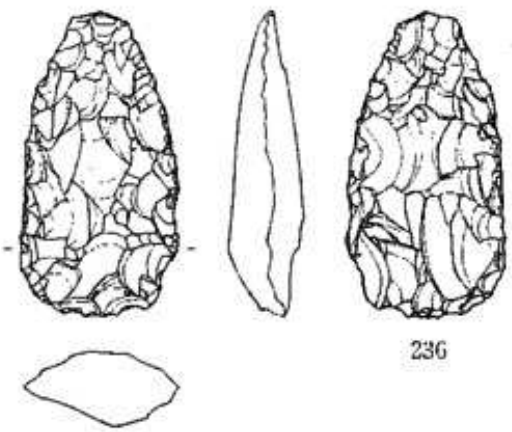
番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量
222	L N51	107	45	22	96.6
223	I. P36	82	48	22	85.4
224	L L37	70	36	18	37.9
225	I. Q45	76	41	15	49.4
226	L K33	54	37	17	35.7
227	L Q41	(41)	35	15	(23.5)
228	L Q41	(47)	46	17	48.1

第41図　遺構外出土遺物(17)・石器(２)　箆状石器(１)

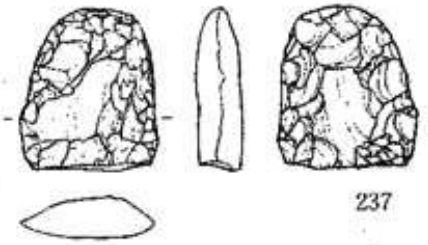


番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量
229	L L35	60	32	15	25.6
230	L K38	77	39	15	53.6
231	L P37	(59)	44	22	(64.1)
232	L Q42	81	50	19	77.7
233	L Q45	98	40	20	73.8
234	L P39	77	47	22	72.4
235	L P36	59	36	16	31.2

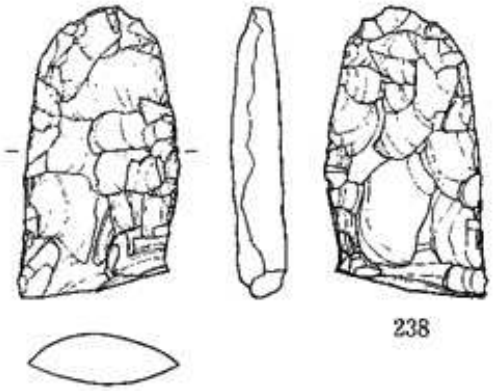
第42図　遺構所出土遺物(18)・石器(3)　篦状石器(2)



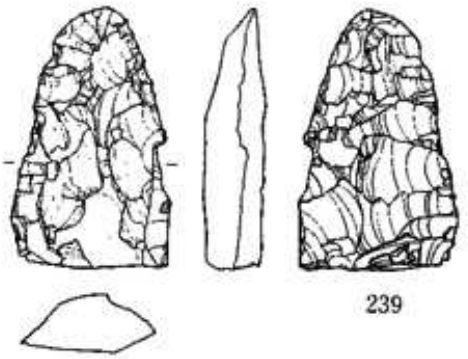
236



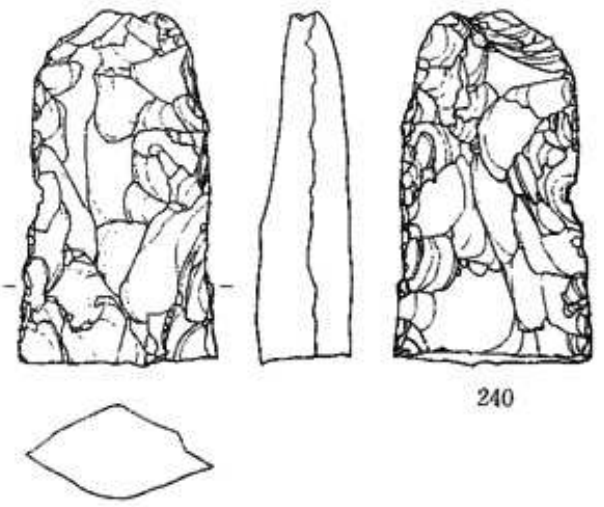
237



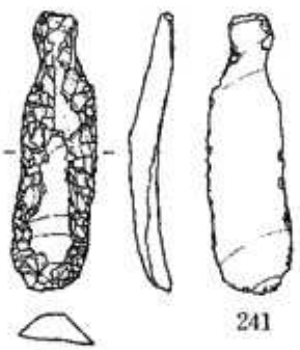
238



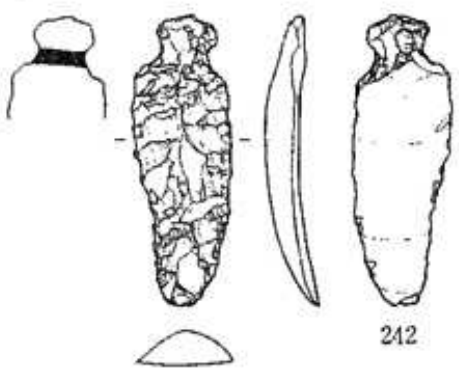
239



240



241

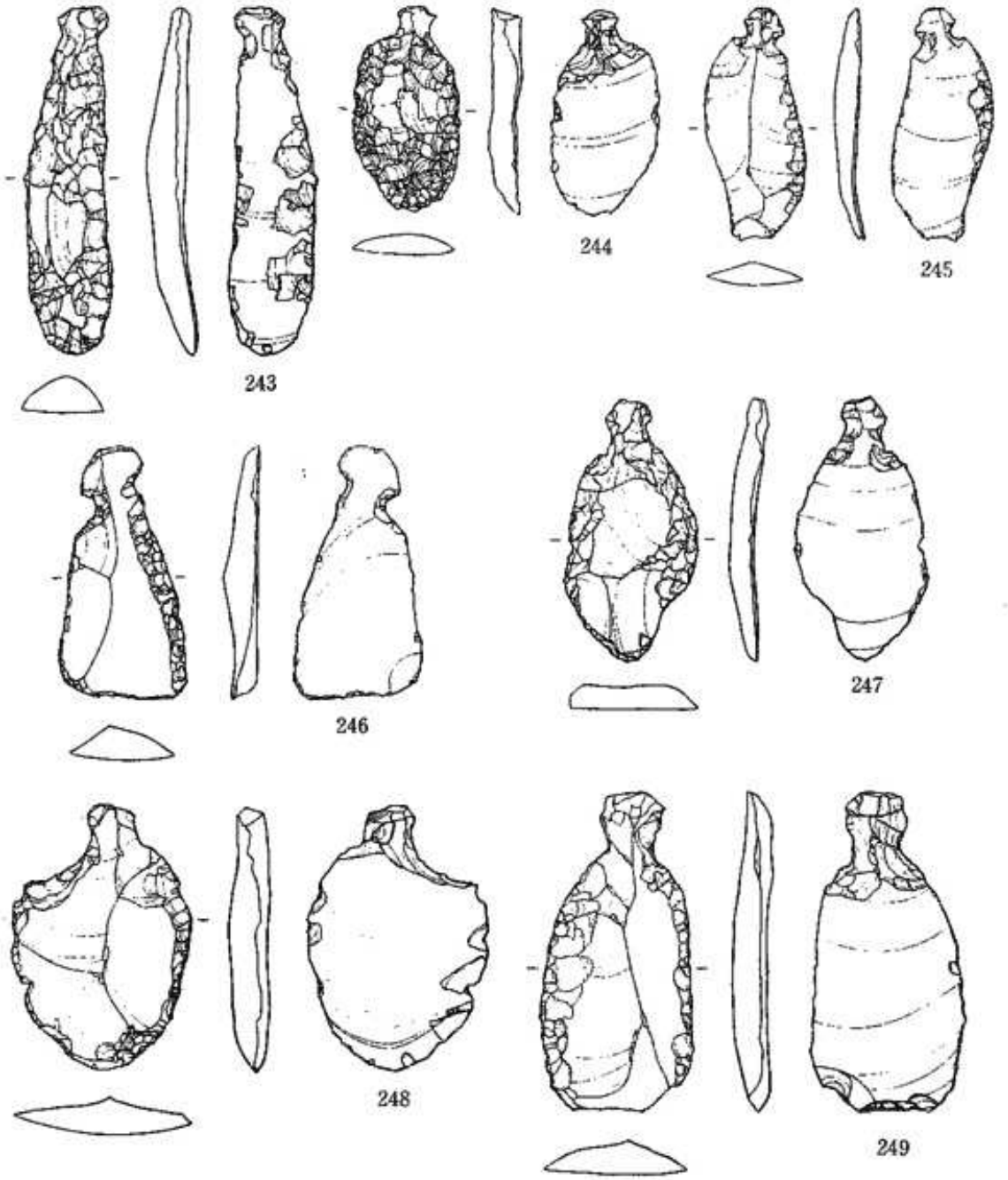


242

0　1：2　10cm

番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量
236	不明	76	39	18	51.0
237	L L32	(40)	34	11	(19.4)
238	不明	(72)	38	12	(43.3)
239	L N35	(65)	39	15	(39.7)
240	L K36	(88)	49	23	(101.1)
241	L N35	69	19	7	10.4
242	L M36	72	24	8	14.5

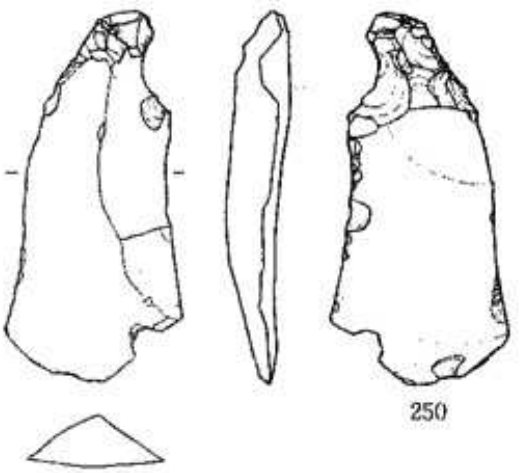
第43図　遺構外出土遺物(19)・石器(4)　箆状石器(3)、石匙(1)



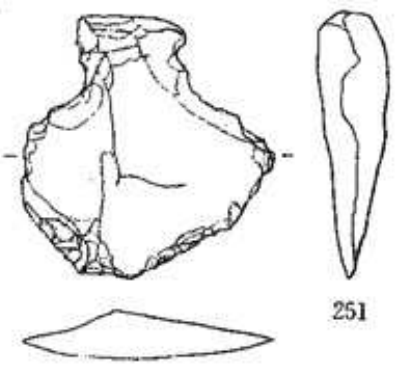
番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量
243	L P39	97	23	11	27.5
244	L N51	58	30	9	14.5
245	L L32	65	28	7	10.2
246	L P37	71	36	9	16.8
247	L N36	74	36	7	19.2
248	L Q42	74	50	10	39.5
249	L O37	90	42	11	44.3

0　1：2　10cm

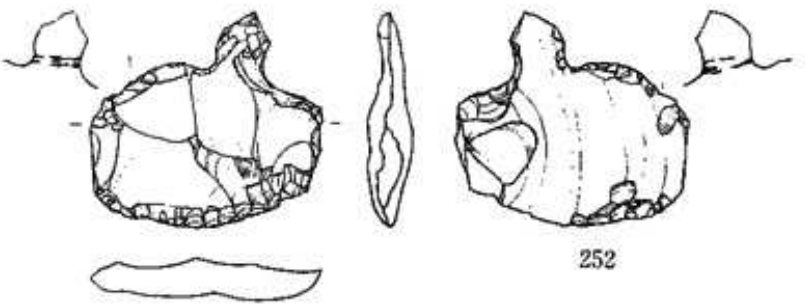
第44図　遺構外出土遺物(20)・石器(5)　石匙(2)



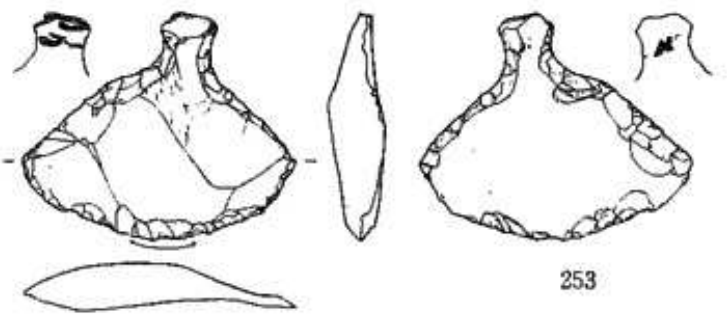
250



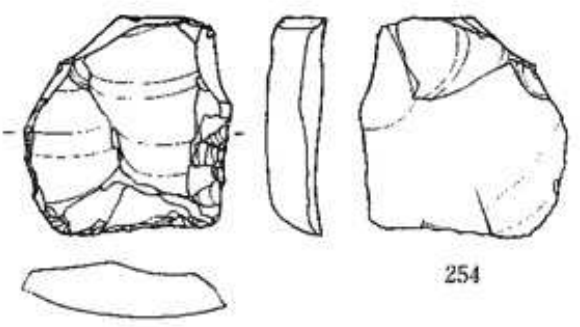
251



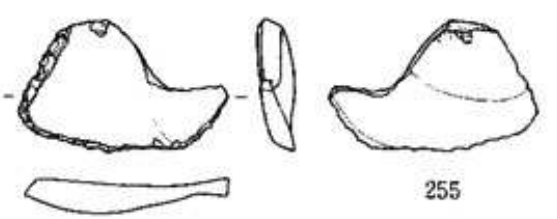
252



253

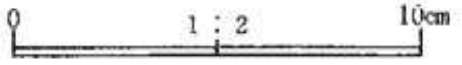


254

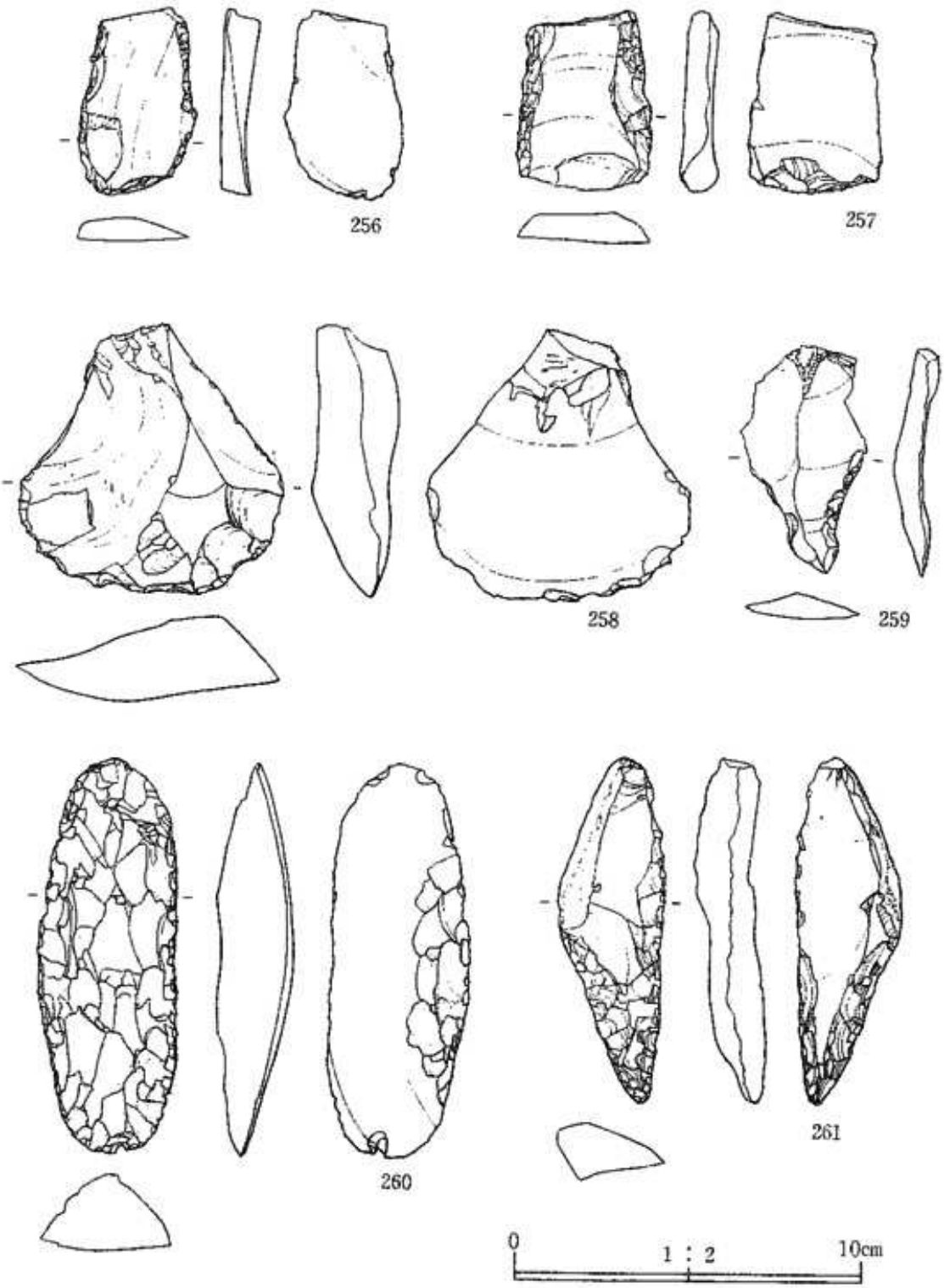


255

番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量
250	L Q45	92	43	13	48.2
251	L K36	66	62	17	46.9
252	L Q36	53	57	11	26.8
253	L Q42	56	67	14	33.0
254	L O38	53	51	13	49.7
255	L M36	33	50	9	13.0



第45図　遺構外出土遺物(21)・石器(6) 石匙(3)、掻器・削器(1)



番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量
256	L K34	55	33	10	17.3	259	L L33	66	37	8	14.6
257	L Q43	79	77	25	115.5	260	不明	115	40	22	94.2
258	L M42	53	38	9	25.4	261	L O37	102	31	17	44.6

第46図　遺構外出土遺物(22)・石器(7)　掻器・削器(2)

打製石斧・磨製石斧(296～298)

296は、L S46出土の打製石斧と考えられる石器である。粗い剥離と敲打によって両刃様に仕上げている。目の粗い緑色凝灰岩を素材とし、一部に自然面が残る。

297はD区域(L R47)出土の磨製石斧である。主・側面とも研磨がいき届いているが、横断面が長方形を呈する基部には手を加えていない。使用痕とみられる擦痕は、概ね刃縁に直交方向に認められる。298はミニチュアの製品で、基部欠損し、刃縁にもわずかな刃こぼれが認められる。L Q41から出土している。

(2)礫石器類(第47～51図、図版29)

半円状扁平打製石器類(第47図、第48図268)

本類には、いわゆる半円状扁平打製石器、石鋸、擦石(特殊磨石、三角柱状磨石、敲磨器などとも呼ばれている)と称されている一群を収めている。これらの共通項は、細長く扁平もしくは断面逆三角形の礫を素材とし、下辺部に機能面を有していることである。

262～267は、下辺部を両面から粗く打ち欠いて刃部を作出し、刃部底縁を擦っている。265、266はこの機能面が上辺部にも存在している。267は、刃部側縁に擦り切りによると考えられる使用痕をもつことから石鋸とも呼ばれている石器である。267ほど顕著ではないが、265下辺、266上下辺にも同様の使用痕が観察できる。263～267の側面には、打ち欠きによる抉りが加えられ、267の一方は把手状を呈している。また264の一面には、敲打による凹みと磨面が認められる。

268は下辺部に打ち欠きを伴わずに擦っているもので、この面(稜)以外には手を加えていない。擦幅は最大で13㎜である。出土位置(L L34)から第Ⅰ群土器2類に伴う遺物かもしれない。

石錘(第48図269～273)

5点の礫石錘は、その法量から小形(269～272)、大形(273)に分けられる。

前者は長軸の両端に打ち欠きあるいは敲打による抉りをもつ。270のみ片面、他は両面から抉りを作出している。4点とも法量が近似する。出土位置は、調査区南側の35～37ラインに集中している。後者は、調査区北側のL Q64出土で、第Ⅲ群土器1類103の近傍に位置している。礫材の両端に両面から階段状の打ち欠きを施している。

砥石(第48図274)

L Q42から1点出土している。欠損しており形状は不明であるが、長方形を呈するものであろう。出土位置は第Ⅴ群土器の集中箇所であるが、形態的には古代の砥石である可能性もある。

凹石、磨石類(第49図、50図291)

本類には、凹石(275～287)、磨石(291)、敲石と呼ばれているものを収めているが、288～290に認められるように、複数の異なる使用痕をもつ製品の存在からここでは一括して扱う。

形態的には、楕円形を呈するものが多い。敲打による凹面は275～280で片面、281～290で両面に認められる。凹面も275、281などのようにUあるいはV字状にくぼみ、敲打作用の集中した結果と考えられる製品と、279、280などのように凹面の輪郭が明瞭でなく、分散的な敲打作用の結果と見られる製品がある。284は二次火熱を受けている。

288～290は凹石と磨石の要素が複合しており、さらに290の周縁部には敲打痕から敲石としての要素も付加されている。このような石器を「多目的礫器」と称している事例もある。

291は多孔質の石材の両面に磨面が認められる。

礫器（第50図292）

図示した中では292を礫器として取り上げる。扁平棒状の石材の片面2側縁に粗い剥離が施されているもので、この部分以外には手を加えていない。

石皿（第51図、巻頭図版3、図版23）

293は、中高石皿と呼ばれる形態を示しており、沢2第5層出土である。平面は楕円形を呈し、長軸方向の一端で周縁が途切れる。この部分は、緩く傾斜した下方にあたることから、いわゆる「掻き出し口」と見られる。中央の突出部には敲打に因ると思われる凹面を有する。溝状の機能面は、断面形が緩いU字となっている。底面と周縁の一部には、石皿としての機能を果たしていた段階か転用であるのかは不明であるが、磨面(図中に矢印で指示)が認められる。

294は、破損しているが有縁で機能面が平坦な石皿である。多孔質の石材を用いている。

295は縁のない石皿あるいは台石の類であろう。機能面は磨面となっている。

（3）石製品（第52、53図、図版29）

上ノ山Ⅱ遺跡で出土している石製品は、円盤状石製品(第53図)、石棒(300)、線刻をもつ石製品(299)が挙げられる。

円盤状石製品は11点確認され、平面が円形、楕円形を示すものが多いが、304のように不整六角形を呈している製品もある。製作方法上から2大別3細分できる。

A：石材の周縁を打ち欠いて整形しているもの。上下面は自然面のままである。

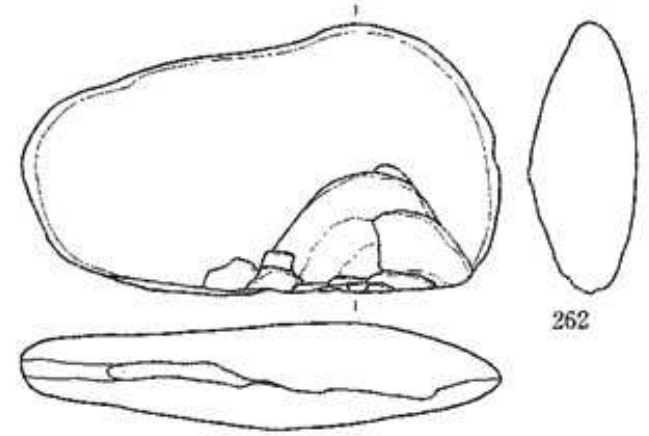
A－a：周縁全てを打ち欠いている例(301～305、307～309、311)

A－b：周縁の一部に自然面が残る例(306)の別がある。

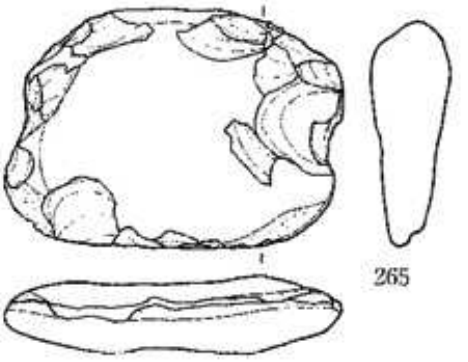
B：周縁を打ち欠きの後、全面研磨の施されているもの（310)。断面が台形を示す。

A－aは、42～48ラインで出土しており、A－bはLO54、BはLK33と各タイプで出土位置が異なる点に着目したい。

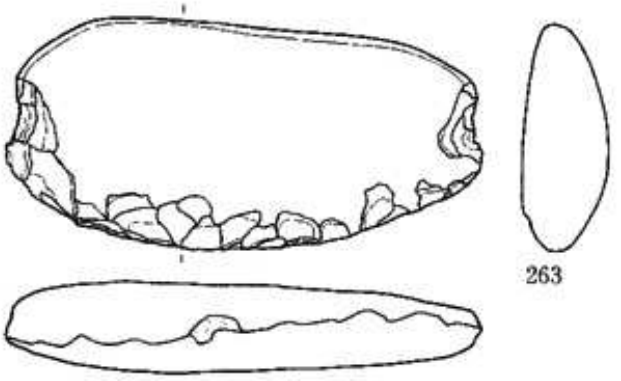
石棒、線刻のある石製品は、欠損しており原形状が不明である。



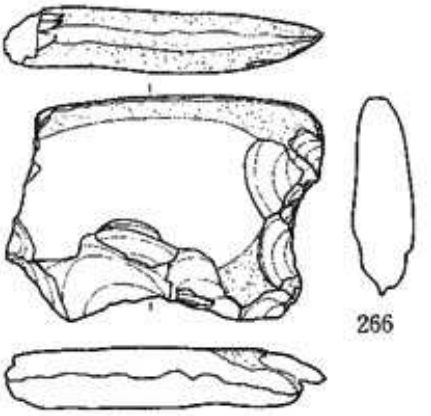
262



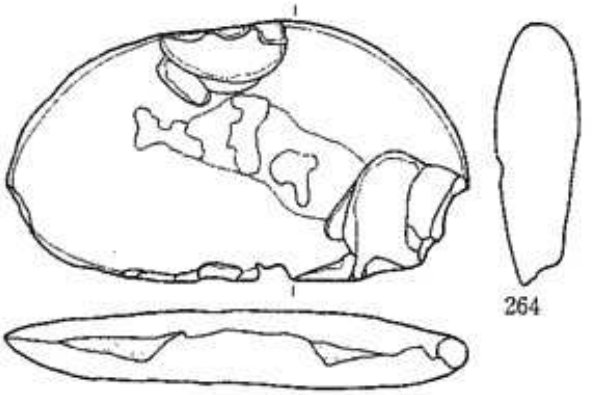
265



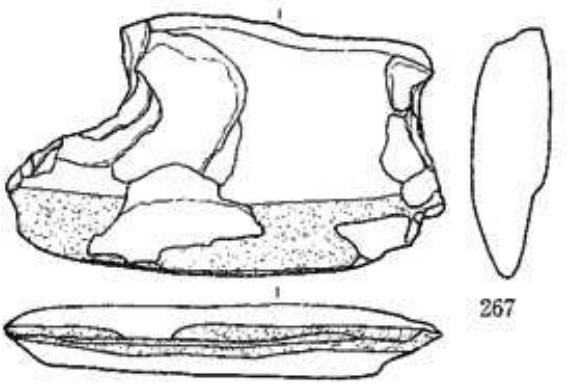
263



266



264



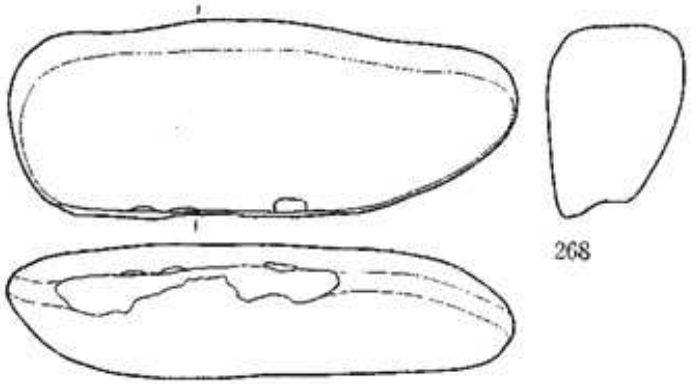
267

擦り　　擦り切り(石鋸)

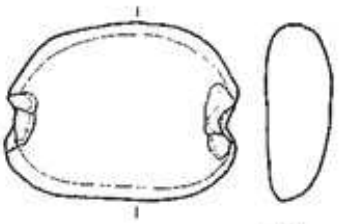
0　1：3　10cm

番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	石質	番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	石質
262	L P 37	176	100	39	786.3	凝灰岩	265	I K 35	120	88	28	418.1	緑色凝灰岩
263	L P 37	175	85	31	690.9	凝灰岩	266	L Q 44	(117)	82	22	(333.2)	緑色凝灰岩
264	L Q 45	170	97	31	463.4	凝灰岩	267	L P 41	161	96	29	529.3	石英安山岩

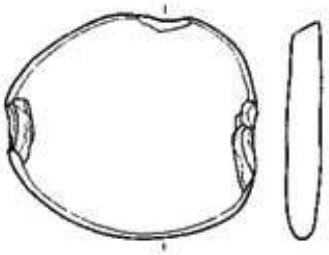
第47図　遺構外出土遺物(23)・石器(８)半円状扁平打製石器



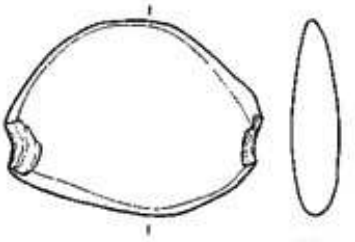
268



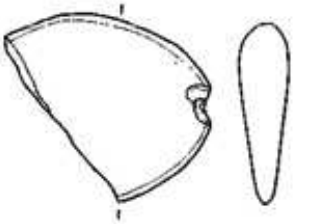
269



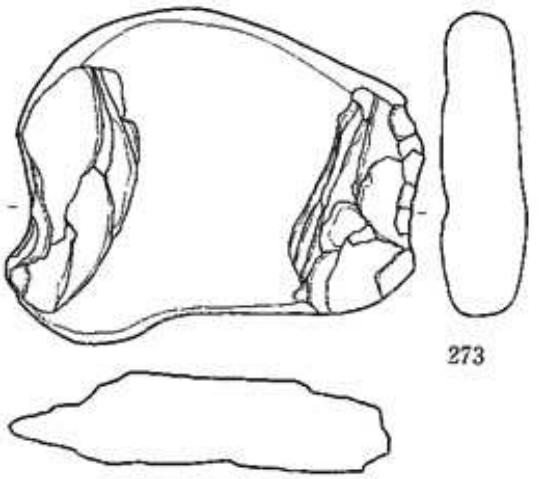
270



271



272



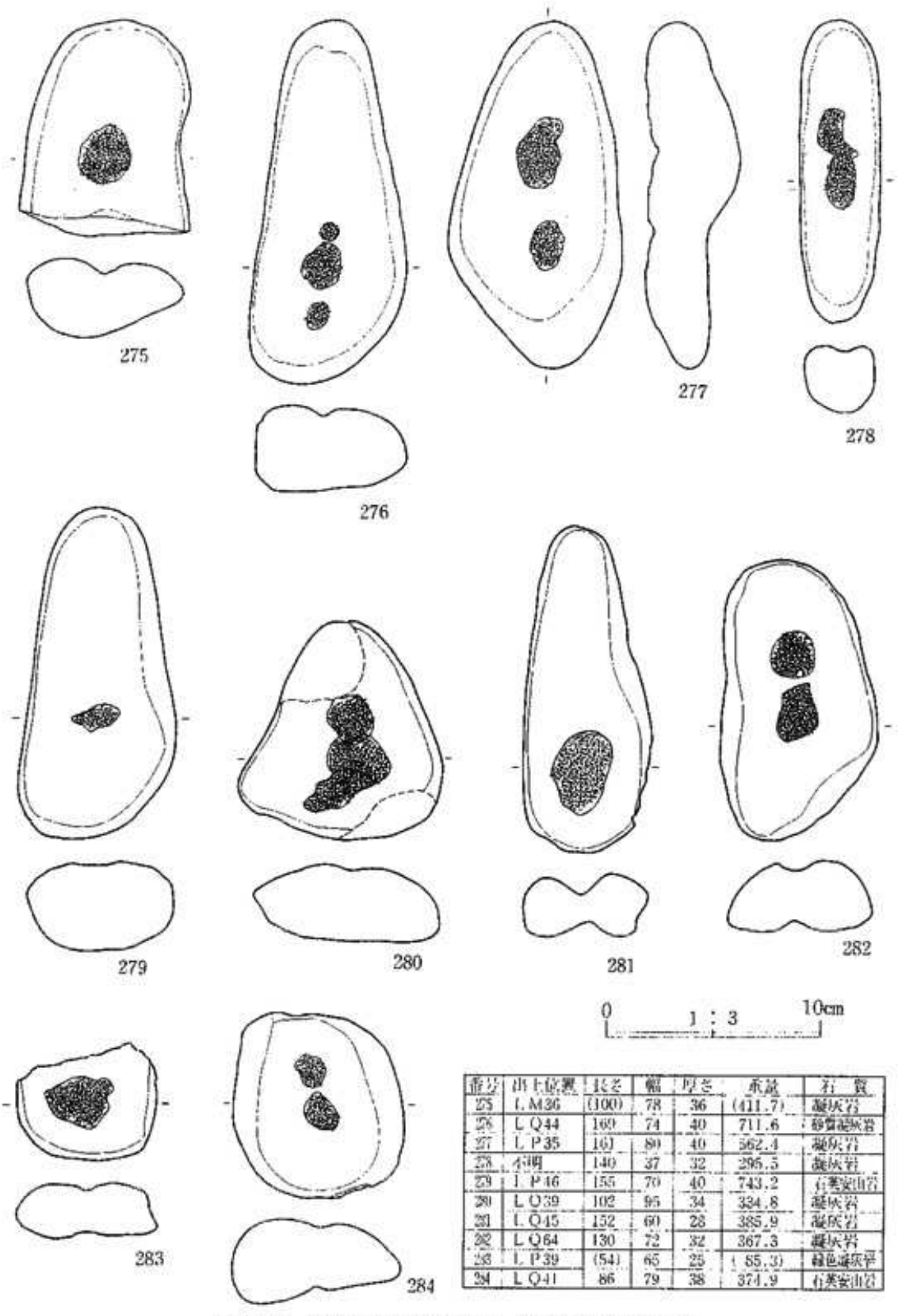
273

274

0　1：3　10cm

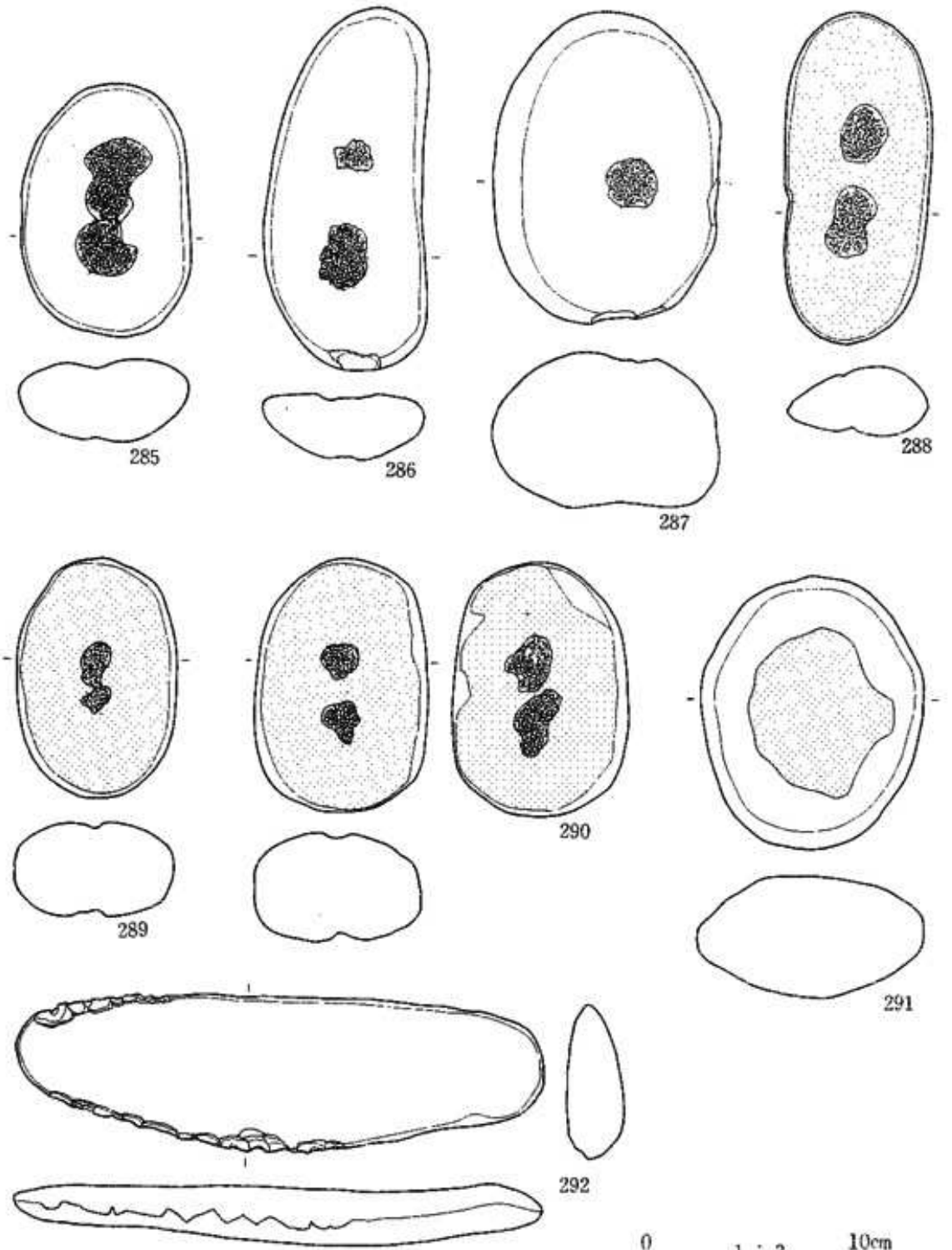
番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	石質	番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	石質
268	L L34	186	73	50	1055.2	緑色凝灰岩	272	L Q37	(76)	(6)	18	(88.2)	凝灰岩
269	L K36	85	64	21	155.6	凝灰岩	273	L Q64	152	124	35	793.8	凝灰岩
270	L M36	92	82	12	151.2	砂質凝灰岩	274	L Q42	(74)	66	17	(139.2)	凝灰岩
271	L P35	95	72	17	152.9	凝灰岩							

第48図　遺構外出土遺物(24)・石器(9)　擦石、石錘、砥石



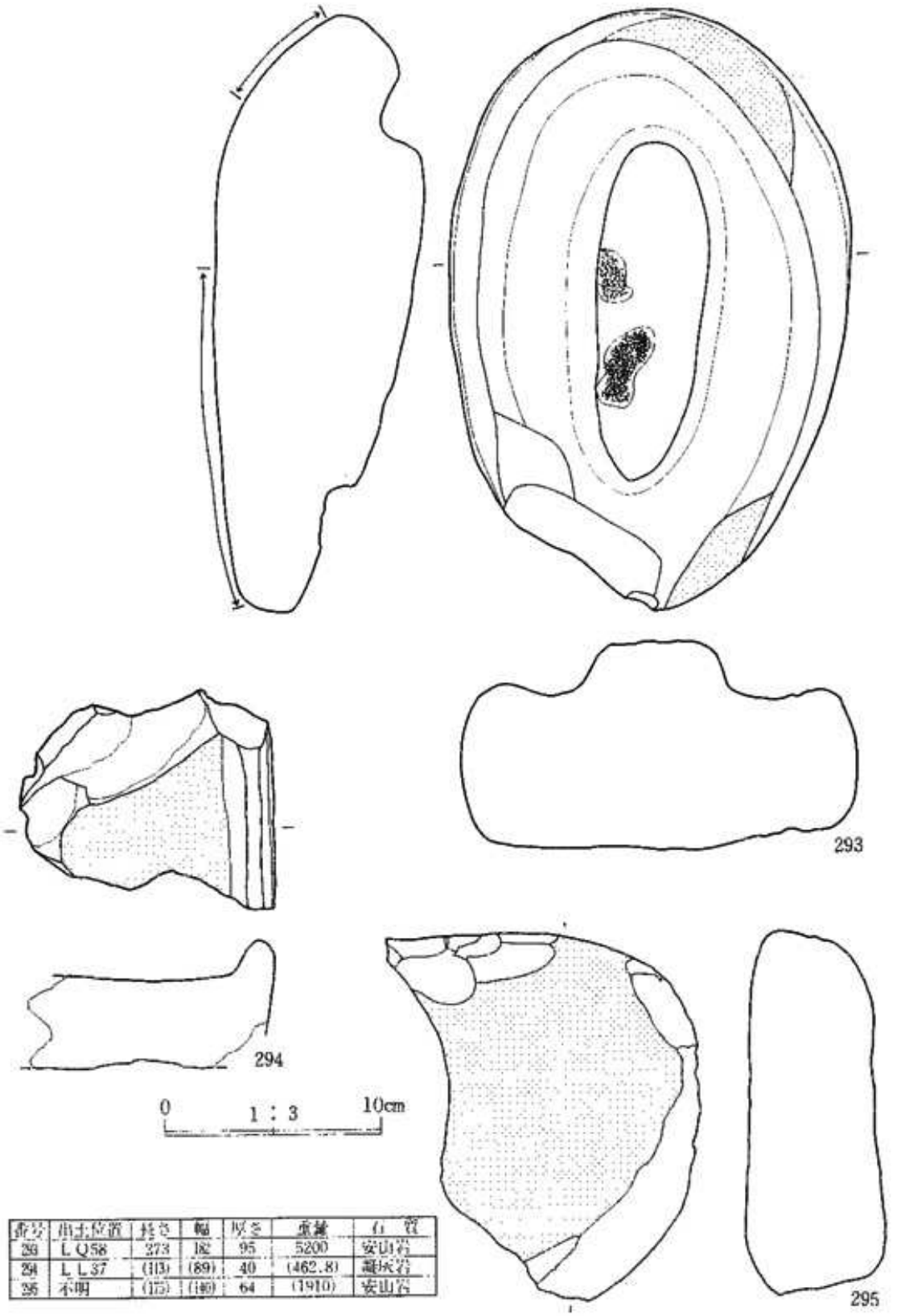
番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	石質
275	L M36	(100)	78	36	(411.7)	凝灰岩
276	L Q44	169	74	40	711.6	珪質凝灰岩
277	L P35	161	80	40	562.4	凝灰岩
278	不明	140	37	32	296.5	凝灰岩
279	L P46	155	70	40	743.2	石英安山岩
280	L Q39	102	95	34	334.8	凝灰岩
281	L Q45	152	60	28	385.9	凝灰岩
282	L Q64	130	72	32	367.3	凝灰岩
283	L P39	(54)	65	25	(85.3)	緑色凝灰岩
284	L Q41	86	79	38	374.9	石英安山岩

第49図　遺構外出土遺物(25)・石器(10) 凹石(1)



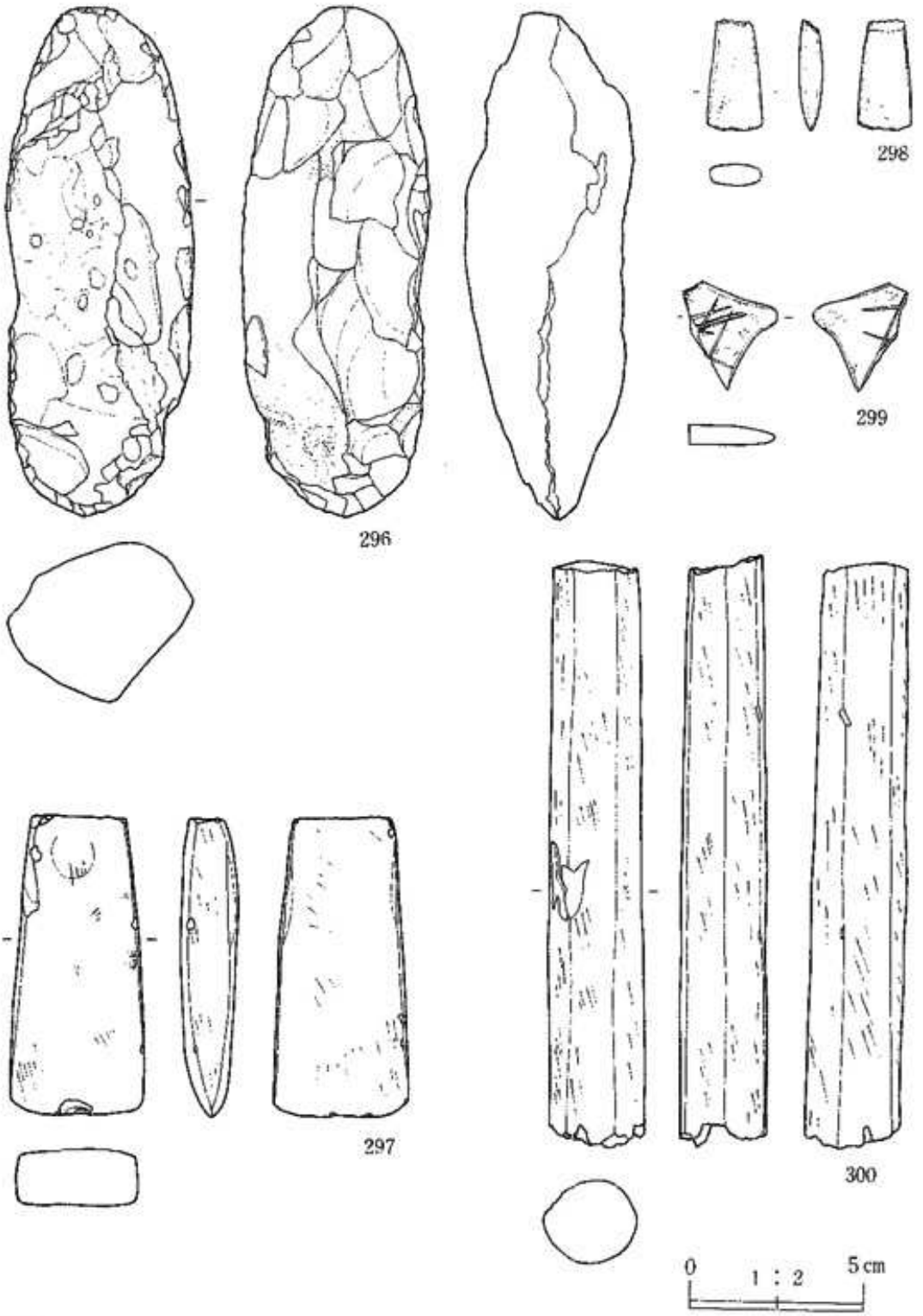
番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	石質	番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	石質
285	L Q46	111	75	36	382.6	石英安山岩	289	L R47	105	70	41	402.3	石英安山岩
286	L M46	160	72	29	543.9	石英安山岩	290	L N56	112	78	48	612.2	石英安山岩
287	L R46	137	99	67	1260.3	砂岩	291	L M36	120	98	54	811.0	石英安山岩
288	L Q45	146	64	29	379.1	凝灰岩	292	L K33	232	69	24	491.4	凝灰岩

第50図　遺構外出土遺物(26)・石器(11) 凹石(2)、磨石、礫器



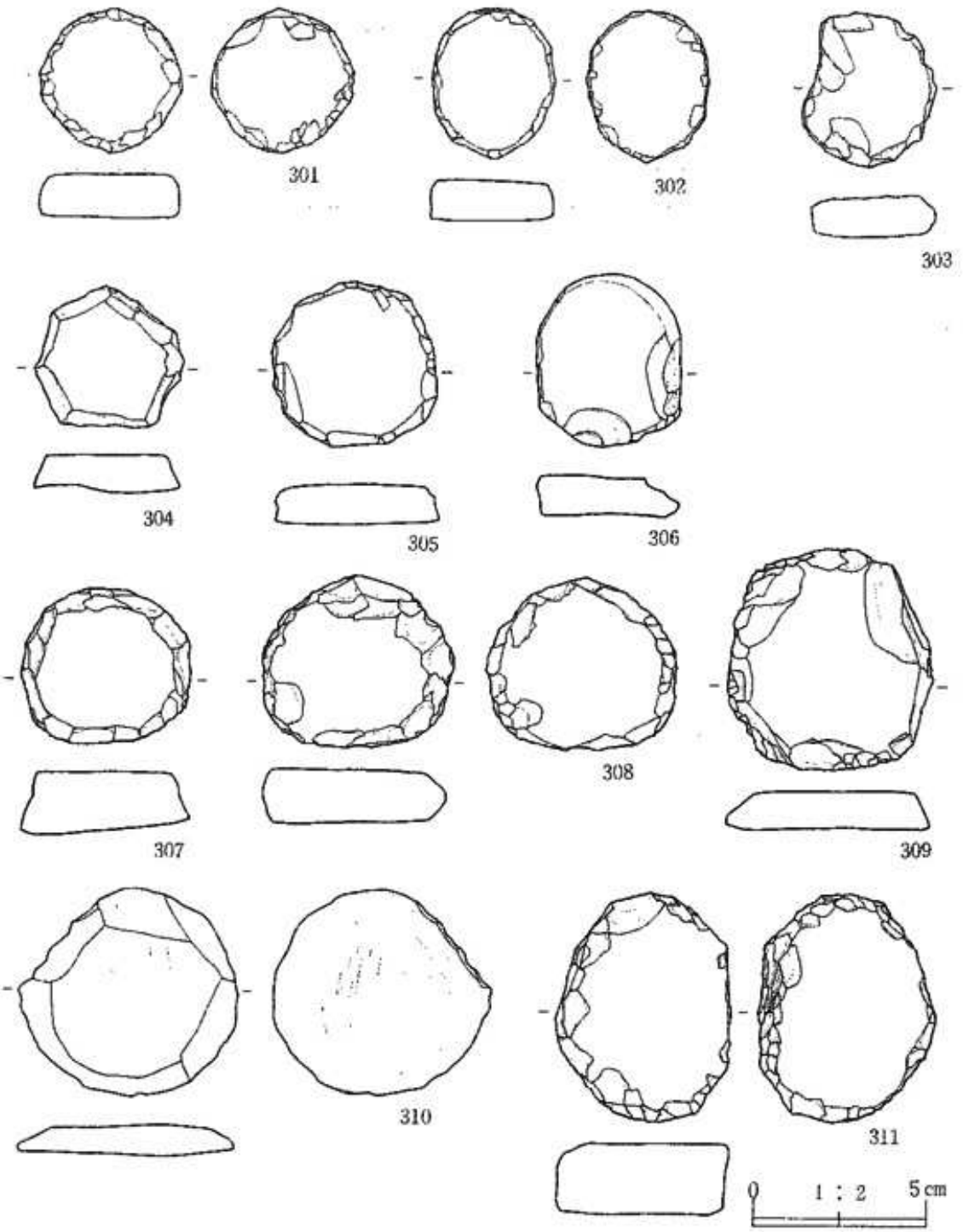
番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	石質
293	L Q58	273	182	95	5200	安山岩
294	L L37	(113)	(89)	40	(462.8)	凝灰岩
295	不明	(175)	(169)	64	(1910)	安山岩

第51図　遺構外出土遺物(27)・石器(12) 石皿



番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	石質	番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	石質
296	I S 46	145	54	45	437.2	緑色凝灰岩	299	I N 47			6	(4.1)	凝灰岩
297	I R 47	86	38	16	100.1	緑色凝灰岩	300	I L 40	(120)	28	24	(206.1)	結板岩
298	I Q 41	(32)	15	7	5.4	緑色凝灰岩							

第52図　遺構外出土遺物(28)・石器(13) 石斧、石製品(1)



番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	石質	番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	石質
301	L R46	42	41	12	39.4	石英安山岩	307	L Q45	49	45	18	66.0	石英安山岩
302	L Q45	43	36	12	35.1	凝灰岩	308	L O43	55	50	16	78.8	石英安山岩
303	L Q44	44	37	11	24.1	凝灰岩	309	L O48	64	59	10	61.2	泥岩
304	L Q42	44	38	11	23.2	凝灰岩	310	L K33	63	60	9	32.8	凝灰岩
305	L R46	46	43	12	46.8	緑色凝灰岩	311	L Q45	67	51	20	118.9	珪質凝灰岩
306	L O54	49	41	12	44.0	石英安山岩							

第53図　遺構外出土遺物(29)・石製品(２)　円盤状石製品

第5章　まとめ

上ノ山Ⅱ遺跡は、『秋田県遺跡地図』と昭和62年の第1次調査結果から、縄文時代後期～晩期の集落遺跡であることが明らかとなっている。今回第2次調査においても、これを裏付ける資料が得られたことになる。しかも竪穴住居跡、土坑の大部分については後期中葉～晩期中葉の時期に営まれたであろうことが確かめられた。さらに遺構は検出できなかったものの、県内で類例の少ない縄文時代早期中葉貝殻文土器の出土も特筆される。

また、時期不明の竪穴遺構などは、近現代の構築である可能性を示すに留どまらざるを得ないが、この地がかつて戊辰戦争(1868年)時に戦場と化し、「砲台」を据えて南部軍に対したという記録がある。これを裏付けるかのように、調査区南端から山館沢を見下ろす間のわずかな沖積地には、この地で孤軍奮闘して果てた秋田藩士青柳外記に係る「青柳外記先生陣没碑」が存在する。これら史実と遺構の係りなども今後の課題としておきたい。

以上を受けて本章では、上ノ山Ⅱ遺跡第2次調査で検出された遺構、遺物のうち、特徴的と考えられる資料を抽出して、その類例などから検証を行いまとめとしたい。

縄文時代早期の土器について

上ノ山Ⅱ遺跡で検出された該期の土器(第Ⅰ群土器＝貝殻文土器)は、県内では雄勝町岩井堂洞窟(第4洞穴第9層土器)[注1]、大館市鷹ケ長根Ⅳ遺跡[注2]（第Ⅰ群土器）で比較的まとまりをもって出土している。

一口に貝殻(沈線)文土器と言っても、早期中葉の幅広い時期に北海道を含む東日本一帯に分布している土器様式の総称であり、大別しても5期の変遷を辿ることができるという[注3]。この中で本群土器の編年的位置づけを隣県の成果も援用してみると、次のようになるであろう。

まず2類は、いわゆる吹切沢系統と物見台系統の間に置かれている蛍沢AⅡ式あるいは後続する住吉町下層A式にあたるのではないかと考えている。具体的には、青森県八戸市鳥木沢遺跡[注4]第Ⅰ群5類土器、岩手県北上市阿弥陀堂遺跡[注5]出土土器などに類例を求めることができる。

本遺跡の西南西約5Kmに占地している鷹ケ長根Ⅳ遺跡第Ⅰ群土器については、該期の土器編年をまとめられた西川博孝氏[注6]によれば、「複数の型式と系統の入り混じった難解な一群」と評価している。同氏の編年に従うとこの第Ⅰ群土器は、千歳式b・c類、鳥木沢式、大寺2類b併行、蛍沢AⅡ式及びこれに併行するものが含まれると言う。この編年観のなかでは、本遺跡の2類は、鳥木沢式に最も近いのではないか。

また矢羽根状沈線を施文している第26図41は、八戸市売場遺跡第Ⅷ群土器[注7](ムシリⅠ式と赤

御堂式の中間型式)に類例を求めることができる資料であろう。

問題は1類土器である。胎土、文様などから消去法に拠って帰属年代を推定していくと、2類土器よりも遡る時期の可能性が高い。現段階ではこれ以上言及できないが、岩井堂洞窟の調査事例を一つだけ引用しておく。

岩井堂第4洞穴第11層は、押型文土器の出土で知られるが、貝殻文2片、縄文2片も検出されている。この上層(第10層)は1m近い無遺物層であり、さらに上層(第9層)に貝殻文を主とする文化層が確認されている。第9層は、本2類を含む時期と想定できるのは前述の通りである。しかしながら同層中には本1類の縄文系の土器は1片もない。押型文も然りである。この限られた情報の中から言い得ることは、上ノ山Ⅱ遺跡第Ⅰ群土器1類は、岩井堂第11層に類例を見いだすことができることから、2類の貝殻文より先行し、早期前葉の押型文の時期に帰属する可能性も考えられる。

トランシェ様石器について

トランシェ様石器については、1957年芹沢長介氏による指摘を経て、1976年冨樫泰時氏が論考を示したことで(註8)周知されるようになった遺物である。1976年当時秋田県内では、本荘市神沢海岸遺跡など7遺跡で10点余りの検出例が知られていた。現在知見の限りでは、大館市鳶ケ長根Ⅳ遺跡の54点、能代市寒川Ⅰ遺跡(註9)の47点をはじめ、鹿角市柏木森(註10)、二ツ井町竜毛沢館跡(註35)、能代市福田(註11)、秋田市南浜遺跡(註12)で検出、採集例が認められる。時期的に、鳶ケ長根Ⅳは、本遺跡第Ⅰ群土器2類と同様、早期中葉、寒川Ⅰや柏木森は、早期末期末葉～前期初頭、南浜では中期末葉と見ているようである。

寒川Ⅰの報告によると、同遺跡トランシェ様石器の器長は、4.2～7.4cm (4.8～6.1cmのものが多い)で平均5.6cmであるという。一方鳶ケ長根Ⅳは、器長4.7～9.7cm (5.4～8.0cm のものが多い) で平均6.7cmの数値を示している。この2例をもって即断はできないとしているが、早期中葉の鳶ケ長根Ⅳと早期末葉の寒川Ⅰの器長数値の比較から、「寒川Ⅰ遺跡には7.5cmを超す長大なものが一点もないのが特徴的である。早期末葉には長大なものが消滅したとも考えられる。」この比較を単純に上ノ山Ⅱに置き換えて見ると、2点の器長 (7.6、7.7cm) は、鳶ケ長根Ⅳの範疇に入る。この点からのみ言えば、本遺跡のトランシェ様石器は、第Ⅰ群2類土器に伴う遺物の可能性が高いのではないか。

中高石皿について

沢1第5層黒褐色土から出土した石皿 (第51図293) は、中央部が島状に突出した特異な形態を示していることから「中高石皿」と呼ばれているものである。県内での類例は、管見に触れただけで5遺跡8例しかない。

小袋倉遺跡（上小阿仁村大林字小袋倉）では、大形石棒、独鈷石2点と共に中高石皿が2点出土しているという。[註13]

上田野遺跡（鳥海町栗沢字上田野）には、秋田県立博物館所蔵資料の中に1点の中高石皿が認められる。『秋田県立博物館所蔵資料目録考古』に拠ると、長さ31cm、幅17.3cm、時期は後期～晩期としている。なお、同書の図版12(上)にはこの石皿の写真が添付されている。[註14]

岳下遺跡(神岡町)では、表採資料ではあるが1点の中高石皿が得られている。[註15]長さ40.4cm、幅18cm、器高11.7cmで、底面に脚がつく。上ノ山Ⅱ例と同様、機能面が長軸方向に緩く傾斜している。時期は晩期と考えられる。

上猪岡遺跡[註16](1点、昭和63年調査、横手市)と藤株遺跡[註17](3点、平成元年範囲確認調査、鷹巣町)では破片が検出されている。時期はいずれも晩期のようである。

中高石皿は、安達厚三氏の石皿型式分類[註18]によるV類にあたり、a．楕円形に近く、下面が丸みのあるもの、b．長方形で凹み部の底や下面が平坦なもの（有脚も存在する）の2細分されている。同氏の時期別消長表によれば、Va類は、後期～晩期いっぱいまで、有脚のVb類は、晩期となっており、分布は東北地方で、Vb類は「東北地方北部に限られるようである」。

用途については、「中央部でたたきつぶし、周囲の磨面で磨ったもの」[註19]と一般的には解されているが、儀礼用祭具としての用途も想定されている。

出入口を持つ竪穴住居跡について

本遺跡の竪穴住居跡のうち、SI15、62の2軒については、壁溝と溝の途切れる間に配されている2個一対の楕円形柱穴の存在から、いわゆる"出入口を持つ竪穴住居跡"と称されている遺構と見ることができる。帰属年代は、SI15壁溝内出土の細片1点のみであるが、後期のようである。類例は、小坂町白長根館Ⅰ遺跡[註20]SI06、07に求めることができる。また形態にやや相異点があるものの、鷹巣町藤株遺跡[註21]SI22も該当する。時期的には、前者が後期前一中葉(十腰内Ⅰ～Ⅱ式)、後者が晩期前葉である。

この時期の出入口をもつ遺跡は、秋田県内ではこの2遺跡のみのようであるが、県外たとえば青森、岩手県では近年類例が増えつつあるようである。出入口部の柱穴の形状が本遺跡例と同様に楕円形を呈する遺構と限定しても、青森県では金木町神明町[註22]、平館村尻高(4)[註23]、六ヶ所村大石平[註24]、八戸市丹後谷地[註25]・田面木平[註26]・丹後平(2)[註27]・風張(1)遺跡[註28]など、岩手県では、滝沢村卯遠坂[註29]、紫波町大明神[註30]、安代町扇畑Ⅱ[註31]、西根町上斗内Ⅲ[註32]、岩手町川口Ⅱ[註33]、軽米町馬場野Ⅱ[註34]遺跡などを数えることができる。これら竪穴住居跡の年代は、縄文時代後期前～中葉を中心とする時期が多いようであるが、八戸市丹後谷地遺跡第42号竪穴住居跡のように中期末葉（大木10新式）に位置づけられる事例も存在する。

註1　秋田県教育委員会、雄勝町教育委員会『岩井堂岩陰遺跡発掘調査報告書』1969(昭和44年)

註2　秋田県教育委員会「鳥ケ長根Ⅳ遺跡」『国道103号線バイパス工事関係発掘調査報告書』1981(昭和56年)

註3　富樫泰時「貝殻沈線文系土器様式」『縄文土器大観』1　小学館1989(平成元年)

註4　八戸市教育委員会「烏木沢遺跡」『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』1986(昭和61年)

註5　北上市教育委員会「阿弥陀堂遺跡」『北上川東岸遺跡詳細分布調査報告書Ⅳ』1987(昭和62年)
稲野彰子「東北地方北部の縄文時代早期貝殻文土器について」『考古学の世界』1989(平成元年)

註6　西川博孝「「物見台と吹切沢」－東北・北海道南部における貝殻紋系統土器末葉の編年－」『先史考古学研究』第2号 1989(平成元年)

註7　青森県教育委員会『売場遺跡発掘調査報告書』1985(昭和60年)

註8　富樫泰時「トランシェ様石器について」『東北考古学の諸問題』1976(昭和51年)

註9　秋田県教育委員会「寒川Ⅰ遺跡」『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』1988(昭和63年)

註10　秋田県教育委員会「柏木森遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅶ』1984(昭和59年)

註11　秋田県教育委員会「福田遺跡」「一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』1989(平成元年)

註12　武藤康弘「秋田市南浜遺跡出土の遺物について」『遺光器』12号 1979(昭和54年)

註13　秋田県教育委員会『秋田県遺跡地名表』1976(昭和51年)

註14　秋田県立博物館『秋田県立博物館所蔵目録考古』1982(昭和57年) p50

註15　小林克氏の教授による。

註16　秋田県埋蔵文化財センターで調査、報告書未刊

註17　鹿巣町教育委員会で調査

註18　安達厚三「石皿」『縄文文化の研究』7　雄山閣　1983(昭和58年) p129～139

註19　鈴木道之助『図録石器の基礎知識Ⅲ』　柏書房　1981(昭和56年) p64

註20　秋田県教育委員会「白長根館Ⅰ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅶ』1984(昭和59年)

註21　秋田県教育委員会『藤株遺跡発掘調査報告書』1981(昭和56年)

註22　青森県教育委員会『神明町遺跡発掘調査報告書』1980(昭和55年)

註23　青森県教育委員会『杭高(2)・(3)・(4)遺跡発掘調査報告書』1985(昭和60年)

註24　青森県教育委員会『大石平遺跡発掘調査報告書』1985(昭和60年)

註25　八戸市教育委員会『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－丹後谷地遺跡－』1986(昭和61年)

註26　八戸市教育委員会『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－田面木平遺跡(1)－』1988(昭和63年)

註27　八戸市教育委員会『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－丹後平遺跡(2)－』1988(昭和63年)

註28　八戸市教育委員会 宇部則保氏の教授による。「後期後葉の住居の中に(出入口を持つ例は)相当

数みられる」そうである。

註29　岩手県教育委員会「卯遠坂遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』1979(昭和54年)

註30　岩手県教育委員会「大明神遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』1980(昭和55年)

註31　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『扇畑Ⅱ遺跡発掘調査報告書Ⅱ』1982(昭57年)

註32　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『上斗内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書』1984(昭和59年)

註33　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『川口Ⅱ遺跡発掘調査報告書』1985(昭和60年)

註34　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『馬場野Ⅱ遺跡発掘調査報告書』1986(昭和61年)

註35　秋田県教育委員会『竜毛沢館跡発掘調査報告書』1990(平成2年)

付記　　学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

1990年2月13日

秋田県埋蔵文化財センター殿

1989年12月20日受領致しました試料についての年代測定の結果を下記の通りご報告致します。

なお年代値の算出には^{14}Cの半減期としてＬＩＢＢＹの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差はβ線の計数値の標準偏差δに基づいて算出した年数で、標準偏差（ONE　SIGMA）に相当する年代です。また、試料のβ線計数率と自然計数率との差が2δ以下の時は、3δに相当する年代を下限の年代値（Ｂ．Ｐ．）として表示してあります。また試料のβ線計数率と現在の標準炭素（MODERN　STANDARD　CARBON）についての計数率との差が2δ以下の時には、MODERNと表し、$\delta^{14}C$‰を付記してあります。

記

Code No.	試料	年代(1950年よりの年数)
ＣａＫ－14465	Charcoal from 大館市 2KNY2.2－SI 29	3340±100 1540　B．C．

以上　木越邦彦

遺跡全景　調査前の状況(西→東)

遺跡近景　調査前の状況(南→北)

図版2

遺跡全景　調査前の状況(南→北)

遺跡近景　調査区南端部の状況(北→南)

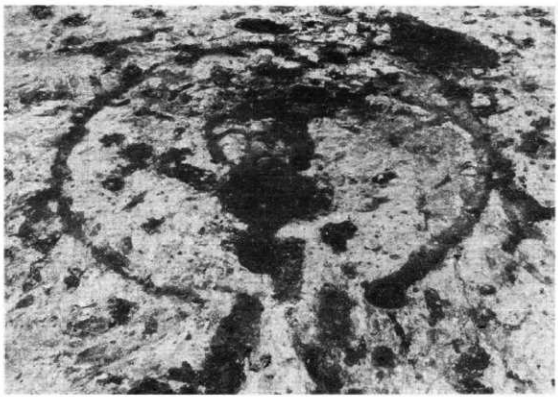
遺跡近景　完掘状況(南→北)

遺跡近景　完掘状況(北→南)

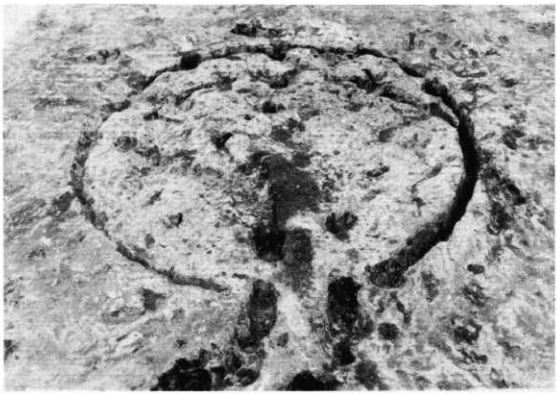
図版4

遺跡近景　完掘状況、調査区南側遺構集中箇所(北→南)

調査風景　沢1(南→北)

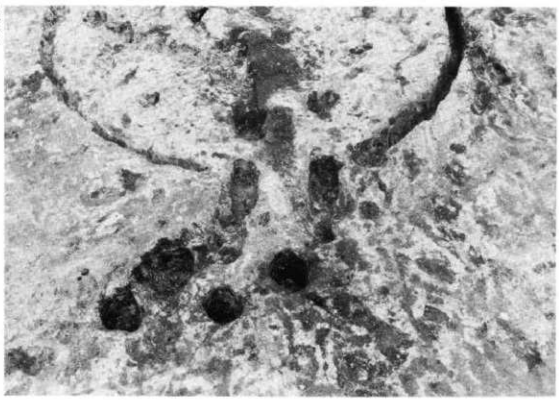


S I 15・64　確認状況(南→北)



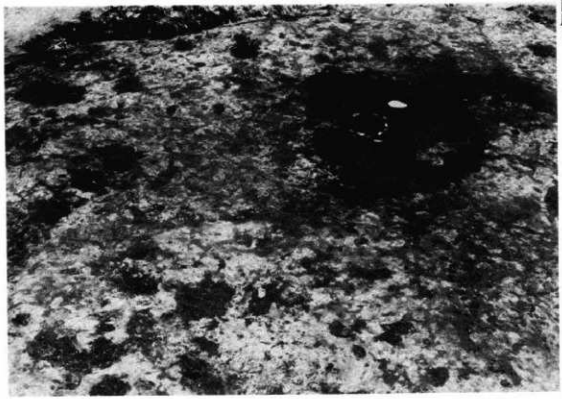
S I 15・64　完掘(南→北)

図版6



S I 15・64　出入口部分(南→北)

S I 15・64　壁溝、重複している(南→北)

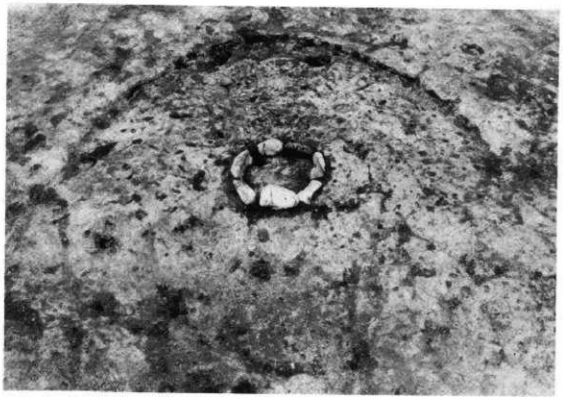


ＳＩ29　確認状況、ＳＩ31　完掘(北西→南東)

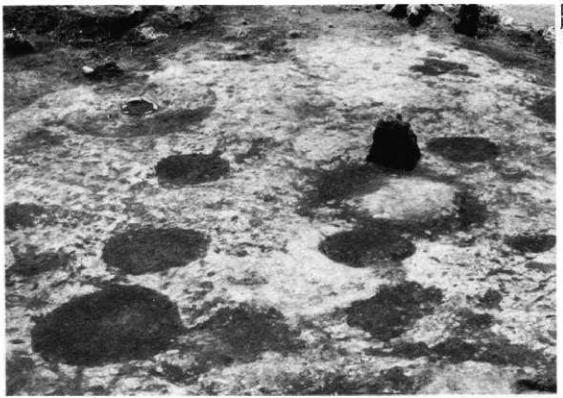
ＳＩ29・30、土坑群　確認状況(北東→南西)

図版8

ＳＩ29　ＳＫ59　完掘(南→北)



ＳＩ30　完掘(南→北)

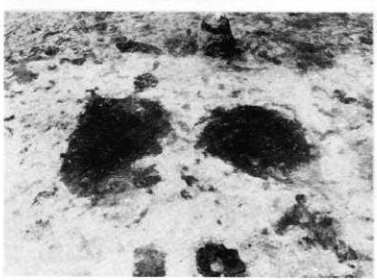


ＳＩ30　土坑群　確認状況(北東→南西)

ＳＩ55　完掘　土坑群確認状況(北→南)

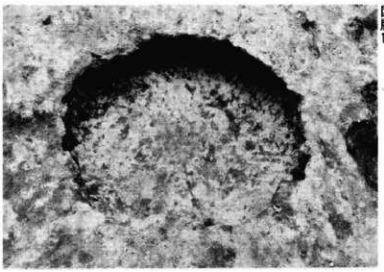
SK13　土層(北→南)

SK13　完掘(北東→南西)

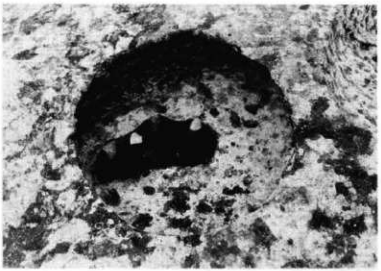


SK16・17　確認状況(南→北)

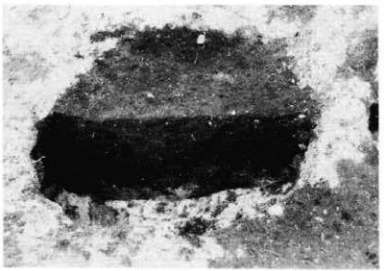
SK17　完掘(北→南)



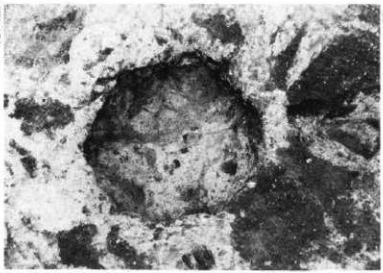
SK33　完掘(南→北)



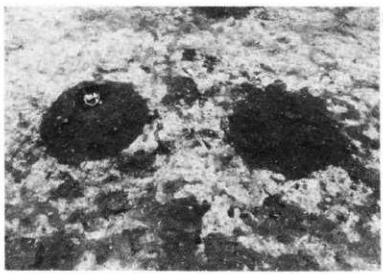
SK35　土層(東→西)



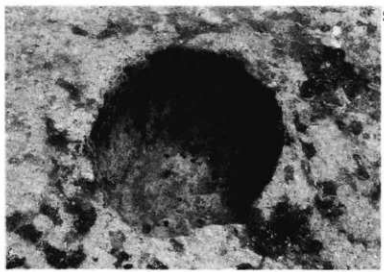
図版12



SK35　完掘(西→東)

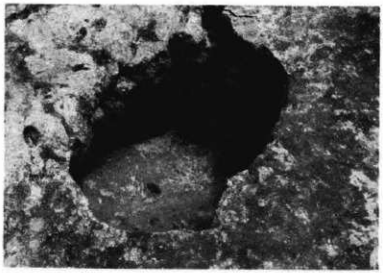


SK43・44　確認状況(西→東)

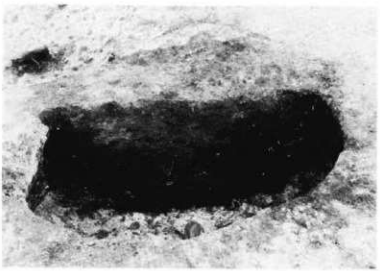


SK43　完掘(西→東)

SK45　完掘(西→東)

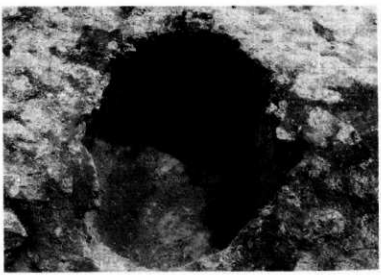


SK51　土層(北→南)

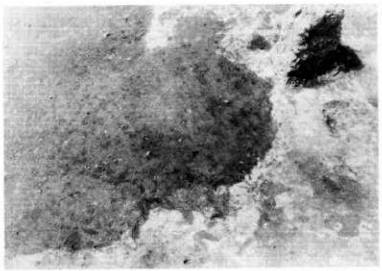


SK51　完掘(南→北)

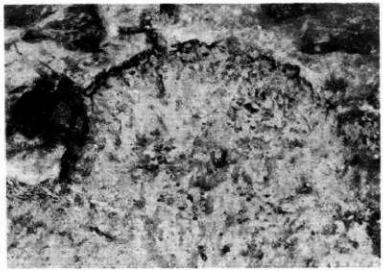
図版14



SK57　完掘(西→東)



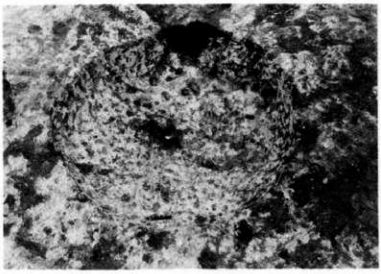
SK22　確認状況(南→北)



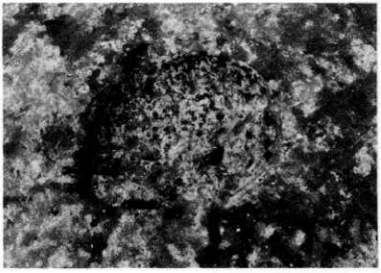
SK22　完掘(西→東)

SK25　完掘(東→西)

SK32　完掘(南→北)

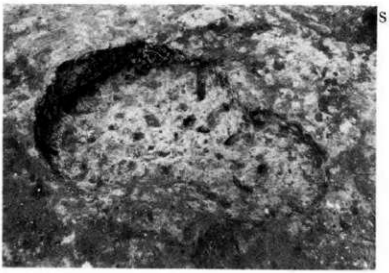


SK38　完掘(南→北)

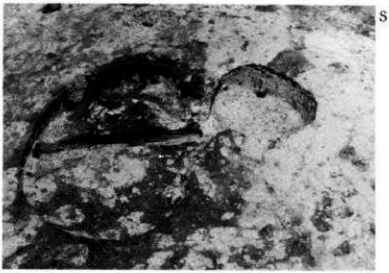


図版16

SK39・40　確認状況(南東→北西)

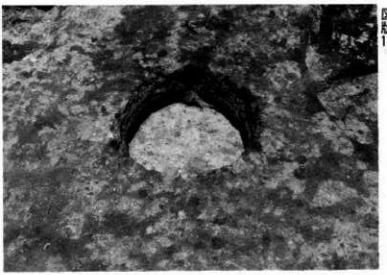


SK39・40　完掘(南→北)

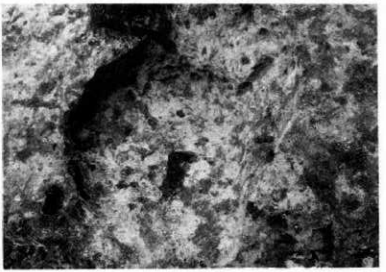


SK41　完掘(南東→北西)

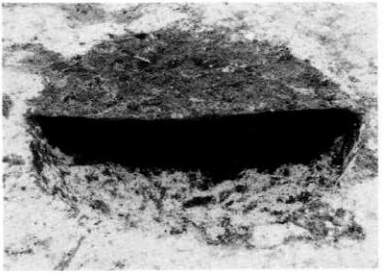
SK42　完掘(南→北)



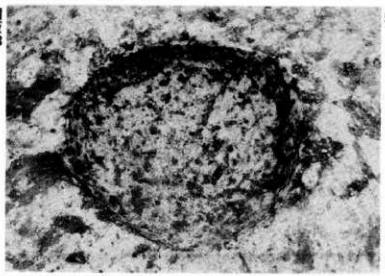
SK52　完掘(南→北)



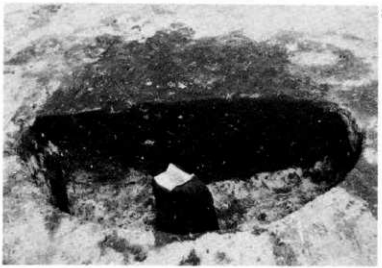
SK34　土層(南→北)



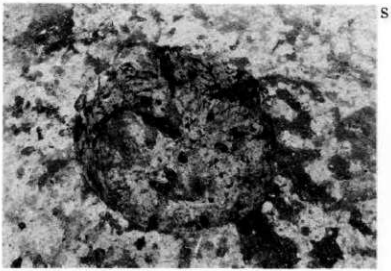
図版18



SK34　完掘(南→北)

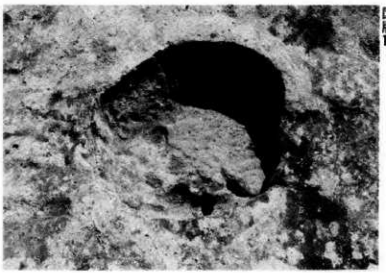


SK44　土層(西→東)

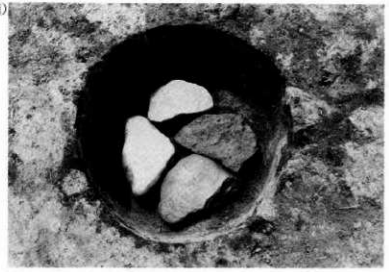


SK44　完掘(西→東)

SK48　完掘(西→東)



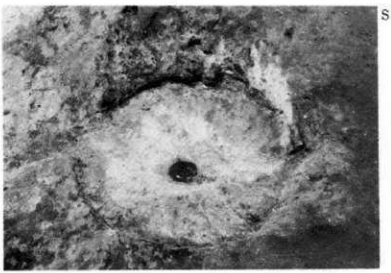
SK49　河原石出土状況(北→南)



SK60　河原石出土状況(南→北)

図版20

SK20、SD46　確認状況(東→西)

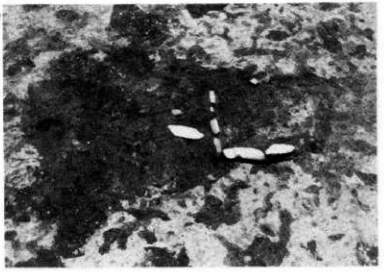


SK20　坑底面の柱穴(南→北)

SK20　完掘　沢2、SX61細跡
(北西→南東)

SR10 （南→北）

SX14 確認状況(北→南)



SX14 半完掘(東→西)

図版22

SX11　完掘(西→東)

SX12　完掘(東→西)

SX18　確認状況(東→西)

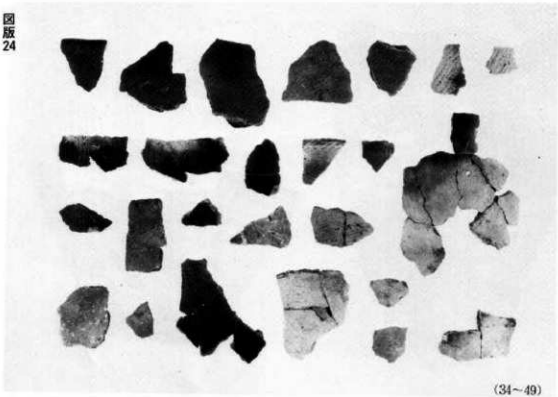
SR10

10

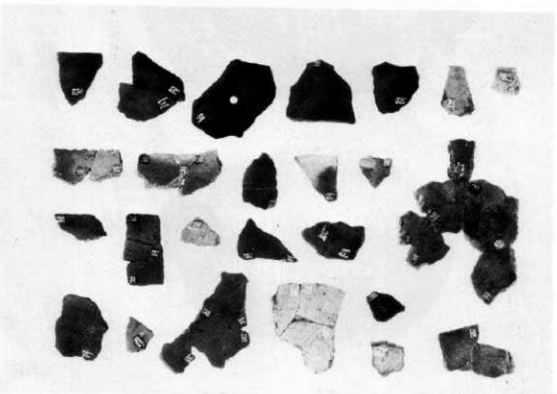
20

293

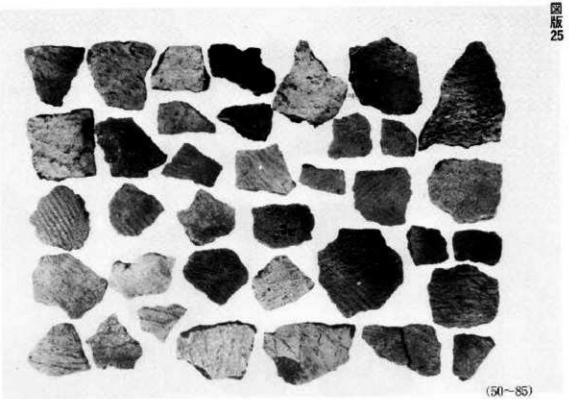
遺構内出土遺物　遺構外出土石製品



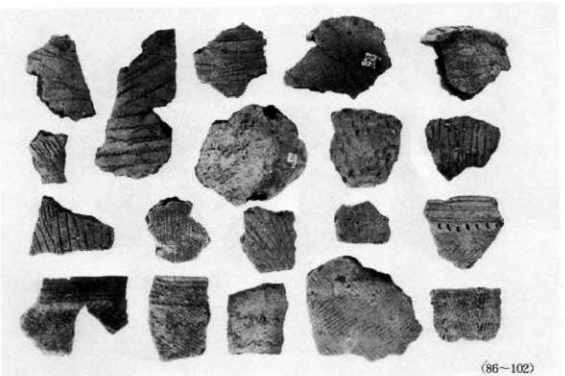
(34～49)



遺構外出土土器(1)　第Ⅰ群土器　上(表)下(裏)

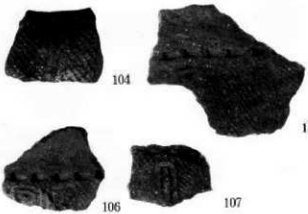


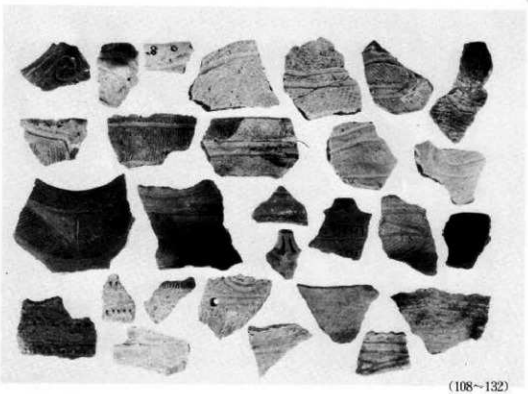
(50~85)



(86~102)

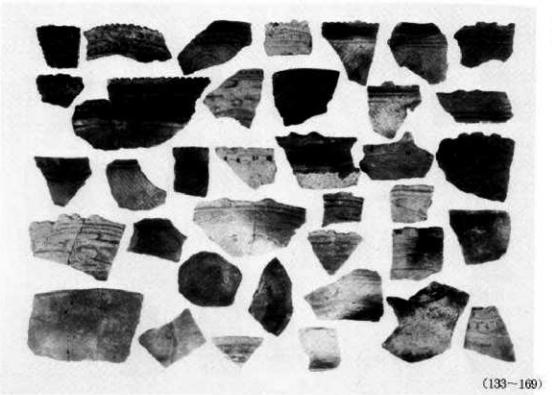
遺構外出土土器(2)　第Ⅱ群土器



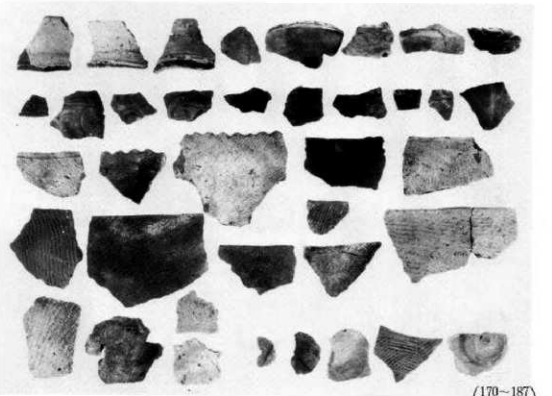


(108~132)

遺構外出土土器(3)　第Ⅲ群土器(上)　第Ⅳ・Ⅴ群土器(下)

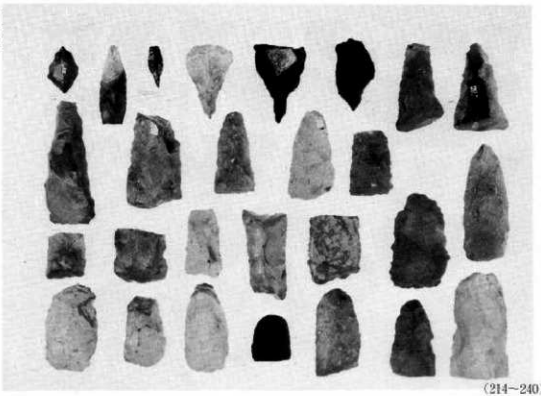


(133～169)

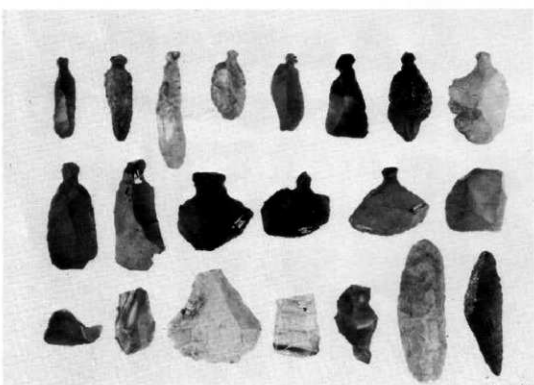


(170～187)
(194～213)

遺構外出土土器(4)　第Ⅴ・Ⅵ群土器、土製品

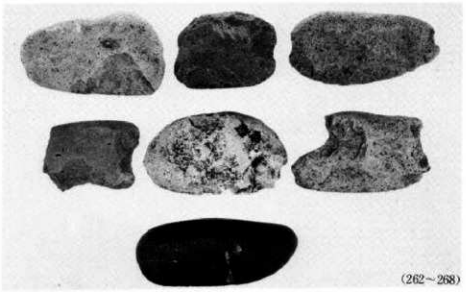


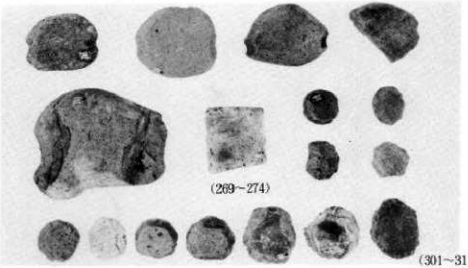
(214～240)



(241～261)

遺構外出土石器(1)　剥片石器





遺構外出土石器(2)　礫石器・石製品